

*Kobe 50th Anniversary*

*escape  
from*

# R50

# ANNIVERSARY

## Table of contents

局長あいさつ

## 発隊の背景

社会的背景／発隊式／部隊の編成／初代専任救助隊長手記

## 救助体制の移り変わり

救助隊の配置／神戸市消防救助隊の発隊経緯と歴史

## 国際消防救助隊（IRT）

国際消防救助隊とは／神戸市消防局IRTの歴史と実績

## 災害対応

阪神・淡路大震災／尼崎市JR福知山線鉄道事故／東日本大震災／熊本地震／広島災害

## 救助車両等の歴史

救助工作車／救助回転翼機／消防艇

## 救助課程

救助課程選考会／救助操法／神戸市消防局救助課程修了者／特別高度救助課程

## 救助大会

## 消防救助隊教育訓練

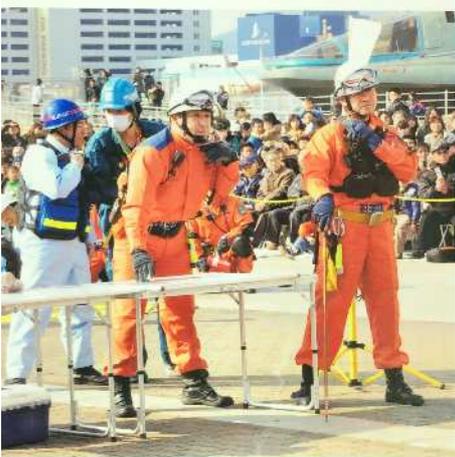
資格取得／消防救助隊教育訓練

## 未来に向かって

最新救助技術訓練／最新救助資機材

## 救助隊50周年を迎えて

職員メッセージ



『未来へつなぐ救助スピリット』

# R50 *memory*



# 成長とともに

～救助隊発足50周年記念～



消防局長 菅原隆喜

昭和43年に神戸市内のあらゆる災害から人命を救助する「消防救助隊」が神戸市消防局に発足されて本年で50周年を迎えました。

神戸市は、昭和30年代に入り高度経済成長とともに、三宮周辺を中心に都市化が進み大きく発展してきました。そうした街や市民生活の変化等により、多種多様な災害が発生する時代に突入しました。

このような時代の変化に対応すべく発足された消防救助隊が、今日では、国内で発生した大規模災害はもとより、海外で発生した地震等の大規模災害にも国際消防救助隊として出動するなど大きく成長した姿を大変うれしく思います。

発足から半世紀が経ち、その間、困難を極める災害を乗り越え、救助に関する知識、技術はもちろんのこと、資機材や車両、また活動服など様々な進歩を遂げ、現在では、特別高度救助隊や航空救助隊をはじめ、全12隊の救助隊が災害の発生に常に備え、あらゆる災害に対応をしています。

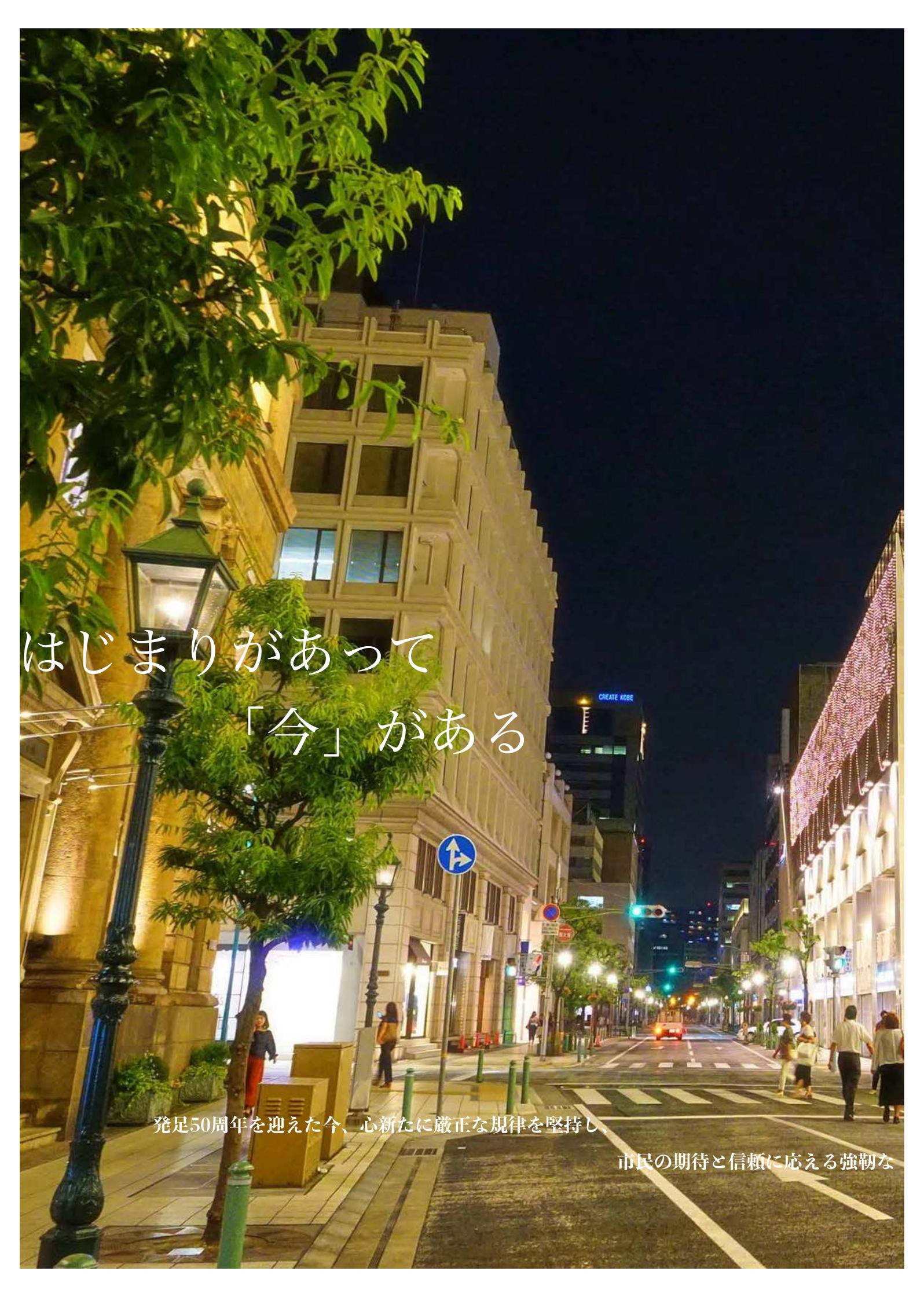
近年の災害をみますと、広島市で発生した大規模な土砂災害をはじめ、気候変動に伴う豪雨災害や今年9月に発生した台風21号、また、北海道胆振地方を震源とする地震災害など、想定範囲といわれるものを大きく上回る災害が頻繁に発生しており、消防救助隊に対するニーズは益々高まっているところです。

さらにはテロ災害等への備えも求められるようになり、社会情勢や災害形態が変化する中で、今まで以上にアンテナを張り巡らせ、五感を研ぎ澄まし、災害にも全力で対応しなければなりません。

これからも救助隊員としての、ゆるぎない誠実さ、高い倫理意識と責任感を身にまとい、必要な体力、知識、技術、装備を使いこなす技術力と安全への判断力を養うために、日ごろからたゆまぬ訓練に取り組み、いかなる環境下にあっても、窮地に陥った市民の命を救い、守るといふ確かな志が必要不可欠です。

この50年をひとつの節目とし、神戸市消防救助隊の歴史と記録を振り返り、先輩方により培われた人命救助に対する知識、技術そして救助魂（スピリット）を職員一人ひとりが受けとめ、これからの神戸消防の未来と発展のために伝承し、さらなる成長を期待しています。

平成30年12月25日

A nighttime street scene in Kobe, Japan. The image shows a wide street with a large, multi-story building on the left. The building has a grid-like facade and is illuminated from within. A street lamp with a green globe is in the foreground on the left. A tree with green leaves is in the middle ground. In the background, there are other buildings, including one with a blue sign that says "CREATE KOBE". The street is lit up with various lights, and there are pedestrians walking on the sidewalks. The overall atmosphere is vibrant and modern.

はじまりがあって  
「今」がある

発足50周年を迎えた今、心新たに厳正な規律を堅持し、

市民の期待と信頼に応える強靱な



「神戸市消防局救助隊」として市民からの視野に立った、しなやかで力強い職務の執行に日々、

勇猛果敢に邁進されることを期待しています。 岡本茂樹（76歳）

# 誕生

ここから始める

Inauguration  
of  
The  
Rescue  
Team

昭和43年5月20日、12名からなる消防専任救助隊が生まれ人命救助などに活躍することになりました。



初代消防専任救助隊

## 社会的背景 Social background

昭和40年代に入って、神戸市は地下街、高速道路、長大鉄道トンネル等の開通が相次ぎ、都市化の進展に伴い、各種の災害事故（火災、風水害、水難、交通、労働災害、山岳等）は、市街地を中心に、海に山に増加の一途をたどり、かつ、複雑多岐の状況にありました。

たとえば、ガス中毒、下敷、転落、溺水、はさまれ、生き埋め、感電、爆発等で負傷した人など、救出するためには特殊な装備や技術を必要とする事故が、昭和42年中に621件も発生しています。

これらの要救助事案の増加に対処し、人命救助体制を専門的かつ組織的に確立、強化し、これに関連のある業務を効果的に行うために、神戸市消防局では、「消防専任救助隊」を昭和43年5月1日に発足し、同月20日から運用しています。



発足式の様子



## 発足式 Launch ceremony

昭和43年5月20日午前11時から兵庫区荒田町3丁目の神戸市消防学校校庭で消防専任救助隊（芦田章隊長、隊員12人）の発足式を行いました。

神戸市消防局の消防隊員から選ばれた、火事や生き埋め事故などの人命救助を専門にする隊員が登場。芦田章隊長の宣誓、改發（かいはつ）消防局長の訓示に続いて、草色の活動服をつけた隊員がパツと校庭に散り、激しい気合いとともに腕立て伏せなどの「レンジャー体操」を行いました。続くレンジャー救助は訓練塔と校舎屋上の間に並行して張った2本のロープが舞台。「ウォツ、ウォツ」というかけ声とともに、腹ばいになる水兵渡り、足を使うモンキー渡り、身体をロープにくくって落下するスタンドフォール、屋上からのタンカ搬送を披露し、初任科生60人からもため息が聞かれました。当日は空気呼吸器、救助ロープ、人工蘇生器、潜水器具など『救急（救助）7つ道具』を展示し、その道具を積んだ救助専用車も同時に披露されました。

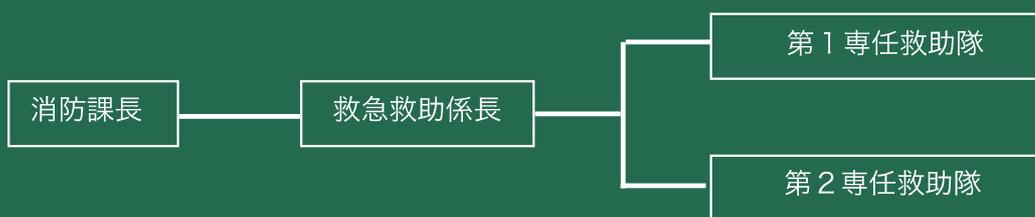


## 配置場所と部隊の編成

消防専任救助隊は、神戸市生田区（現、中央区）加納町6丁目7にある消防本部の直轄部隊として、警防部消防課救急救助係に配置されました。

消防専任救助隊は2交替24時間勤務体制により、常時1隊が出動可能な体制をとりました。1隊の編成は消防司令補（隊長）、消防士長（副隊長）、消防士（4名）の計6名となっています。

隊員は、陸上自衛隊富士学校のレンジャー救助訓練及び潜水救助訓練課程を修了した隊員（当市レンジャー救助訓練の指導者）で構成されています。



## 消防専任救助隊の出動基準

消防専任救助隊は次の基準で出動するほか、すべての要救助災害に出動しました。

### 第1出動（即時出動）

- 急報で、救助活動を必要と判断される災害事故。
- 灘・葦合・生田・兵庫（北神地区を除く。）・長田・須磨各区の建物火災で炎上出動の場合。
- 東灘・垂水（西神地区を除く。）各区の建物火災で特命第1出動の場合と、市内の建物火災以外の特命第1出動の場合。
- 負傷者が多数発生した救急事故の場合。

### 第2出動(要請出動)

- 現場最高指揮者から、出動要請のあった場合。

### 命令出動

- 本部長又は警防部長から出動命令があった場合。



各消防署から選抜された精鋭隊員たち

## 消防専任救助隊の現場

消防専任救助隊が出動したときは、次のような業務を行いました。

### 第1 出動時

先着の救急隊や消防隊と合同で、人命救助活動を行います。火災現場で人命検索の結果、逃げ遅れた人や、ケガをした人がいない場合は、消火活動をしやすいように警護線を設定し、見物人の整理等に当たります。

### 第2 出動時

要請された業務を行います。

### 命令出動時

命令された業務を行います。



当初の車両と資機材

## 災害防御活動以外の業務

消防専任救助隊員は、災害活動時以外においては、日課表に基づき、次のような業務を行いました。

- ・ 救助業務の基本的計画の作成
- ・ 救助業務・技術の指導研究
- ・ レンジャー救助訓練の指導
- ・ 救助統計
- ・ 救助情報の収集
- ・ 救助業務関係機関との連絡調整
- ・ 救助広報
- ・ その他・救急事務および通信勤務等の補助



東遊園地での披露

## 消防専任救助隊の装備

消防専任救助隊は専用車に次のような資機材を常時積載しました。この装備でほとんどの救助作業が可能ですが、特殊事案等で不足資機材の補充については、消防補給車を活用しました。

### 車両の諸元

車名 トヨタ・ランドクルーザー（FJ）

1963年式 排気量3860cc・125馬力 全長4.82m 幅1.72m 全高2.2m  
総重量2572kg 定員6名

### 積載資機材

携帯油圧ジャッキ1組 ロープ投射器1個 携帯ウインチ1基 エンジン  
カッター1基 空気呼吸器4個 救助用ロープ各種 スリングロープ（カラ  
ビナ付）10本 ナイフ1個 滑車1個 ロープ登り器2個 ボルトクリッ  
パー1個 大型ハンマー1個 スコップ2個 金てこ1個 強カライト1個  
トランジスターメガホン1個 防火衣1式 救命胴衣5組 救命浮環2個 潜  
水器具1組 密閉式保護服2着 簡易担架1個



昭和43年救助隊発足当時の救助工作車（日産G60）

初期は、まだ専用の救助工作車はなく、消防自動車  
を改造して運用しました。消防専任救助隊発足に  
伴い導入された「日産G 60」。当時は、装備より  
機動性が重視されました。



# 発足当時の理想

消防隊の全員が、救助技術を体得し高度な技術、体力を有する専任救助隊員と連携して、人命救助業務を遂行していくことが当面の理想です。

さらに、この専門的な技術、装備を有する専任救助隊を将来は東西に設置し、さらに各署に1隊の専任救助体制に及ぼすことが、当市における理想でした。

## 主な経過

- 昭和41年 3月 自衛隊レンジャー教官4名を招きレンジャー技術を導入
- 昭和41年12月 第1期 陸上自衛隊富士学校へ10名派遣
- 昭和42年12月 第2期 陸上自衛隊富士学校へ10名派遣
- 昭和43年 5月 神戸市専任救助隊発足
- 昭和43年11月 第3期 陸上自衛隊富士学校へ6名派遣
- 昭和44年 5月 東部方面専任救助隊を灘消防署に設置 消防課所属の救助隊を中部方面隊とした
- 昭和44年11月 第4期 教育植物園で救助研修実施(2週間14名)
- 昭和45年 5月 西部方面専任救助隊を須磨消防署に設置



鬼のかがみ跳躍



地獄の腹筋

## 救助隊の選考要件

項目	基準
走力(100m)	14秒以内
持久力(1500m)	7分以内
耐久力 (60kgを持ち50m)	14秒以内
けん垂	10回以上
幅とび	5m以上
腕立て伏せ	30回以上
かがみ跳躍	40回以上
腹筋(2分間)	30回以上
肺活量	4000cc以上

# 「地獄谷はまさに“地獄”だった！」

初代専任救助隊長 小野 亘

った！」

あと七時間あまりで新年を迎えようとしていた昭和四十三年十二月三十一日の十六時二十九分、磯上グラウンドで訓練中の専任救助隊に出動指令の無線がとびこんできた。「専任救助隊出動指令、六甲山大月地獄谷F2の滝で転落事故発生、直ちに六甲山東派出所へ出動せよ」この数秒間の指令の中に、悪戦苦闘のかぎりをつくしたあの救出救助活動が秘められていようとは・・・。

## 落石に注意せよ！

大晦日の繁華街をかき分け、寒風吹き荒れる表六甲ドライブウェイを、サイレンの音もけたたましく、救助車は縫うように快走し、指令二十五分後の十六時五十四分に六甲山東派出所へ到着した。



警察官と転落者の同僚とを乗せ、滝へ通ずる六甲オリエンタル

ホテルの裏で下車するとあたりはすでに夜のとぼり。五十メートルロープ一本、三十メートルロープ五本、滑車二個、照明具六個、ナタ、毛布、スリングロープ十五本、革手袋、カラビナ等が次々と準備される。現場までは少なくとも三十分はかかるだろう・・・。

転落者の同僚に聞けば、「十五時半ごろ、ロックライミング中、約二十メートルの高さから足をすべらせ転落、途中二～三回岩にからだをぶっつけ、滝つぼの中へ背中から落ちた。私は“笠井大丈夫か、どかけよったが動かない。急いで近くの岩の上に引き上げ、毛布やテントでからだを包み、すぐに救助隊をつれてくるから待っておれよと励まして、かけあがってきた。そのとき、意識はなかったが、呼吸は確かだった」という。

時間を逆算すると、すでに一時間半も過ぎている。転落者の状態を見なければ、救助策は決定できないと考え、以後の連絡のため、運転手の高橋君を車に残し、救助資機材を分担携行、雑木林をかき分け、懐中電灯の灯りを頼りに下山を開始したのが十七時十五分。五分も歩かぬうちに、六甲山特有の峻険な岩場道となり、歩行はさらに困難を極めてきた。谷底から吹きあげる風は身をきるように冷たく、雑木の揺れ動く

音は、「痛いよー、早く助けてくれー」と叫んでいるように聞こえる。気ばかりがあせるが、岩場は思うように動けない。

資材が肩に食い込む。吐く息は白く、すでに服は汗でグッショリ。隊員は黙々と下山する。時折、先頭の隊員から「落石注意」「足元注意」の音が、風に乗って遠くになったり近くなったりする。中間地点に野村君と警察官を残し、他の五名でさらに多くの資材を背負って下山を続行した。道は険しくなるばかり。風のざわめきだと思っていた音が、だんだん大きくなってきた。「あれは滝の音だ！。オーイ滝は近いぞー」そのとき先頭にいたぼくは、はずむ息を押さえて叫んだ。滝へ通ずる間道は、七月豪雨のため跡形もなく崩れ去り、約百メートル下方の谷底まで無惨な「地すべり」の跡をさらけ出している。

今までは暗闇だったのに、今この「地すべり」の跡に立って思索しているとき、神の恵みか、月がこうこうと足元を照らして下さってくれた。ロープを頼りに、この五、六十メートルの「地すべり」の跡を降りることにした。途中、ちょっと足をすべらせると、大きな石がウナリをあげて落下し、谷底でバシャンと大きく反響する。思わずロープを握りしめ「オーイ落石が多いぞ、一人ずつ降りてくるんだゾ」わずか六十メートルの距離が何百メートルにも感じ、一人ずつやっとの思いで滝つぼへ・・・。



## 生きているぞ、だが・・・

ごう音と水しぶきにかすむ滝つぼへ向かって「オーイ大丈夫かー」・・・聞こえないことはわかっていながら、叫びつつ黒い影に走り寄った。

「生きていてくれ・・・」祈りながら電灯を近づけ、ソーと毛布をめくると、淡い光の中に歯をくいしばりワナワナと震えている青白い顔が浮かび上がった。「生きている！」間に合ったゾ、無言で懐中電灯を大きく振ると、後続の隊員がバラバラとかけ寄ってきた。

まず救急処置だ・・・。負傷部位を確認すべく右手にさわったとたんに「ウン」と顔をしかめ苦しそう。肩甲骨から右上肢、右大腿骨に骨折がある。この調子だと腹部には相当の内出血が予測される。このまま眠ってしまうと大変なことになる。頬ペタを平手で叩き耳元で「しっかりしろよ！眠ってはダメだぞ！」と叫べば、かすかにうなづく。

急ぎょ、全隊員を呼び集める。「負傷者は重態だ、担架搬送以外に策はないが、山上へ搬送するか谷底に沿って搬送するか」・・・暗い山を仰ぎながら検討した結果、「担架では山上へは不可能、時間はかかっても谷底を下山しよう」と全員一致で決定した。

各隊員は手分けをして分散していった。福井士長と中部君は、応急担架用の立木を切りに・・・。黒木君は、中腹に待機している野村君へ救助策の決定を知らせに・・・。残ったぼくは、負傷者の服を切り裂き、タオルや肌着等乾いた布切れを押し込み、バンドやボタンをゆるめ、靴をぬがせ、傷を気にしながらやっどの思いでリュックをはずしたところへ、福井、中部の両君が帰って来た。電池はきれナタの刃先はボロボロにこぼれ、苦労の跡がうかがえる。骨折部位の応急処置を終わり、毛布にくるんで担架に縛りつけているとき、ガサガサと二つの影。フウフウいながら黒木野村両君が帰ってきた。「オーご苦労さん、疲れているだろうがすぐ出発だ・・・」



## 谷川に伏して

四名で担架をもち、一人は確保ロープ(担架に縛りつけて、崖等を降りるときに使用する)を持つ。交代の隊員はいない。負傷者の同僚にリュックやロープを持たせ、滝つぼを出発したのが十八時三十分を過ぎていた。月光のもと、滝しぶきを頭からかぶりずぶ濡れの隊員は、寒さに震えながらも、担架を持つ手に力をこめ歩一歩下山をつづけた。谷底までの「地すべりの跡」が第一の難関であった。ロープを張りめぐらし、二十分もかかりやっどの思いで谷底へ・・・。谷底に立ったときは、どの隊員も泥んこになりみるも無惨な姿であった。どうとう懐中電灯は電池がきれてもう用を足さない。月明かりがたよりだ・・・。

滝の音がほとんど聞こえなくなると、ギョッとするような野犬の鳴き声—。(後で聞いたことだが、六甲山は野犬が多く、冬期は食物がなく、群をなして家畜を襲い狼と全く変りないという)

ヨロヨロしながら、時には腰まで水につかり、次には堰堤から落ちる水を頭からかぶる。腹はグウグウ、足はギューギューと靴から水がとび出し、寒冷と空腹の連続で隊員の疲労は目に見えて大きくなる。

五名の隊員は、自分の持ち場を変わるだけで体を休めることもできない。「もう体力の限界にきてるのではなからうか」ふとこんなことがボヤけた脳裏をかすめる。月にすかして見るとずぶ濡れになった隊員は、重労働のため体温があがり、水分は水蒸気となってモヤモヤと蒸発している。「隊員のからだから後光がさしてい



ただ、歩一歩黙々と牛馬のごとく、ものいえぬドレイのごとく谷底の道なき道をうごめいているだけ……。ぼくは隊長としてジーンと目頭が熱くなった。なぜ、最初から応援を求めなかったのか……。このままでは隊員が倒れてしまう。後悔が脳裏を横切る。

「おい、しばらく休もう」。この一言で、所かまわず隊員はその場に座りこんだ。谷間のせせらぎは、身を切るように感じるはずだが、感覚の薄れた尻にはかえって快よい。ドサッと倒れれば空は十一夜。「月がきれいだなアー」だけがボソッとつぶやいた。

そういえばソ連の人工衛星（コスモス）がああ月のまわりを飛んでいるはずだ。おれたちはこのちっぽけな地球の、その中のちっぽけな谷に倒れ込んでしまっている。

クソ！ やったるゾ……。尻が冷たく、背中もゾクゾクしてきた。野犬の遠吠えはまだ続いている。負傷者も生死の別れ目で頑張っている。谷間をすかせば月明りの中にまだまだ幾重にも山並みがかすんでいる。この調子ではあと何時間……。時計は二十一時四十六分、滝を出発してすでに三時間も過ぎている。

座りこんでる隊員に、「応援要請してくるゾ、君たちは百衲でもよいから、頑張ってくれ」といい残し、不用な資機材を持ってころげるようにして、足元の悪い谷底を走りおりた。今まで担架を搬送しているときに比べ、なんと身の軽いことか、まるでフワフワと空中を遊泳しているようだった。担架搬送の何十倍、いや何百倍かのスピードでかけおりた何十分走っただろう、やっと地獄谷の谷川の砂地にでた。足元は平になり道は大きくカーブをして山の中へと続く。山道の下り坂を走ると救助車が見えた。無線にとびつき応援要請……。

かけつけた応援隊をひきつれて、谷間を駆け上がることに数十分、見えた見えた、ピッコを引きながらはうようようにして、今にも担架を落としそうな影、影、影……。よく頑張った！ 応援の隊員と交代し、救急隊へ引き渡すとホッとして、疲労の波がドッと襲ってきた。時すでに二十三時、滝を出発してから四時間、出動してからはなんと六時間半も経過していた。食わず休まずに歩き続けた六時間半……。

## 人知れずとも

資材を撤収して病院へかけつけると、すでに本格的な治療が始まっていた。警官がパラパラとかけつけ、しばらくすると家族も蒼白い顔でとんできた。家族の人々が、近くにいた警察官に盛んに礼をいっている。頭にかチンときた。しかし、口には出してはいけないぞ！われわれは、人から礼をいわれるために救助活動をしているのではない。人命救助は、救助隊の当然の職務なのだ。

とにかく負傷者は助かった、いや助けたのだ。責任を果たした満足感で病院の階段を降りると、ロビーのカラーテレビに、美空ひばりのにこやかな顔が、画面一杯に写し出されている。ああ、紅白歌合戦も終りだな……。充実感をしみじみ味わいながら帰庁へ向かう車中でボンボンと除夜の鐘……。「新年おめでとう、今年も頑張ろうぜ！」互いに励まし合う。延七時間三十分という二年越しの、まさに地獄の救出救助活動であった。



この物語にフィクションはない。

日夜市民の安寧秩序を保つため努力する千人の消防職員から選ばれ、激しい訓練に耐え抜き、厳寒の海に潜り、凍りつく山間を走り、紅蓮の炎をかいくぐり、濃煙に挑戦し、体力知略の限りを尽くして人命救出に当る職員、その名を専任救助隊という。

救助隊発足当時、中部専任救助隊であった小野 亘氏が山岳救助事案における救助隊の活動について、「雪」へ寄稿されたものです。掲載している写真は、当時の現地での訓練風景や現場対応しているものです。

なお、文中に身体の障害や人権にかかる差別的な表現、仮名遣いに誤った部分がありますが、当時の表現のまま掲載しています。ご了承ください。

## 寄稿

# 消防レンジャー 更なる飛躍を！！

救助課程第1期生 中尾清和

神戸市消防救助隊発足50周年おめでとうございます。

1968年（昭和43年）5月20日発隊以来今日まで、市民の方々に安全と安心を届けるため、歴代救助隊員が心一つになり、厳しい訓練に耐え幾多の試練を乗り越えて来たからこそと思います。1966年（昭和41年）3月、神戸消防にレンジャー技術が導入されて以来52年余り、レンジャーの心意気（レンジャー魂）と培われた高度な技術は脈々と後輩の隊員に引き継がれ、今や神戸消防救助隊は日本全国そして世界中の救助隊と手を携え活動している姿を見聞するにつけOBの一人として誇らしく思います。

私が消防レンジャーと係わりを持ったのは、救助隊発足を遡ること2年と2か月、1966年（昭和41年）3月でした。陸上自衛隊伊丹駐屯地所属のレンジャー隊員の指導で、各消防署から選ばれた10名の消防隊員たちは見よう見まねで体力調整とロープワークに汗をかいたものです。同年12月4日日本格的な技術習得を目的に、陸上自衛隊普通科教導連隊滝が平駐屯地（陸上自衛隊富士学校）レンジャー教育隊に入隊し訓練指導を受けたのですが、その内容は筆舌につくしがたいほどつらく苦しく厳しいものでしたが、訓練を通して“人”として生きていくのに必要な“心の支え”を学ぶことができたことは大きな収穫でした。

### 【レンジャー訓】

- (1) いついかなる時でも「グチ」や「悲鳴」は無用
- (2) いかなる場所、いかなる状況下でも自己の限界に挑み乗り越える
- (3) 頭で理解せず身体で覚える
- (4) わが身（命）を託せる仲間をつくれ

以後、この「レンジャー訓」は、私の大切な宝として心に刻み歩んできました。

1968年（昭和43年）5月20日、初代救助隊員に選任され、以後仲間達とともに災害現場活動、救助訓練指導に携わりました。隊員歴は10年に満たない短い間でしたが、災害現場（火災現場、労災事故現場）で人命救出中、3度生と死の狭間に身を委ねた私は、奇跡的に一緒に活動中の隊員達により助けられ、その時、わが身（命）を託せる仲間が傍に居てくれるのに気がついたのです。当時の「命の大切さ」を共有できる仲間（隊員）達は、私にとり恩人でもあり忘れてはいけない先輩、後輩であって感謝の念に堪えません。この時経験した現場を思い起こし自己流に詠んだのが次の一句です。

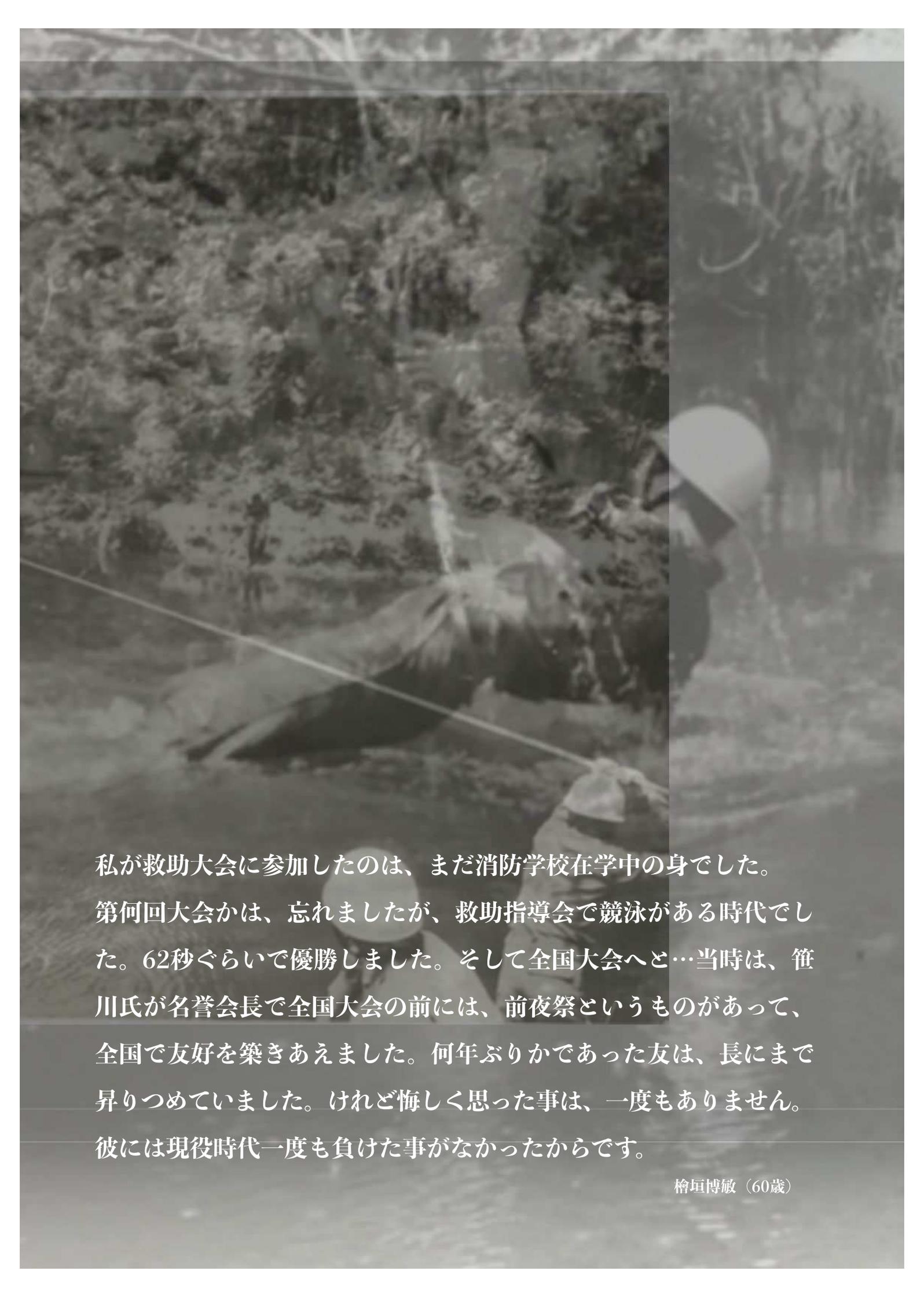
「襲い来る 炎と煙水と土 挑むわが命（み）を仲間に託し 限りある身のためさん(註)」

あれから約半世紀の年月が過ぎ去りましたが、こうして消防レンジャー生誕50年の記念を見聞できることは夢のようで、このうえない喜びに浸っています。

1日24時間 寒さ暑さもいどわず、千差万別の災害に身を挺して挑んでいる隊員の皆さん、本当に御苦労様です。きつい、危険、苦しい3K現場が救助隊員の活動場所なのです。挑む現場は一つとして同じ事象はないと自覚し、日頃から災害現場で経験と知識を身につけるよう努力を惜しまないでください。学識者の提言、知識、机上のマニュアルも大いに参考するに値しますが、それらにとらわれることなく、幾多の災害現場で得た「知識」と「勘」こそがあなた達にとって最高の教本であることを知り、頭で理解するものでなく、身体（心）で覚え経験で育てるものであることを知ってほしいと思います。

最後になりましたが、神戸市消防救助隊の発展と隊員の皆さんが「自信」と「誇り」を胸に国際港湾都市神戸の消防救助隊員として更なる活躍をされますことを期待し、お祝いの言葉とさせていただきます。





私が救助大会に参加したのは、まだ消防学校在学中の身でした。第何回大会かは、忘れましたが、救助指導会で競泳がある時代でした。62秒ぐらいで優勝しました。そして全国大会へと…当時は、笹川氏が名誉会長で全国大会の前には、前夜祭というものがあって、全国で友好を築きあえました。何年ぶりかであった友は、長にまで昇りつめていました。けれど悔しく思った事は、一度もありません。彼には現役時代一度も負けた事がなかったからです。

檜垣博敏（60歳）

救助体制

移り変わり

救助隊について

# 役割

救助隊は、火災現場における人命救助活動を行う隊ですが、高度経済成長に伴う交通事故、水難事故、山岳事故、特殊災害事故などの人的災害の増加及び大規模な地震災害及び風水害での土砂災害などの自然災害での救助活動も行っています。

救助活動は、消防機関の最重要任務の一つであり、最も困難な業務のため、救助業務に関する高度な知識・技術を習得した隊員と救助業務に必要な資機材と救助工作車が必要となります。

# 救助隊

救助隊員は、各種災害の最前線で人命救助活動を行うため、各種災害に精通し緊迫する状況下で冷静に判断を行い、専門知識や高度な救助技術及び救助資機材を活用し、要救助者を安全・確実・迅速に救助できる不屈の精神力と強靱な体力を持った消防隊員です。

# 救助隊の配置

## 法的整備

消防法第36条の2（昭和61年4月15日）において、人命救助を専門とした救助隊の配置が義務化されました。これは高度経済成長に伴う、災害事象の複雑多様化に対応するため、市町村における救助体制の充実強化を図ることを目的としたものです。

### 消防法第36条の2

市町村は人口その他の条件を考慮して総務省令で定める基準に従い、この法律の規定による人命の救助を行うため必要な特別の救助器具を装備した消防隊を配置するものとする。

## 救助隊の編成・装備・配置の基準

総務省令により、『救助隊の編成、装備及び配置の基準を定める省令』（昭和61年10月1日）が定められています。主な内容は、以下のとおりです。

- ① 消防本部及び消防署を置く市町村の配置する救助隊は、隊員5人以上で編成するよう努め、省令別表第1に定める救助器具及びこれを積載することができる救助工作車その他の消防用自動車1台を備えるものとし、その配置基準数は、原則として消防署の数と同数とする。
- ② 特別救助隊は、隊員5人で編成し、省令別表第1及び第2に定める救助器具並びにこれを積載することができる救助工作車1台を備えるもの。

配置基準	隊数
人口10万未満の市町村で中高層建築物、幹線道路、鉄道、空港、危険な作業を伴う事業場等に係る人命の救助が必要となると認められるもの。	1 隊
人口10万～人口25万の市町村	1 隊
人口25万～人口100万の市町村	人口15万ごとに1 隊を加算
人口100万～人口300万の市町村	人口30万ごとに1 隊を加算
人口300万を超える市町村	人口40万ごとに1 隊を加算

## 国際緊急援助隊の派遣に関する法律の制定（昭和62年9月16日）

昭和61年4月1日に国際消防救助隊（International Rescue Team of Japanese Fire—Service：IRT—JF）の結成及び合同訓練を実施。消防機関が海外被災地において、救助活動等に係る国際緊急援助隊活動を行う法的根拠を明確化しました。

## 緊急消防援助隊の創設（平成7年6月30日）

阪神・淡路大震災を教訓に国内における大規模災害へ対応するため、全国の消防機関相互による援助体制が整備されました。

## 高度救助隊及び特別高度救助隊の創設（平成18年4月1日）

救助活動に関する基準の一部改正が行われ、大規模な災害が多発している状況に対応するため高度救助隊及び特別高度救助隊の創設を行い、全国的な救助体制の強化が図られました。

種類・配置	主な保有NBC関連資機材	整備市町村
救助隊		
消防署の数の救助隊を配置	主に火災対応用資機材を活用	・消防本部及び消防署が設置されている消防常備市町村
特別救助隊		
救助隊のうち1隊を配置	上記資機材に加え ・陽圧式化学防護服 ・化学防護服 ・放射線防護服 ・除染剤散布器 ・有毒ガス測定器 ・放射線測定器	・人口10万以上の市町村 ・人口10万未満の消防常備市町村で、特に必要と認められるもの
高度救助隊		
特別救助隊のうち1隊以上配置	上記資機材に加え +地域実情により △携帯用化学剤検知器 △携帯用生物剤検知器	・特別区、指定都市、中核市 ・消防庁長官が指定する消防常備市町村 *自主設置可
特別高度救助隊		
高度救助隊のうち1隊以上配置	上記資機材に加え ・化学剤検知器 ・生物剤検知器 +地域実情により △検知型遠隔探査装置	・特別区及び指定都市 *自主設置可

# 神戸市消防救助隊

## 発隊経緯と歴史



### 救助隊の誕生

#### 神戸レスキュー！救助隊の発隊

昭和43年5月、人命救助を主務とする“消防専任救助隊”が誕生しました。  
発隊当初は、消防本部の直轄隊として、警防部消防課救急救助係に、第1専任救助隊、  
第2専任救助隊が配置されました。



消防救助隊発隊式の様子

# 救助歴史年表

昭和41年12月  
昭和42年12月  
昭和43年5月  
11月  
昭和44年5月  
昭和45年5月  
昭和47年1月  
4月  
昭和49年4月  
昭和54年4月  
昭和61年4月  
昭和62年10月  
平成3年5月  
平成5年10月  
平成6年4月  
平成7年1月  
6月  
  
平成11年8月  
平成12年4月  
平成13年4月  
平成15年12月  
平成16年8月  
平成18年4月  
平成19年4月  
  
平成21年3月  
平成21年3月  
平成23年3月  
平成25年10月  
  
平成27年8月  
平成27年10月  
平成28年4月

陸上自衛隊富士学校へ派遣（1期生）  
陸上自衛隊富士学校へ派遣（2期生）  
神戸市消防専任救助隊発足（消防課）  
陸上自衛隊富士学校へ派遣（3期生）  
東部方面専任救助隊発足（灘）中部方面専任救助隊へ名称変更（警防課）  
西部方面専任救助隊発足（須磨）  
消防航空隊発足（ヘリコプター）  
救助課新設  
中部方面専任救助隊を生田消防署へ所属替え（生田）  
消防航空隊を消防機動隊へ名称変更  
オレンジ色専任救助隊作業服へ変更・国際消防救助隊派遣隊員20名登録  
消防救助隊発足（東灘・葦合・水上・北・兵庫・長田・垂水・西）  
バングラデシュ共和国サイクロン災害に国際消防救助隊を派遣  
西消防署に専任救助隊発足・専任救助隊の名称変更（第〇方面専任救助隊）  
救急救助課へ名称変更  
阪神・淡路大震災発生  
緊急消防援助隊発足  
  
トルコ共和国地震災害に国際消防救助隊員を派遣  
長田消防救助隊が専任救助隊・葦合消防救助隊は山手消防救助隊へ変更  
専任救助隊の配置替え（東灘・中央・北・長田・西）  
山手消防救助隊を北神消防救助隊へ配置替え  
第35回全国消防救助技術大会の開催（神戸市）  
特別高度救助隊 『スーパーイーグルこうべ』中央消防署へ創設 神戸市内に1隊配置！  
特別高度救助隊を水上消防署へ配置替え（消防司令配置）  
東灘専任救助隊を灘消防署・西専任救助隊を垂水消防署へ配置替え  
第1回兵庫県下消防長会救助技術研究会を開催  
第1回兵庫県下消防長会救助技術研究会作業部会を設立  
東日本大震災発生  
特別高度救助隊を警防課へ編入し中央消防署へ配置替え  
本部特殊災害隊と一体的運用開始、特別高度救助・特殊災害担当係長配置  
中央消防救助隊を水上消防署へ配置替え  
第44回全国消防救助技術大会の開催（神戸市）  
水難救助体制の変更（特別高度救助隊・長田・垂水・水上）  
熊本地震発生



初期の救助隊員



トルコ地震派遣隊員の市長表敬



特別高度救助隊と本部特殊災害隊



オレンジ服の救助隊員



富士学校教育訓練

オレンジ服は、初任からの憧れであり目標でした。  
20年近く救助現場に携われたのは、消防人生の宝です。

現役の救助隊員へ、  
オレンジ服を脱いだとき、やりのこしたことがないように、  
救助できなかった現場に後悔を残さないように、  
日々精進してください！！  
オレンジ服が現場で活躍している姿を、楽しみにしております。

元特別高度救助隊 村上圭 44歳

## 「クールヘッドとウォームハート」（冷静な頭脳と温かい心）」

100年以上前、イギリスの経済学者が大学教授に就任する際に語った言葉である。

人命救助という崇高な使命を持ち、多くの危険が伴う災害現場の最前線で活動する救助隊員に欠かせないものとして、救助隊長会議で紹介したことがある。今後、自然災害の増加や科学技術の発達とともに、さらに活動危険も増すと思うが、この頭脳と心を持った多くの隊員を育て、安全で確実な救助活動を実践されることを願っています。

西岡保雄（63歳）



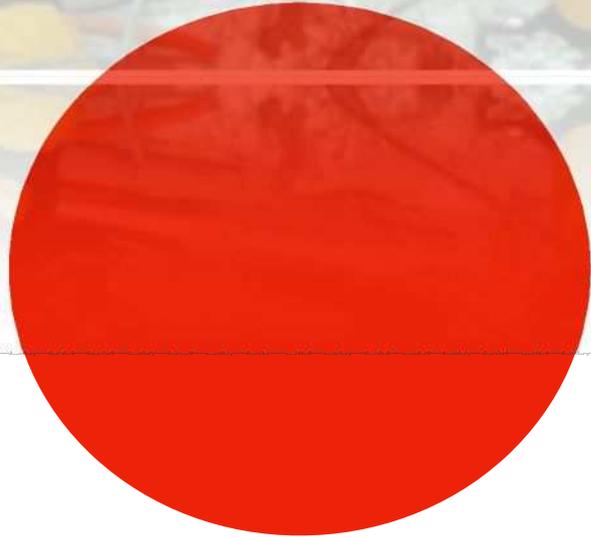
50年もの長きにわたり、人命救助に尽くし歴史を築いてこられた諸先輩

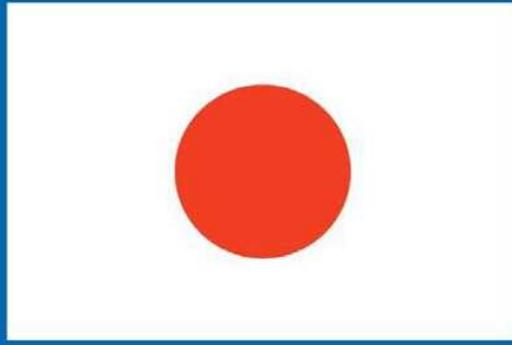
方、現職の皆さんに心から敬意を表します。一層のご活躍をお祈りいたします。

今後とも安全第一で！

神戸市消防局総務部長 谷真行（56歳）







# JAPAN DISASTER RELIEF TEAM JDR



# 国際消防救助隊

International Rescue Team

## 国際消防救助隊（IRT）とは

海外で大規模な災害が発生した場合に、消防機関の高度な資機材や技術を活用した捜索救助等の国際緊急援助活動を、迅速かつ的確に実施するため、全国の消防本部の協力を得て、1986年に発隊しました。

**国際緊急援助隊（JDR）**の一員として被災地に派遣され救助活動を行う部隊です。



## 国際緊急援助隊（JDR）とは

消防（IRT）、警察、海上保安庁、医療関係、構造専門家、外務省（JICA）で構成された総員71名の救助チームで、海外、特に開発途上国において大規模な地震や台風、火災などの災害が発生した場合に、被災国または国際機関からの要請により派遣される救助チームです。

救助チームの派遣期間は、1週間～10日間程度が目安とされています。



## 国際消防救助隊（IRT）の発隊

1985年9月に発生したメキシコ地震災害での他国救助隊の活動が連日報道され、さらに同年11月コロンビア共和国で発生した、ネバド・デル・ルイス火山噴火災害では、外務省から消防庁へ派遣要請があった場合の意向の打診があり、東京消防庁をはじめとする大都市消防本部の意向確認のうえ、救助隊の派遣準備が進められました。当時海外に消防本部の要員派遣制度はなく、コロンビア政府の意向もあり実際の派遣には至りませんでした。

同年12月に外務大臣から国際緊急援助体制の整備を講じること、自治大臣（現総務大臣）から、その一環としてIRTの派遣体制を整備する旨を、それぞれ閣議において報告を行い、消防庁ではIRTの派遣体制（救助隊編成、隊員登録、隊員資機材の選定、救助隊の名称等）の整備に着手しました。そして、1986年4月11日に皇太子殿下の行啓を賜り、東京湾埋立地において合同訓練を実施、IRTが発隊しました。

### 国際消防救助隊（愛称＝愛ある手）

International Rescue Team of Japanese Fire Service

ワッペン



IRT-JF

世界を象徴する

「地球」と、

消防の国際協力を意味する

「固く握り

合った二つの手」

（片方は“愛ある手”）とを組み合わせ、その上に国際消防救助隊、英語名のIRT-JFを配した。

カラーは、人命の尊さとその安全を表すグリーンを基調に、文字には我が国の消防救助隊のシンボルカラーともいえるオレンジを使用。

# ～～国際緊急援助隊の派遣制度の整備～～

## 法律制定以前のIRT派遣

IRT発足から約4ヵ月後の1986年8月にカメルーン共和国ニオス湖有毒ガス噴出災害に呼吸保護具の指導のため1名（東京消防庁）を派遣、同年10月にはエル・サルバドル共和国地震災害へ倒壊ビルからの救助活動のため9名（東京消防庁5名、横浜市消防局3名、消防庁1名）を国際緊急援助隊の派遣に関する法律が制定される以前に派遣しています。

## 国際緊急援助隊の派遣に関する法律の制定

1987年「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」（以下「JDR法」という。）が臨時国会で成立し、公布、施行されました。この法律によって、海外における救助活動は、消防職員のほか、警察職員、海上保安庁職員も行うこととなりました。

## 国際消防救助隊出動体制の基本を定める要綱の制定

JDR法の施行から3日後の1987年9月19日に「国際消防救助隊出動体制の基本を定める要綱」が都道府県知事あてに通知されました。それ以降に何度かの改正がされ、現在は、77消防本部599名の隊員が登録されています。

隊の編成は、あらかじめ日ごとに当番が指定された派遣体制表により定められており、要請日の当番消防本部の登録隊員をもって編成されます。

## JDRのチーム編成及び派遣実績

JDR法の制定からは、消防（IRT）、警察、海上保安庁、外務省（JICA）、医療、構造専門家によってチーム編成され、派遣実績については、JDR法が制定される以前のIRTのみでの派遣実績2回（H30.4現在）を含め、これまで計20回の派遣が行われ海外での活動を行っています。

派遣体制表

出動順位	グループ	第1	第2	第3	第4	第5	第6	第7	第8	第9	第10	第11	第12	第13	第14	第15	
	日付	1.2	3.4	5.6	7.8	9.10	11.12	13.14	15.16	17.18	19.20	21.22	23.24	25.26	27.28	29.30.31	
第1順位		東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	
		静岡	札幌	福岡	広島	横浜	北九州	名古屋	川崎	神戸	仙台	京都	千葉	さいたま	新潟	大阪	
		札幌	福岡	広島	横浜	北九州	名古屋	川崎	神戸	仙台	京都	千葉	堺	浜松	大阪	岡山	
		横浜	船橋	茨城	市川	藤沢	松戸	柏	佐倉・八街・墨ヶ井	川口	埼玉南西部	相模原	さいたま	川越	市原	熊本	
		八戸	長野	福島	秋田・横巻川	福山	東大阪	姫路	高崎	倉敷	豊中	高松	姫路	秋田	宇都宮	金沢	
第2順位		鹿児島	奈良	上野	大分	枚田	松本	西宮	岐阜	佐賀	和歌山	郡山	下関	高崎	守口・門真	松山	
		いわき	前橋	宮崎	福井	四日市	大津	高槻	富山	松江	高知	佐賀	鳥取県西部	富山	水戸	新潟	
		岡山	いわき	前橋	宮崎	福井	四日市	大津	高槻	富山	高知	佐賀	高知	富山	堺	浜松	静岡
		松山	鹿児島	奈良	上野	大分	枚田	松本	西宮	岐阜	佐賀	和歌山	郡山	水戸	高崎	守口・門真	
		熊本	横浜	船橋	茨城	市川	藤沢	松戸	柏	佐倉・八街・墨ヶ井	川口	埼玉南西部	相模原	姫路	川越	市原	

## IRTの訓練及び研修

国際消防救助隊出動体制の基本を定める要綱の第35条（長官の行う訓練及び研修）、第36条（消防機関における教育訓練）に基づき、年間を通して訓練、研修を実施しています。

### 長官の行う訓練

国際消防救助セミナー

全登録消防本部を対象とする研修の場です。JDR、IRTの体制や概念等を広く周知し、共有を図る機会として実施しています。

### 消防機関における訓練

国際消防救助隊の連携訓練

平成24年度から全国の政令指定都市が担当し、年2～3回、2日間の日程で訓練が実施されています。神戸市消防局は、平成25年度に訓練を担当し、近隣の33消防本部42名を召集し、兵庫県消防学校にて訓練を実施しました。

## IRT指導員制度

平成25年度からIRT訓練やJDR訓練等、さらにはIER受検の研修訓練体制を強化するため、教育訓練において核となる指導員を育成し、今後、消防本部・地域等にて率先してIRT訓練等を推進していく目的でIRT指導員制度が成立しました。

東京消防庁と政令指定都市の消防本部から各1名の計21名がIRT指導員として指定されています。

神戸市消防局も発足時から、特別高度救助隊員内のIRT登録隊員から指導員として1名が指定され、全国で実施されている訓練等で指導を行っています。

## JDRの訓練及び研修

JDR救助チームの訓練や研修は、JICAが主催して年間を通して訓練が実施されています。

（技術訓練） 7日間

JDR救助チームの統一手法を中心に基本訓練と想定訓練を行っています。

（総合訓練） 5日間（うち48時間は継続した訓練）

成田空港到着から被災国における現場活動、撤退までの約48時間の継続した訓練を行っています。

（成田メンテナンス会） 年4回

JDR携行資機材の整備や取り扱いを行い習熟する研修です。

（指揮計画運用研修） 年2回

団長、副団長、中隊長、中隊長サポートの指揮を任務とする隊員を対象として研修が行われています。

# 神戸市消防局IRTの歴史と実績

## History and Performance

### 神戸市消防局のIRTの実情

神戸市消防局は11名の隊員をIRTに登録しています。当初は各専任救助隊から登録していましたが、現在は特別高度救助隊が登録することとしています。

神戸市消防局は毎月15日～18日までの4日間が当番日であり、この間に派遣要請があれば、神戸市消防局の隊員が派遣されます。

神戸市消防局は平成3年バングラデシュのサイクロン災害と平成11年トルコ地震災害への派遣実績があり、海外で救助活動を行っています。



## バングラデシュサイクロン災害

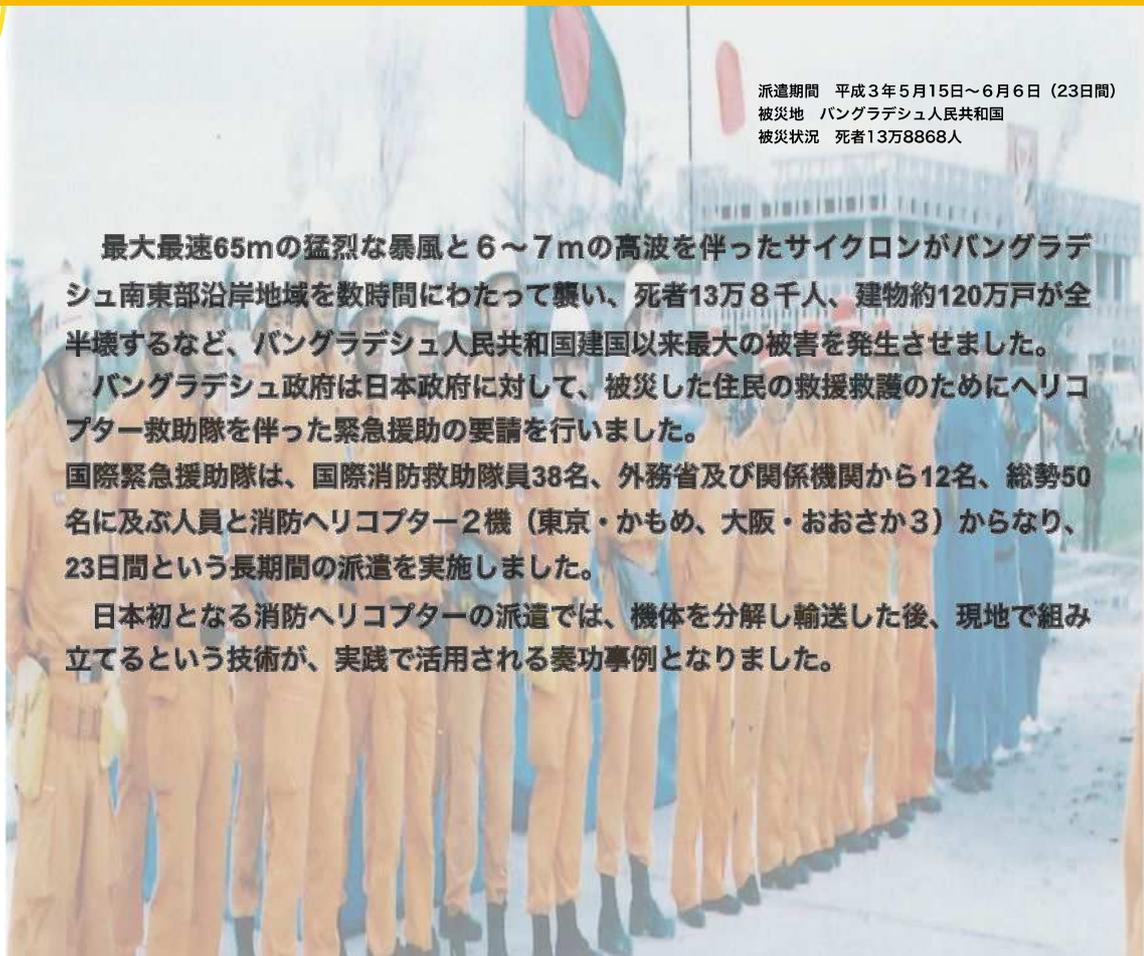
派遣期間 平成3年5月15日～6月6日（23日間）  
被災地 バングラデシュ人民共和国  
被災状況 死者13万8868人

最大最速65mの猛烈な暴風と6～7mの高波を伴ったサイクロンがバングラデシュ南東部沿岸地域を数時間にわたって襲い、死者13万8千人、建物約120万戸が全半壊するなど、バングラデシュ人民共和国建国以来最大の被害を発生させました。

バングラデシュ政府は日本政府に対して、被災した住民の救援救護のためにヘリコプター救助隊を伴った緊急援助の要請を行いました。

国際緊急援助隊は、国際消防救助隊員38名、外務省及び関係機関から12名、総勢50名に及ぶ人員と消防ヘリコプター2機（東京・かもめ、大阪・おおさか3）からなり、23日間という長期間の派遣を実施しました。

日本初となる消防ヘリコプターの派遣では、機体を分解し輸送した後、現地で組み立てるといった技術が、実践で活用される奏功事例となりました。





派遣隊員  
救助2小隊長 消防司令補 井上雅文（生田消防署）  
救助隊員 消防士長 田中廣一（瀬消防署）  
救助隊員 消防士長 吉田一志（須磨消防署）  
救助隊員 消防士長 村上 寛（生田消防署）

※派遣当時の階級・所属



大阪市消防局のヘリコプターが分解され、現地にて組み立て活動をしました。

バン格拉デシュの人たちを一刻でも早く救援するために、現地で調達した50 t クレーンを活用しての飛行機からのヘリコプターの荷降ろし作業は、炎天下のなか約6時間におよび、引き続きメカニック達は徹夜でヘリコプターの組み立て作業を行いました。

蒸し暑い作業場内では、照明に群がっている虫の数の驚き、アブラゼミに似た10 cmほどもある大きな虫や小さな虫が無数に飛び回って仕事の障害となり、デリケートなヘリコプターの機能に影響を及ぼしてはと大変気を遣い、さらに作業場内に住み着いた鳥たちのフンにも悩まされながらの作業を経て、1機目の東京「かもめ」が約11時間後に組み立てられました。その翌日に、大阪「おおさか3」の組み立ても完了し、両機とも無事にテストフライトを成功しました。

東京消防庁としては、訓練で解体・組み立てを実施していたことから海外においても組み立てる自信はあったものの、整備資材も十分に確保されていない海外被災地での成功と日本国として外国の空をヘリコプターが飛ぶのは初めてで、雄大なガンジス川の上を赤い消防ヘリコプター2機の編隊飛行を全員がこの現実をかみしめ、表現できないほどの大変な感激だったとのことでした。

救援活動を行う、空港から40 km離れたサンドウィップ島は、島全体が水浸しになり水田地帯のようになっていました。ヘリポートへ近づくと、あちこちの集落から無数の人たちが走って集まって来る状態で、他の島も全て同じようであり、農産物の生産ができるような状態でなく、沿岸部へは、巨大な漁船、荷物船等が数十隻も打ち上げられ、赤さびた船体をさらけ出し、なすすべもない状態でした。

日本隊の救援活動地は、サイクロンの被害が大きく現に困窮しており米軍等の大型ヘリコプターが着陸できない地域となりました。救援活動は、クツブディア、ハティア、サンドウィップ、ウリ・チャール、マルタバリの5つの離島への輸送となりました。

現地での衛生状態は極めて悪く疫病のほとんどが存在しているといわれている状況で、隊員たちは下痢に悩まされる者が続出しました。若干回復してもまた...という状態でした。そういった疫病への感染の恐れのため、隊員たちはトラックで搬入された救援物資を降ろし、ヘリコプターに積載するため1個1個を重量測定し、物資管理を行いました。1日に1回来るスクールから物資を守るために、防水シートを用いて保管する等の配慮も重要でした。

日本隊によるヘリコプターの救援活動は、1日に5～6回のピストン輸送で延べ112回の飛行を実施しました。

活動にあたっては、政府及び他国の援助隊と協力し、平素培った精神力や技術を遺憾なく発揮し、現地の人たちから「赤い神様」と言われるほどの活躍をされたそうです。

# トルコ地震災害

派遣期間 平成11年8月17日～8月24日（8日間）  
被災地 トルコ共和国ヤロヴァ地区周辺  
被災状況 死者1万5370人、負傷者2万3954人

第1次派遣隊は、イスタンブールに到着後、被害が大きく救助チームが入っていない中都市「ヤロヴァ」に現地時間の平成11年8月18日20時00分に到着し、直ちに倒壊家屋などの検索救助活動を開始しました。

第2次派遣隊は、現地時間翌19日5時00分に「ヤロヴァ」に到着して第1次派遣隊と合流し、昼夜間を通じた継続的な活動が強化されました。

日中は、気温が37度にも達し、また、サッカー場での野営を実施しながら、昼夜間を通じた救助活動を22日まで懸命に実施しました。

この結果、倒壊家屋から6名を救出しました。

## （神戸市消防局の救助隊員の活躍）

阪神・淡路大震災で当時から救助隊員として救助活動に従事した隊員が、今回のトルコ地震災害へ派遣され、現地で救助活動を行いました。

トルコ地震災害は、深夜の地震であったため、ほとんどの要救助者は、倒壊した住宅の下敷きとなり、倒壊した低層集合住宅の多くはすべての壁がつぶれて、各階の床がすき間なく重なり、パンケーキ状の崩壊を起こした状態でした。トルコの町で普通に見られる建物は、鉄筋コンクリートで作られた重い床を、鉄筋コンクリートの細い柱で支えて築かれていて、壁は中空の軽量ブロックを積み上げて漆喰を塗っただけの建物で、強い揺れにより一気に崩壊しました。パンケーキ状に重なり合う強固な床は、救助活動の大きな障害になりました。

この様な、非常に厳しい災害現場の状況でも、神戸市から派遣された救助隊員は、阪神・淡路大震災で培った経験から、倒壊建物において、進入できそうな開口部を選定し、人命探査装置や削岩機などの高度救助資器材を駆使しながら活動し、派遣隊内でも非常に重要な役割を果たしました。



(日本救助チームに対するトルコ国内の反響)

- 1 地震発生から時間が経つとともに国内でも関心事となり、救助チームに対して通訳の申し入れ、支援物資の申し入れなど数多くの善意の声が届けられました。
- 2 現地で活動する国際緊急援助隊に対して感謝が寄せられ、また、救助活動に関する詳細な報道が数多くなされました。



派遣隊員

副隊長 消防司令 岡田幸宏 (消防機動隊)

救助隊員 消防司令補 八代谷徹 (生田消防署)

救助隊員 消防士長 岡田敏幸 (生田消防署)

救助隊員 消防士長 村上正人 (須磨消防署)

※派遣当時の階級・所属

# 活動隊員による手記の紹介

派遣当時の写真・階級で掲載

## バングラデシュにおける国際救助隊

神戸市消防局  
消防司令補 井上 雅文



平成3年度専任救助隊特別強化訓練開始日である5月13日16時30分頃、救助課から「バングラデシュへ派遣されるかも知れないがもしも派遣決定すれば行ってくれるか。」との電話があった。

即座にいいですよとの返事した後、神戸の派遣日は7～12日のはずなのにまた、災害発生してから2週間以上もたっているのに何をするのか等、いろいろなことが頭の中を駆けめぐり複雑な心境であった。

帰宅してから身の回りの物を準備し、連絡を待った。23時05分、電話が鳴り、正式決定の通知を受けた。

14日、局での発隊式で辞令を受け取り、また、助役、局長等の激励を受け、気持ちも新たに使命達成のために頑張ろうと心に誓った。その後、携行資機材の準備、コレラの予防接種を受け明日の出発に備えた。

15日、助役、局長、職員の見送る中、一路新幹線で東京に向かい、自治省での国際消防隊の発隊式に臨んだ。

16日、自治省での会議に出席し、バングラデシュの国勢、災害状況、明日の予定について説明を受け、宿舎に帰り携行資機材の点検・詰め込みを行った。

17日6時30分、宿舎を出発、川崎市消防局のバスで成田空港に向かう。到着後、VIPルームにて国際協力事業団職員から派遣に関する説明を受け日本を飛び立つ。

自分が本当に日本の国際救助隊員としてバングラデシュへ行くことを実感した。今は不安の方が先にたつ。日本との気候の違い、病気、食べ物、言葉等考えればきりが無い。

しかしここまで来ればやるしかない。

ダッカ空港に到着し、ハンガーでの会議で活動方針が示され自分達の役割がわかり、活動意欲が湧いてきた。

朝ホテルを出る時の暑さ、湿気の多さには驚かされた。

街の中には人がたむろし、わけもなく歩いている者が多い。またベエビーと呼ばれる小型三輪車、力車、トラック、自転車が多く、いたる所でクラクションが鳴らされ騒然としている。

マイクロバスで陸路チッタゴンへ移動中、JICAの成瀬、池島さんからバングラデシュについていろいろなことを学んだ。これからの救援活動に必要と思われる言葉、待て……アステ、ない……ネイネイ、終わり……シエン等。

被災地の情勢についてベンガル湾周辺に住んでいる人は、自分たちの住んでいる所が危険であるのがわかっていて住んでいる。もともと貧乏な人たちで、安全な所へ行けない。

また、北海道の1.8倍の土地に1億2000万人位住んでいる。

昼食の時、生活習慣の違いを経験するため、初めて手でカレーを食べたがなかなか上手に食べられなかった。

12時間をかけバスでの移動であったが、バングラデシュのことを少しでも分かることができたので、今後活動する上で参考になり、良かったと思う。

チッタゴンの宿舎に着いて、明日からの活動に備えて食事を取るためにドルをタカに替える。タカはものすごく汚れたものばかりで、タカを触ると病気になるのではないかと思うほど汚れている。

宿舎からチッタゴン空港へ向かう途中、いたる所にレンガ塀が倒れ、修理している。街の木々は枝が折れ倒れているものが見かけられるが、折れた枝から新芽が出ているのには驚かされた。

初めて大阪のへりに乗り被災地を上空から見て、なんと高低差のない土地だろう、島は一面水浸しのように見え、水に浸かっている所といえば道と民家が建っている所と民家が建っていた所だけである。

へりが着陸し、物資を渡した時の現地の人々の目は、チッタゴンでは見ることでできない獣の目に近いものを感じた。彼らにとって、援助に来ているのはどこでもいいのである。

11日間物資を各離島へ搬送したが、どこでも被災民があふれ、飢えを訴えている。被災民たちは救援物資の配給で飢えに耐え、一日一日を懸命に生きている。その姿を見ていると、少しでも多くの物資を搬送し助けたいと思った。

救援活動を終えダッカを引き揚げてから、へりの解体作業、JICA、大使館のレセプション等があり、一日一日が早く過ぎ、帰国の日となった。

やっと日本に帰れるとなると、妻、子供に逢いたいな、今何をしているのか、いろいろなことが頭の中を駆けめぐる。

ダッカ空港でJICA職員、大使館の方々の見送りをを受け、私たちは少しでもバングラデシュの国のために貢献できたと思い、帰国の途につく。

思えば国際緊急援助隊50人以上にもたくさんの人々の支えがあってこそ、この救援活動があったと思う。

成田に到着して、たくさんの方々に出迎えられ日本に帰って来れて嬉しかった。日本で、本当にいい国だと思った。

# バングラデシュ派遣について

神戸市消防局  
消防士長 田中 廣一



消防救助近畿地区指導会へ向けての訓練初日である5月13日16時頃であった。ランニングを終え汗を拭いていた時、救助係長から電話があった。

「バングラデシュ・サイクロン災害への出動要請の打診」であった。

22時のニュースで「政府は国際緊急援助隊として50名の派遣を決定し、その多くは消防隊員である。」と報じた。

この直後、救助係長から正式派遣を電話で知らされた。

さっそく家族にその旨を話したが私の意志が堅いことを察してか、「体に気をつけて」の一言であった。

翌日14日から成田へ向かうつもりでいたが神戸出発は15日と聞かされ、準備に関しては慌てることなく救助課の準備リストに従い、着々とことを進めることができた。

翌14日、局に集合し消防局長、神戸市助役に報告をしていくうちに、今回の任務の重大さがじわじわと身にしみてきた。

翌15日、多勢の上司、同僚たちに見送られ、新幹線で神戸から東京へ向かった。

東京駅下車、地下鉄で自治省消防庁へ向かう。

途中、一般市民に「そんな格好をしてどこへ行くのか。」と尋ねられた。「バングラデシュだ。」と答えると、「がんばれ」と激励の言葉が返ってきた。

自治省の待機室で今回派遣されることになった他都市の隊員たちと一緒にいる。東京、大阪の大人数に比べ、神戸は4人だけの少数のためか、心細くなった。

出発前日、小隊長から会議についての報告を受けた。

JICAがどこまで用意しているのかわからないため、局が用意したものの中で不要として省いていた物（食料、水）をできるだけ持って行くことにした。

17日9時、成田空港北ウィング集合、デューティーフリーで嗜好品を購入。どれだけ必要なのか見当がつかず、とりあえず2週間分を購入、空路バングラデシュへ向かう。

機内では英語、ベンガル語だけが通用し、これからは日本語は通じない。前日購入していた英和・和英辞典を即使えるよう手元に準備する。

言葉の次は食事である。機内食は決して口に合うものではなかったが、これからのことを考えてなるべく食べるよう努力した。

深夜、ダッカ空港到着。機外へ出ると予想以上の湿気、そして粗末な空港建物が待ち構えていた。

休む間もなく荷物整理の作業にとりかかった。

これからこの気候の中、このペースで働くと思うと、体力がもつかどうか不安になった。

翌18日、目が覚めるとすぐに部屋から外を眺めた。街には人があふれていた。

ダッカから陸路チャッタゴンへ向かう。

ベンガル語が話せるJICA職員が同乗してくれて心強い。オレンジ服に身を包んだ我々異国人にベンガル人の視線が集中する。

交通は無茶苦茶で、やたらスピードを出して走るドライバーに「アステ（ゆっくり）」の声をかける。

その運転にもやがて慣れていった。

途中、チャイニーズレストランで昼食をとることとなった。辛いカレーとペプシコーラがマッチしてうまいのだが、手で食べているのでうまく食べられない。

陸路は想像以上に整備されていたが、チャッタゴンに近づくにつれて悪路が多くなり、道路脇の家々にもサイクロンの爪痕が伺える。

19時45分、チャッタゴンホテル・アグラバードに到着。

当初、野営を想定していたのでホテルに泊まれるなんて夢のようである。

ここでは東京消防庁の海老澤隊員と同室になる。彼は英語が話せるので頼もしい。

活動初日、空港の軍の施設で荷物の整理を行う。

昼食はビスケットとジュースで、これだけでは力が出ない。以後、レトルト食品が届いてからはまともな食事ができた。これから毎日50人分の昼食を用意しなければならない。各隊当番に当たると一日がそれに費やされる。

いよいよヘリ到着。本来の活動に入るが最初はやたら人の搬送が多く、空港に山積みになされた救援物資はいっこうに減らない。早く持って行ってあげたいのにイライラする。

ようやく作業が軌道に乗ってきた。もうすでに5日が経過している。

最初に見た島はクトゥップリア島であった。空から見るその島には緑がない。土地の高低もなくベタツとした感じを受けた。

島全体が30フィートの高波で洗い流されたはずなのに生きている人がいるなんて。改めて人間の強さ、生に対する執着に驚かされた。

とても人の住める所ではない。こんな所にまで住まなくてはならないほど人口が増えてしまったバングラデシュ。

本来なら島に残り、島民1人1人に物資を配り、被災民とふれあう機会を持ちたかったのだが、それはとても危険だと許されなかった。

それでも物資を降ろし飛び立つヘリに向かって手を振る島民の姿を見た時、今回の任務につけて本当によかったと感じた。



# バングラデシュ派遣

神戸市消防局  
消防士長 吉田 一志



5月17日、いよいよ日本出発。

朝早く起きて荷物を点検し川崎市消防局との待ち合わせ場所へ向かい、マイクロバスにて成田へと向かった。

成田に着いて東京、大阪の隊員と合流し数々の手続きを行い、VIPルームで出発式を行い、1800ドルの資金を受け取り、いよいよ行くんだという緊張とどんな仕事をするのかという不安で頭はいっぱいになった。

バングラデシュ航空の飛行機に乗り込みいよいよ出発。しかしこの時すでに1時間以上遅れており、飛行機、海外が初めての私としてはとても不安な気持ちになった。

いよいよ離陸、飛行機の加速感到感動しながらも訳のわからないスチュワーデスの救命胴衣等の説明、食べ慣れない機内食と、私にとっては不安と好奇の思いだった。

長い飛行機の旅、その間、他の本部の隊員と話をしたり資料を読んだりしたがバングラデシュについての情報はさっぱりわからず、現地での仕事の内容もわからないため不安ばかりがつのった。

シンガポール、バンコクと経由していよいよダッカ空港へと到着。

飛行機を降りてバングラデシュの地を初めて踏んだ時、とにかく暑いと思い、次になんともいえない臭いに気づいた。日本ではあまり嗅いだことのない臭いと暑さに驚く間もなく、さっそく仕事待ち受けておりハンガーへと移動した。

そこで見たこともない大きな虫を目の当たりにして大変な所に来たどつくづく思ったが、今思えばまだまだ序の口であったとは、その時思いもよらなかった。

翌5月18日、チャッタゴンに向けて出発。

朝6時に起きてマイクロバスでダッカ空港へ行きトラックに物資の積み込みを行い、一路チャッタゴンへと向かう。JICAの職員2名同乗。（後に我々の父母のように世話をしてくれる。）

途中トラックとはぐれてしまい、JICAの職員もトラックを探すためにバスを離れたため、私たちは現地人に取り囲まれ30分程暑さと恐怖の時間を過ごした。

チャッタゴンのホテルで約2週間生活を送った。きれいなホテルだと思っていたが、日がたつにつれ古さが目につくようになり食事の種類が少ないためにあきてきてしまった。

街は活気にあふれており、住民は人なつこく我々には親切にしてくれたように思う。

ホテルから活動拠点であるチャッタゴン空港まではワゴン車で移動したのだが、この車がひどい代物でクーラーはなく椅子はガタガタと動き、雨が降ればクラッチが滑るというようなとんでもない物であった。

そして道路には人と力車とベビーカーがあふれており、クラクションを鳴らしっぱなしで耳が痛くなるほどであったがそれにもいつしか慣れ、気にならなくなってしまった。

また、ホテルを一歩出ると物乞いが近寄ってきて、数分間に10人ぐらいに取り囲まれることも珍しくないことであった。

活動はチャッタゴン空港内の空軍施設を拠点とし、物資搬送、積込、被災地での荷降ろしが主であったが、その他に最も大切であったと思うのは、隊員50名分の食事と飲料水の確保である。水についてはJICAの人々のおかげでそう手間はかからなかったが、食事については少人数（1小隊）で行うため、食器の消毒、洗浄、湯沸し等とても時間のかかるものであり、心ない人による妨害（消毒済みの食器と使用後の食器を一緒にする）等がありなかなか捗らなかった。

また、食料についてもレトルト食品ばかりで不満もあったが、被災者の生活を見れば「ゼイタク」の一言であったと思う。現に我々の運んだ物資の食料は貧しい物ばかりであり、我々も同じ物を食していたらとても2週間ももたなかったと思う。そんな物でも被災地の人々にとれば貴重な食料であり、生活の糧なのである。

こういう点では、被害に比べればあまりにも少量であった我々の活動（運んだ量）も何人かの人々には喜んでもらえたと思えば充実感もあるものである。

5月31日、いよいよチャッタゴンを離れダッカへと飛び立つ。

しかし、ここでもバングラデシュタイムで約3時間遅れの離陸、ダッカへと向かいビーマンの飛行機で移動した。

この離陸の際、コックピットのドアが開くというアクシデントもあり、バングラデシュらしさが最後までつきまとった感じであった。

6月5日、日本に向け出発の日、やはりバングラデシュタイムで出発が遅れる。バンコックでANAの飛行機に乗換え、この時日本の飛行機が一番いいと思った。何故なら言葉が通じるから。

機内では久々の日本料理を食べ満足したが、睡眠もどれぬまま日本の地へと降り立った。

この時、日本のありがたさというものが充分すぎるほどわかった。

外務省の解散式が行われた後、東京のバスで自治省へ向かう。この間、疲れのためか眠ってしまい、気がついたら東京都内であった。

自治省にて解散式が行われたが、この時、自治大臣が予定を変更して我々の労をねぎらってくれたことに喜びをおぼえた。

その後、東京消防庁にてセレモニーが催され、各隊長のスピーチに感動したものである。

その後は東京駅より神戸へと新幹線で帰った。ほとんど眠っており、気がついたら新大阪の手前だった。

新神戸駅に着くと、消防長や救助隊の仲間が全員で迎えてくれていた。ああ、やっと帰って来たんだと、この時初めて感じた。

約3週間の派遣で我々のした活動は微量なものであったかも知れないが、それで喜んでくれた人々の顔を私は一生忘れないであろう。

# IRT派遣

神戸市消防局  
消防士長 村上 覚



5月13日、今日から来たる8月8日に行われる近畿地区指導会に向けての特別強化訓練が防災センターで始まった。午後4時半頃グラウンドをランニング中、救助課長から電話があり、唐突に「バングラデシュの派遣があれば行ってくれるか。」と聞かれた。

私はあまり深く考えずに「はい」と答えた。それから時間がたつにつれ、だんだん不安になってきた。帰宅し、その日の午後11時過ぎ、派遣決定があった。メンバーは井上司令補、田中士長、吉田士長に私の4人である。気心の知れた人ばかりで一安心。だが、とんでもないことになったという不安な気持ちは大きかった。両親に話をすると、仕事だから仕方がない、頑張ってくるようにとすんなり納得。

一晩ぐっすり寝ると気持ちがすっきりし、自分自身がいったいどれだけのことができるのか、やれるだけやってみようという意気揚々バングラデシュへ向かった。

活動は19日から、チャッタゴン空港内の軍施設を借り、荷物、救援物資の整理を行う。

今日、我々の食料を乗せたトラックが着く予定だったが、トラックがいつ来るかわからない状態になった。そのため、緊急用に使用する個人装備のレトルト食品を急ぎょ集める。

飲料水のストックもなく、水道水をボールに入れ固形燃料で煮沸する作業にとりかかる。煮沸するのに1時間近くかかる。今まで日本で生活してきて、いつでもどこでも蛇口をひねると水が飲めることを普通だと考えていた。ここに来て、水のありがたさや自分の安全は自分自身で確保するということを実感する。我々は日本という温室の中で過保護に育ってきた人間なのである。

この日の夕方には2機の赤いヘリコプターがチャッタゴン空港に到着し、いよいよ明日から救援活動の開始である。

午後9時30分から全員ミーティング。その席で森村医師から話があり、「コレラ、マラリア、赤痢については病気になっても絶対に治します。またコブラに噛まれた場合でも血清があるから大丈夫」と頼もしい言葉を聞き、心配もいくぶん和らぎ生活面ではあまり神経質にならないようになった。

次の日の5月20日、チャッタゴン空港を拠点とし昨日と同じ煮沸作業を行う。

ヘリコプターが調査から帰還し、救援物資搬送活動が行われた。チラという乾燥米、カンパン、毛布、マッチ、薬が入った袋をヘリに積載し、離島へ空輸。

午後3時30分、私はヘリコプターおおさか3に搭乗しクトゥブディア島へ向かった。島がだんだん近づいて来る。

上空から見ると、南北10～15km、東西2kmと縦に細長く、中央には曲がりくねった運河のような川が流れ、島のほとんどは水田であるため水浸しである。島全体にまんべんなく集落があり、5mほどの木が数本と池がありわらと竹で作った家が2、3軒ある。島の一番高いところでも5mないと思われた。

ヘリコプターは島の南側の比較的集落の多いK3というポイントに着陸。上空からではわからなかったが、そのポイントの周辺には被災民が2000人近く集まっていた。

軍が制圧していたので混乱はなく、予定通り物資を降ろす。離陸の際にはみんな手を振ってくれた。私も手を振り返す。

少しでも人の役にたてたことやこのプロジェクトに参加できたことをうれしく思う。みんなの気持ちが一つになり、大きな組織が動いて初めてなせるものである。

5月20日から30日までの11日間、クトゥブディア、モヘンカリ、サンドウィップ、ハティア等いくつかの島へ救援物資を搬送したが、どこでも被災民があふれ、飢えを訴えている。しかし、彼らは自分たちの境遇を悲観せず、一生懸命生きている。その姿を見ると少しでも多く物資を搬送し、一人でも多く助けたいという気持ちになった。

5月25日に神戸市消防局の隊員はフリーな時間をもらい、午後から森村医師と看護婦と同行し、チャッタゴン市内の診療所を見学に行く。診療所とは名ばかりの医師1名と看護婦2名、ベッドは6床、医薬品は数種類しかなくハエがたかっている状況である。この時点では3名がアメーバ赤痢で入院中で、やせた体にギョロとした目で苦しそうだった。

壁に受診者と下痢患者の数を書いた紙が貼ってあり、徐々に減少傾向にあった。災害が発生すれば当然、傷病者が出る。従ってこれからは医療体制も整え、今後には備えなければいけないと思う。

今回バングラデシュへ派遣され、いろいろなことを感じた。

4月29日、30日に起きた災害に対して派遣が遅すぎる。今回は救援活動も広い意味で救助活動であると解釈し活動を行ったが、早期に派遣されていれば人命救助活動ができ、尊い命を救えたのではないだろうか。また、派遣要請があればすぐに出発できるよう、日頃から隊員自身の気持ちの整理も大事であろう。

医療、通信関係の派遣も今後の課題と思われる。

最後に自分自身のものの考え方の変化についてだが、初めてこの国を見た時は悲惨な生活をしてかわいそうだという見下した見方をしていた。でも彼らの生活を観察していると、自然と調和しおおらかに生きており、見習うことがたくさんあることに気付いた。

私にとって今回の派遣は自分の視野を広くし、今までの考え方を根本からくつがえすくらい大きな衝撃であり、良い経験をさせてもらった。

こうして無事任務を終え帰国できたことは皆様のご支援のおかげだと感謝している。

ありがとうございました。

# トルコ地震災害

当時の隊員が語った言葉

われわれの体験が現地の救助活動で役に立てれば

「阪神・淡路大震災で得た『あの教訓』が、奇跡の女性救出につながった。」

「(自分は)レスキューなんだと決断し、他の現場に回れば助けられる人がいたかも知れない。あの時の最大の教訓は、冷静で速やかな判断と行動の大切さを教えられたことなんです。」



「がれきの下の心臓の鼓動を探知するハイテク機器を使い、**生存者**がいるかどうか確認していった。

生存の可能性がなくなり、現場を後にする時、家族から『サンキュー』と言われたことが印象に残っている。」

「建物の倒壊の様子を見れば、どこに機器を搬入し、どこから捜索をはじめるとかの検討がついた。」

「機器類の操作など、救出技能がレベルアップしていた。」

「生存者のいる可能性のある現場を最優先にする。」

「絶対にあきらめてはいけない。」

「生きている人を助けるには、救助を求める家族から殴られてでも次の現場に行くべきだ。」

「今度はトルコの人に勇気と元気をあげたい。」



「人命救助に国境はない。機会があれば何度だって行く。」



IER受検・『重評価』取得認定セレモニー

## ～INSARAG外部評価分類（IEC/R）の受検～ 「国際捜索救助外部評価/再評価」



### IEC/IERとは

INSARAG外部評価分類は、INSARAG External Classification/Re Classificationの略で、IEC/IERと表記されています。

INSARAGガイドラインに基づき、国連の評価チームにより各国の救助チームの能力を「Heavy」「Medium」「Light」に評価し、分類されます。

### 目 的

- 各国救助チームの体制・機能・活動能力を共通の手法により標準化
- 各国救助チームが活動する際のレベルを有していることの確認
- 各国救助チームを分類されたレベルに応じて、適切な活動サイトに割り当てるための指標

#### Light

自国内での活動に限定され連続活動時間は3日間となります。

#### Medium

国外での活動も可能で、構造物の崩壊現場における救助・捜索犬若しくは機材を用いた捜索が可能です。連続活動時間は7日間、同時活動場所は1箇所となります。

#### Heavy

最上位ランクとなり、Mediumが可能な分野のほか、特に複雑な構造物崩壊現場における救助も可能となります。さらに、連続活動時間は10日間で同時活動場所は2箇所以上で可能となります。



	Heavy (重)	Medium (中)
2005年	ハンガリー(HUNNOR)	
2006年	英	
2007年	米(Fairfax)、米(LA)、オランダ、独(THW)	独(ISAR)
2008年	シンガポール、スウェーデン、スイス、豪(QFRS)	ノルウェー(失効)
2009年	ポーランド、中国	アイスランド、UAE(2013年 重に昇格)
2010年	日本、デンマーク、チェコ	ベルギー、仏(PUI)
2011年	ロシア(EMERCOM)、韓国	リトアニア、オーストリア(SARUV)、トルコ(AKUT)、スペイン(ERICAM)、スペイン(UME)
2012年	フィンランド、オーストリア(AFDRU)、豪(NSW)、トルコ(AFAD)	オマーン、ハンガリー(HUSZAR)
2013年	ヨルダン、ベラルーシ	
2014年	仏(UISC1)、仏(UISC7)、ウクライナ、モロッコ	ルーマニア
2015年	ニュージーランド、サウジアラビア、カタール	アルメニア、エストニア
2016年	マレーシア	ロシア(Siberian)
2017年	トルコ(AFAD2)、アルジェリア	南アフリカ、チリ

44カ国53チーム (ヘビー34チーム、ミディアム17チーム)

## 評価項目

管理、ロジスティックス、搜索、救助及び医療の5つの分野を派遣準備から被災地撤収に至るまでの段階ごとに、約150のチェックリストにより評価されます。

チェックは緑(適)、黄(注意)、赤(不適)で行われ、赤項目が一つでもあると失格とされます。

## 受検IEC

IEC受検は、実派遣を想定した一連のシナリオ(準備、始動・動員、派遣、被災地での活動、撤収・撤退)に沿って訓練を実施し、36時間以上継続(約48時間)した訓練を行います。この訓練は、チェックリスト項目を網羅しており、救助技術や救出活動能力を示すことはもちろんですが、いずれの段階においても国際連携下での活動の展開又は連携を推進できる体制、能力を問われるものです。

我が国の救助チームJDR救助チームは、2010年3月に受検し、みごとHeavyを取得しています。

## 結団式



## 再受験IER

IECの認定は有効期限が5年と定められています。平成27年3月2日から5日にかけて、JICA関西及び兵庫県広域防災センターにおいて、我が国のJDR救助チームは、IER受検に臨みました。JDR救助チームの一員として受検に臨んだ国際消防救助隊（IRT）IER受検チームは、5月の発足以降から約10ヶ月にわたって様々な訓練を積み重ね受検準備を整えました。

そして、JDR救助チームは高い評価を得て、「Heavy」チームとしての再認定を取得しました。これにより、海外被災地において各国救助チームをリードする立場が改めて明確となり、より一層の国際貢献が期待されます。今後、JDR救助チームが世界で期待される役割を着実に果していくためには、世界トップクラスのパフォーマンスを示し、「Heavy」の中の「Heavy」チームであり続けることが求められます。

このIER受検へ、国際消防救助隊（IRT）IER受検チームのひとりとして、神戸市消防局から1名が参加し、IER受検に貢献いたしました。



参加隊員：消防司令補 三浦直樹（警防課特別高度救助隊）  
再受検当時の所属・階級





災害対応

*Disaster Response*



昭和四十六年十月十八日二十三時三十七分。

「葺合東部建物火災、葺合管内籠池通り五丁目九、〇〇方建物出火」  
出動指令が署内に流れる。

署前を西進、この時間「市電、はもう走っていない。軌道内を突っ走れ！！現場まであとわずか、前方に建物全体を包み込むがごとく紅蓮の炎と黒煙が噴き出しているのが目に映る。



出動途上「たいしたことなければよいが・・・」と言っていた隊長の声が厳しくなる。間髪入れず車載無線にて第二出動の要請、各隊員に任務指示が飛ぶ。狭い車内で呼吸器を装着しながら、「さあ、一丁やるか！、

### 「炎、の中に人が！！」

建物の南側にある玄関と二階の窓からは猛り狂う炎が噴き出し、いかにしても進入不可能、隊長と俺は進入口を求め東へ移動するがこちらもだめだ！！

その時、「二階や。二階で声がした。早よ助けたれ！！」絶叫とも思える男の叫び声を耳にした瞬間、過ぎ去った現場において、若さと経験不足から幾度も苦汁をなめた思いが脳裏をかすめる。

今日こそは何が何でもやらねばと決意新たに進入口を探す。オッ、あの松の木から屋根へ行けるぞ！！利用できるものは何でも利用する。塀をよじ登り松の木へ、そして隣家の屋根へと移動、煙噴き出す二階の小窓めがけ走り寄る。屋根と壁体の間隔約五十～六十センチ、何てことはない。だが、高さや窓の大きさが問題だ。いっぱい手を伸ばしても二十～三十センチは足りない。そして窓が小さ過ぎる。これでは空気呼吸器を装着しての進入はできないぞ。どうする！！



### 「HELP！！HELP！！」

その時、

「HEL、ゴホン、ゴホン、HEL・・・ゴホン、グェッ、HELP！！」

壁体を通し建物の中から聞こえる異様な声。何だ、あの声は？HEL？HELP！！これくらいの英語なら俺でもわかるぞ。

「助けて！！」

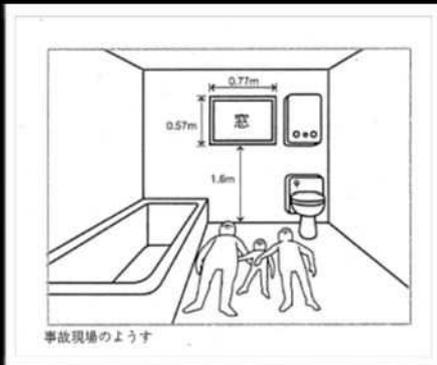
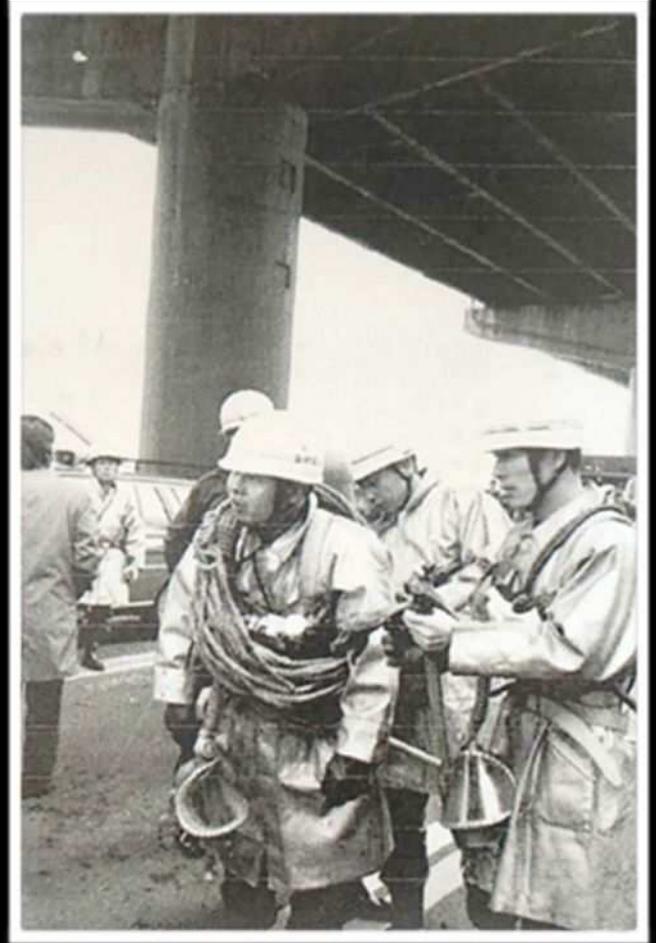
アッ、また叫んでいる。「HELP、HELP！！」

よし、まだ生存している、だが一刻の猶予も許されない、即決断！！そばの隊長に、行くで！！装着していた空気呼吸器、携帯の救助バック、ライトを屋根の上に放り出し、窓枠に検索棒の鍵手を叩き込み右腕一本で身体を引きあげ、左手で窓枠をつかみ身体を確保。窓は動くか？窓をスライドさせる。「開いた」。しかし狭い。これでは身体が入らない。はやる心と裏腹に己の行動が歯がゆいほどのろく感じる。途切れ途切れに聞こえていた「HELP」の叫び声が次第に弱く細くなっていく。

「早くしなければ間に合わない！！」

愛用の検索棒の柄を握る手に力をこめ、窓めがけて叩き込む。





## 決断！！

「隊長、入るで！！」

再び声をかけ、胸いっぱい新鮮な空気を吸い込み、炎と煙渦巻く室内へ身を躍らせた。

一瞬、脳裏にこの煙の中“空気呼吸器、がなくて大丈夫かな？一人でやれるかな？そんな思いが浮かぶ。

「狭い進入口、一秒を争う状況、これでいいんだ、絶対大丈夫だ。呼吸器なんてクソくらえだ！！」

ややもすると弱気が頭をもたげそうになる己に鞭打ち、室内を見渡す。オッ、ここは浴室だ。天井、壁体はすでに炎がわが物顔でなめつくし、真っ黒な煙が充満、視界を遮り、“ツーン”と強い刺激臭が鼻をつく。時折熱風とともに炎が顔をかすめる。“熱ッ！！”床に身を伏せ、手探りで前進する。突然伸ばした手元に“グニャッ”とした感触が……。それが何であるかすぐわかった。

「おった！！見つけたゾ！！」

戸外で状況を見守っているはずの隊長に向かってあらんかぎりの大声で叫ぶ！！

「隊長、女や！！」

両腕で彼女を抱きあげる。意外と軽い。一步、二歩、窓際へ。長い髪の毛が俺の顔を撫でる。抱えた腕にも支える胸にも彼女の鼓動が感じられないし、声も漏らさない。“生きているんだろうか？”苦しさに耐えかねて思わず吸い込む煙にむせかえりながら抱えた彼女を窓に向かって精一杯差しあげる。「隊長、早く引きあげてくれ！！」

「何しとんや？早よせんかい！！」

支えた腕に意識のない彼女の体重がずっしりとのしかかってくる。両目から流れる涙、鼻からは鼻汁が垂れ唇を濡らす拭うこともできず、我慢しきれず口を開けると有毒ガスを含んだ煙が気道を侵し、むせ返る。“ああもう限界だ！！”と窓から伸びた手が俺の腕をつかむ！違う？俺の腕や！！次に支えた両手から彼女の身体が離れる。

アーえらかった 思わず周囲の空気(煙)を鼻から吸い込んでしまう。グエッ！！喉を刺す刺激にたまらずえずき、吐き気をもよおす。たまらんで。一旦外へ出て新鮮な空気をいっぱい吸おうか？よし外へ出ようと窓枠に両手をかけ顎を框に置いた時に、いや待てよ三人家族と言っていたな？まだ二人残っているんだ、この炎と煙の中に？と思った。

これで二人目だ！！

よしもう一度頑張ってみよう。

露出している肌が溶けてしまいそうな熱さ、むせ返る咳に胃が痛む。もうイヤヤ！！

でも、この炎と煙の中にあと二人いるんだ。声は聞こえないが、必ず俺の助けを待っている！！

やってやろうじゃないか。やってやってやり抜いてやろう。涙と血の汗を流し耐えた「虎の穴、レンジャー魂」を發揮して！！

「中尾、大丈夫か？」

隊長の声が窓越しに聞こえる。

心配そうな隊長の掛け声に答えるごとく「隊長、あと二人いるはずや、もう一回入るで！！」と叫び、室内へ飛び降りる。腹這いになり視界のない床を手探りで検索する。両手両足に神経を集中させ泥亀のごとく一寸ごとに前へ前へと……。

うん？左手に何か触れたゾ。布地、アッ、いた。発見だ。でも大きいぞ、これは！！大人だな。真っ暗な中で身体に沿って掌を前方へ。その時、手に触れたのは髪の毛？おかしい、確かこのあたりは腹部のはずなのに。

アッ、顔ダ！！あわてて男の身体をまたぎ確かめる。

子どもだ！！小さな身体を一気に引き寄せる。しっかりと抱き窓際へ……。

熱い、苦しい、痛い。「ゲエッ、ゲエッ、ゴホッ、ゴホッ」

そんな中、「隊長、早よう、子どもや！！」と叫びながら、あらん限りの力をふりしぼり子どもの身体を差しあげる。

目から涙、鼻から鼻汁……出るがまま。

支えていた両手から子供の身体が浮きあがる。

「救助成功！！」

アー苦しい、もうだめ、立ってられない。頭がしびれる！！いまだかつてこんな苦しさを経験したことがない。

空嘔吐の繰り返し、むせ返る咳の連続、喉の痛みに加え頭痛、止めどなく流れる涙と鼻汁、そして我慢ならないこの熱さ！！残りの力をふりしぼり、窓枠までよじ登り框に顎を置き顔を外気にさらす。

さあ、きれいな空気を、新鮮な空気を思い切り吸ってやろう。肺が破裂するまで！！アレッ、おかしい、吸気ができない？力が出ない？

少しずつ、少しずつ痛む喉から空気を吸う。

アー、うまい。普段何気なく吸っている空気がこんなにうまいとは……。



## 限りある身の力ためさん

何か変だ、変なのだ。いつもと違うこの感覚。頭がボーッとし全身に脱力感が漂う。おかしい？（この時、すでに一酸化炭素中毒症に侵されていた）

その俺の胸中に、あの声がよみがえる。「HELP！HELP！！」と叫び続けた男の声が。子どもを抱き倒れていた男。そうだ、彼が残っている。

振り返って室内を窺うと、天井をメラメラとなめつくす炎が壁体を伝い床に達しようとしている。限界を超えている。進入は無理か？しかしもう一人いるのだ、この手で触っているんだ。ここで活動を断念したら今までの失敗と同じ結果になってしまう。ずっと後悔しながらこの仕事を続けられるか？苦勞して二人を救助した意味がなくなる。全員助けてこそ救助ではないか。救助隊員、いや一人の人間として目の前で死を目前にした彼を助けるのは当然の行為だ。よし決行だ。もう一度進入するぞ。熱と煙と毒ガスの充満している室内へ逆戻りだ。床を這い前進する。今度は迷わない。勝手知ったる部屋の中、一直線に煙に包まれ倒れている彼のもとへ。さて抱えようとするが動かない。これは重い。引きずっていくしかない。両脇に腕を通すが胸元まで手が回らない。大っきい！大男だ！！死の有害物質を含んだ煙を吸い、咳込み、むせ返り、それでも何とか窓際まで引きずり寄せた。最後の力をふりしぼり中腰で彼を持ちあげようと両足をふんばった途端、ツルツと足が滑り背中から床へ倒れた。痛ッ！ジーンとしびれる右肘！！

「あかん、もう終わりや。誰か代わってくれ」

次第に薄れていく意識の中、声なき声で叫び続ける！！

「中尾、どうした！外へ出る。早よう出てこい」

壁体を隔てて呼びかけてくる隊長の声がはるか遠くからかすかに耳に届く。渾身の力をふりしぼり、やっと窓枠に手をかけるが身体を上げる余力はなく、頭の中にはぐるぐる渦巻きが、目の前にはかげろうが漂う「もうだめだ！、最後の力をふりしぼり、窓枠に寄りかかる俺の肩口をいかつい手がつかんだと思うとズズッ、ズズッと身体が引きあげられ、一瞬宙に浮き今度は氷のように冷たい屋根瓦の上にドシンと投げ出された。そのままの姿勢で空嘔吐の繰り返し。胃から出てくるものは何もない。

「中尾、大丈夫か？しっかりしろ。「男、救助したぞ」

あれは誰の声だ？中部専任救助隊Kの声か。こんなところで寝とつたらあかん。起きよう起きて……。誰か起こしてくれ！！だめだ、立てない、起きあがれない、何で立ちあがれへんのや！誰か起きるの手伝ってくれ！！

記憶にあるのはそこまで・・・・・・・・。

## 最高の報酬？

ふと気がつくとベッドの上。何で俺はこんなところにいるんだろう、火災現場へ出動したはずなのに！！そうや確かに現場に……。もう空嘔吐も頭痛もしないが、何か身体が宙に浮いているようだ。そして何か違う。違う何かの心の奥底から湧き出してくるのを感じる。いまだかつて経験したことのない、何とも表現しようのないこの「充実感と満足感、。

そうか。これは全力を尽くし職務を遂行し得た「充実感、と、人命救助をなし得た「満足感、だ。

俺は今消防士に、いや人の命の大切さを知る人間に与えられる最高の報酬を受けたのだ。俺の顔を心配げに見守る仲間たちの顔、顔、顔。どれもこれも煙と泥にまみれぐちゃぐちゃだ。

「中尾、無茶すんなヨ、でもよう頑張ったなあ」

涙声の隊長の一言に、涙があふれ出るのを止めることができなかった。

ありがとう、仲間たち。

救助活動時間（六分）

救助開始 二十三日四十三分

救助完了 二十三日四十九分

被救助者

女性二十九歳 男児二歳

男性三十歳（推定体重百キロ以上）

※掲載写真については当時の現場活動のものです。

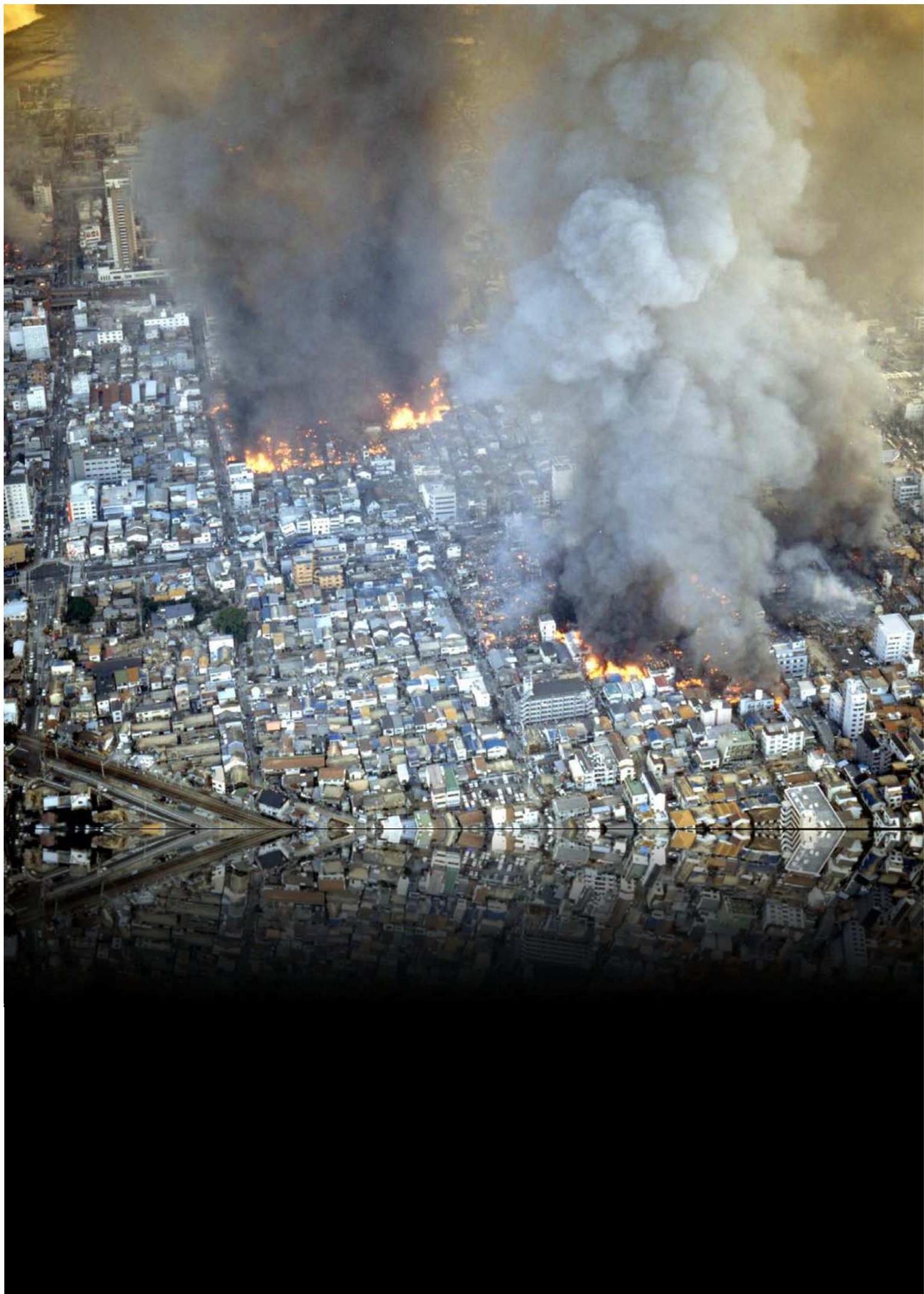
（参考図書）中尾清和 著「大災害に挑んだ男たち」

# 阪神・淡路大震災

平成7年1月17日5時46分、淡路島北部の北緯34度36分、東経135度02分、深さ16kmを震源とするマグニチュード7.3の地震が発生した。

この災害による人的被害は、死者6,434名、行方不明者3名、負傷者43,792名という戦後最悪の極めて深刻な被害をもたらした。

(消防庁調べ、平成17年12月22日現在)



## 『これはただごとではないな』

停電で真っ暗闇。懐中電灯の光のなかに浮かびあがった、まるで模様替えをしたような部屋のあり様を見て、まず灘署に連絡をとった。

「電話が通じず連絡がとれないでいる」

という返事。何人かに連絡をとるがやはり不通。すぐにバイクで出勤した。

途中の長田区では、軒並み家は潰れ、あちらこちらでのろしのような黒煙が立ち上がり、東へ行くほど地獄絵はひどくなる。

一番近い生田署へ直行。隊員がくるのを待ちわびた様子の救急隊長の一声は、「よくきてくれた。すぐに着替えて出発しよう」だった。広報車に可能な限りの救助資材を積み込み出勤。

現場には、古い軽量鉄骨造り4、5階建てのアパートが4棟並んでいるが、いずれも1階部分が北側に押し潰され、生き埋め者がいることは一目瞭然であった。近くまで行くと、我々を見つけた市民が助けを求めてきた。

生存しているのが不思議なくらいで、2階の床は高さ40センチぐらいにまで落ちており、その間に壁と家具類が、びっしりと詰まっている。そのうえ鉄筋が何層にも行く手をはばんでいた。声をかけると、「苦しい！早く助けてください！」と、5、6メートル奥から苦痛の声。

「すぐ助けるから、しっかりしろ！」と、声をかけ作業にかかる。ルーカス・カッターで鉄筋を切り、入口を作る。そして、スプレッターのこぎり等で壁、家具類を破壊しながら、わずか40センチぐらいの空間へもぐり込み、場所を確認しながらひたすら破壊作業をくり返す。やっとの思いで要救助者のところまでたどりついた瞬間、

「ドドドー」

震度4、5の余震。後ろ向きのまま、這って逃げようとしたが身動きがとれず、このときばかりは、死を覚悟した。救出活動から5時間ぐらいかかってようやく生存者を救出する。

ほっとする間もなく、次々と救助を求める市民の声が耳に飛び込んでくる。ほとんどが全壊状態の家屋であり。下敷きとなると、人の力だけではとうていガレキを取り除いて救出することは不可能に近い。おのずと市民の救助隊に寄せる期待は大きく、それは祈りにも近いものがある。

我々もそれに応えるべく力の限りを尽すのだが、これほど甚大な被害を出す大災害の前には、我々の努力も無に等しい。・・・原始的ではあるが“人海戦術”に頼らざるをえないが、人も機材もあまりに足りなさすぎるのだ。

この“人員”と“機材”の不足は、救助を求める市民にとってもまた救助する隊員にとっても考える余地のないほど相当に深刻で、生死を分ける大きな要因になったといっても過言ではないだろう。

(1995年「雪」3月号から)



## 「おじさん、早く出してっ！」

比較的、元気そうな声で女の子が呼んでいた。

地震発生後、私が出動した3件目の生き埋めの現場は、母親と姉妹3人の計4名が、倒壊した建物内に取り残されていました。

要救助者に不安を持たせてはいけないと思い、こちらも努めて明るく、

「すぐに出れるから、もう少しだけ辛抱してな」と、返事するが倒壊建物は鉄筋コンクリート造りの2階建てで、1階部分は押し潰され1メートルぐらいになっており、コンクリート壁、押し潰された家具等が障害になって救出が容易でないことはすぐに想像がついた。



同僚二人と相談し、1階玄関付近から屋内への進入を試みるが内部はさらに狭く、高さが50センチほどになり、木片、ガラス片、衣類、本等が進入を阻んでいた。

ほふくの姿勢で進みながら、手当たり次第に障害物を除去し、5、6メートル進入したところで2段ベッドが潰れ姉妹2人が重なって天井との間に挟まっているのを確認。布団、毛布を引き抜き、わずかに間隙を拡げ約2時間後に救出に成功した。

その後、同じ場所から母親と末娘の救出を試みたが、障害物の除去が困難なため救助方法を変更。2階床面を削岩機で破壊、鉄筋をボルトクリッパーで切断し開口部を作り、家屋内から引き出すことはできた。

が、活動をはじめてから約7時間が経過、すでに息を引き取られていた。

活動中、何度かの余震の恐怖感に襲われながらも、自分自身を叱咤激励し、救出をやり遂げることはできたが、妻と娘を亡くされたご主人の心情を考えると、決して満足できる結果ではない。

今回の震災で、私自身10数名の救出に立ち会ったが、生存はわずか4名。

大規模災害の脅威と人間の非力を思い知らされたが、救助活動の限界を感じることはない。

「もっと、多くの人命を救助(生存のまま)したかった」

「きっと、救助するぞ！」

の気持ちを持ちつづけ、今後も救助活動に邁進することを決意した。

(1995年「雪」3月号から)

## 「子どもの死、祖父の涙、辛い一日」 向井 良（灘消防署）

1月21日午前8時、連日の救助活動の合間をぬって、ほんのわずかの仮眠を終えたところへ新たな任務が言い渡された。

鉄筋コンクリート造り4階建てのマンションの2階部分が崩れ、4名が生き埋めになっているというもので、地震発生以来、他の隊が何度か救出を試みては断念している現場だった。救出はかなりの困難が予想される。

重機（ユンボ）を担当してくれる業者と一緒に到着してみると、生き埋めの4名がいると思われる2階部分には3、4階が非情にも重くのしかかっていた。



## 「無理かもしれない。無理や」

この状況を見た隊員は、皆そう思ったに違いない。でも、

「もしかしたら・・・」

そんなわずかな希望を胸に救出作業を開始、必要と思われる資機材を2階に搬送した。

そのとき、我々が見たものは、冷たく変わり果てた大人と子どもの遺体だった。二人は見るからに重そうな鉄骨の下で、大きな体が小さな体を庇うように横たわっていた。なんとも酷い最期に、各隊員は交わす言葉もなく、瓦礫の撤去作業を進めた。重苦しい空気のなかで作業はつづいた。

さらに2人の方も遺体で発見された。一緒に眠っていたのか、同じ布団のなかで母親が子どもを庇うようにして亡くなっていた。

指令を受けたときから予想できたこととはいえ、実際に現場に立ち会ったときの気持ちは言い表すことができない。瓦礫を取り除くためのエンジンカッターや重機の爆音が無情に響いた。

1人また1人と、収容された遺体が家族に引き渡され、最後の1人となった8歳の子どもの遺体が収容されたとき、祖父らしい男性の目から堪えていた涙が一気にあふれ出ていた。

太陽が西の彼方に沈もうとしている。救出時間8時間。辛い1日だった。

（1995年「雪」3月号から）



良き仲間と汗を流した**救助大会**。

**精鋭部隊**を目指した小隊長時代。

オレンジ服を脱ぐことを決心した阪神・淡路大震災。

今の私を支えてくれた20年でした。救助隊ありがとう。

木村敏博（59才）

## 阪神・淡路大震災における初動時の救助活動 野邊三郎

救助隊により1,892人を救出しましたが、生存救出は、733人であとの1,000人以上の方は救出時すでに死亡されていました。

通常生き埋め等の生存救出は、48時間以内を原則としていますが、今回の震災においては、既に90時間を経過した1月21日に6人の生存救出を得ることができました。このあと、さらに69人を救出しましたが、既に時機を失していたのか、或いは地震による倒壊物の直撃により即死状態にあったのか、いずれも死亡での救出でした。

### はじめに

今回の阪神・淡路大震災は想像を絶する大被害をもたらし、多くの死傷者が発生しました。その最中であって、我々はできる限りのことを行って、消防救助隊だけでも1,892人を救出しましたが、他都市からの応援隊が完備するまでの地震直後においては、救助隊員及び救助器材とも極度に不足しており、まさに救助活動の限界を痛感した災害でもありました。

また、4,000人いる非常勤の消防団員も地震の直後には活動を開始しており、救助活動の分野においても958人を救出しています。

消防機関によって救出した、この2,850人という数が、決して満足できる数字だとは思いませんが、大震災での救助活動を体験した一人としてお話しさせていただきます。

### 災害の発生状況

兵庫県監察医務室の調査によると、死亡者の96%は、下敷きによる即死状態であったことが判明していますが、もう少し早い段階で救助活動が至る所で行われていたら、もっと多くの生存救出ができたのではないかという気がしてなりません。

今回の倒壊状況を見ると、老朽化した木造建物はその殆どが被害を受けており、しかも1階部分が押しつぶされた状態のものが多く見られました。

従って、「2階にいた人は助かったが、1階にいた人は犠牲となった。」という事案が至る所で発生しました。

従来、我々消防機関は、高齢者等のいわゆる災害弱者は、緊急時にはすぐに避難できるよう「1階に寝かせなさい」という指導をして参りましたが、今回の地震に限っては当てはまらなかったということになります。

また、中高層ビルにおいては、その中間部分が押しつぶされ、プレス状態になったものが見られましたが、西市民病院を例にとると45人が生き埋めになったものの、死亡されていたのは1人だけであり、不思議なほどの生存救出ができました。このような生存救出の事例は、他の多くのマンション等でも見られています。

私は西市民病院での救助活動に際しても、直接現場指揮をとっていますが、殆どの患者はベッドに寝た状態とか、ベッドの横に隠れたという状況で見発見されており、予想以上の生存者が多かったことが当初は理解できない状況でした。

なぜ、これだけの被害が発生しているにも関わらず、生存救出ができたのかというと、室内は押しつぶされているものの、外から見て思うほどプレスされておらず、落下した梁とかベッドによって約90cmほどの空間が保たれているのがわかりました。



## 救急状況

一方救急隊は、地震の直後には消防署に助けを求めて押し寄せた負傷者等に対して、応急救護所を開設し、約1,200人の応急処置を実施しました。

この応急救護所にはボランティアとして駆けつけていただいた医師や看護婦さんもあり、医師の指示等により病院搬送の必要がある重症患者についてのみ、救急搬送を行いました。

1月17日から2月10日の間における搬送人数は6,773人ですが、この地震による負傷者の発生数からみれば、その一部しか対応出来なかったと言えるかもしれません。

また、市内の救急病院がいくつか被災したため、救急搬送についても平常時のようにはいきませんでした。その最中でも病院等の積極的な受け入れがあったため、その殆どを市街地の医療機関で処置された状況です。

従って、停電或いは断水等によりオベ等の処置ができず、転送する必要があったものについてのみ被害が少なかった西区、北区及び市外の病院に搬送されています。また、クラッシュ症候群という症状についても、当市の救急隊員は、初めて聞く症状でした。



## 救助活動の状況

救助活動は、主に地震発生直後から1月20日までの4日間に集中しました。

この間に1,700人を救出しましたが、これは消防機関による救助人員の90%を占めたことになります。しかし、救出時における生存者は、1月20日を過ぎると極端に減少し、以後の救出活動は、悲しみの中での遺体発掘となりました。未曾有の被害を出した震災は、全国の消防機関の救助体制についても、多くの教訓を与えた災害でもありました。

私も救助隊員とともに、何カ所もの現場に出動したが、特に地震直後の17日においては目的地まで到着できない場合もありました。これらの理由は、たしかに道路障害等で緊急車の走行ができなかった場所もありますが、決してそういう問題ではなく緊急走行している救助工作車等の前に市民が飛び出してきて、「ここから先に救助してくれ」「ここを見殺しにするのか」というような状況でした。

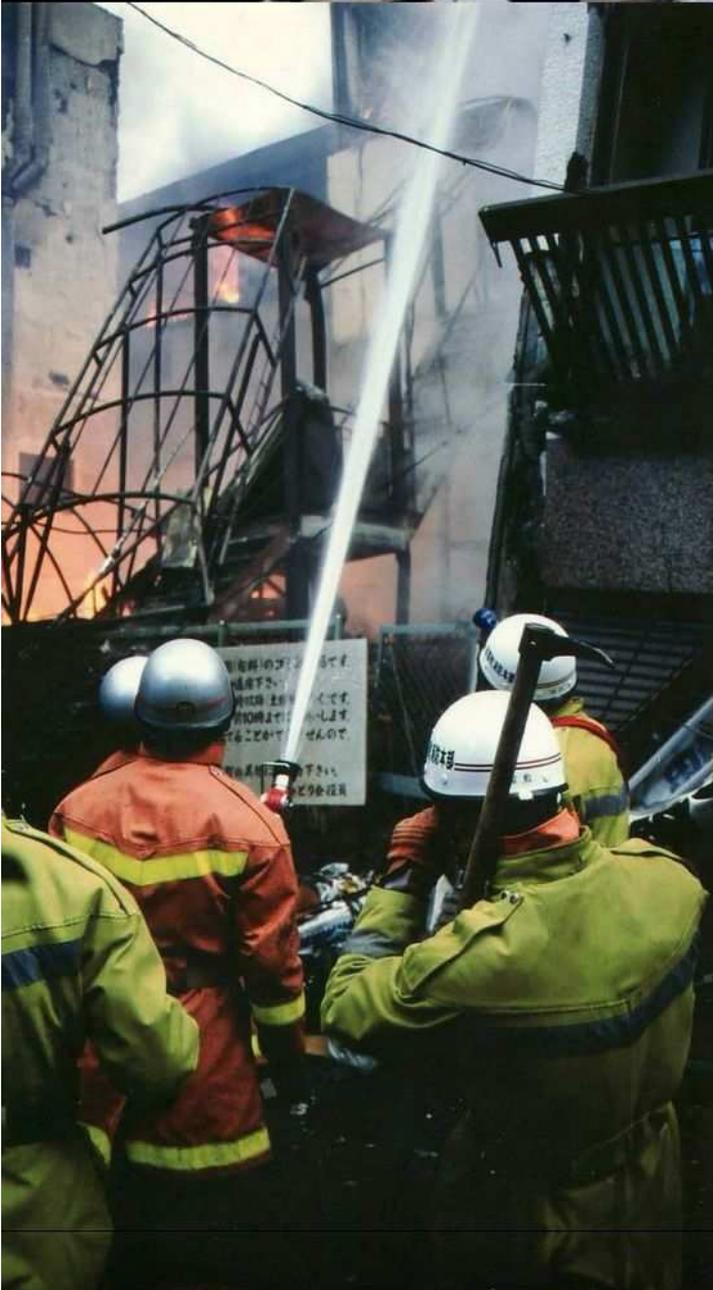


通常、我々消防機関が出動途上に目的地を変更して、途中で救助活動をするというようなことはまずありえないし、これが通常の救助出動であれば、出動隊の責任問題にもなりかねませんが、ここでは通常の理屈は通用しない状況でした。道を塞いで救助車を止めた市民も興奮しており、強引に通過することはトラブルとなりますのでやむを得ず一旦停止すると、もうその現場で活動するしかない。ということになってしまいました。とりあえず、目的の現場に行けないということを、指揮本部に連絡しようと思うが今度は無線もなかなか通じないし、有線電話をしても全く通じない。したがって、本部では市民から要請があった場所に、部隊を入れたつもりでいるが実際には救助隊は現場に到着していない。再度市民から要請がかかるが、もう消防署には出動させる部隊は全く残っていない状況でした。



現場に到着すると、救助隊はチームとして活動することによって初めてレスキュー隊としての力を発揮できるわけですが、一人一人が救助を求める市民に引張られて、とてもチームとして活動できる状況ではありませんでした。幸いなことに、どの現場においても、一般市民の自主的な救助活動が得られたため、一人一人の救助隊員が、即座に結成された市民救助隊の指揮者として指揮をとることとなり、これが結果的には一人でも多くの負傷者を救出したことになりました。





## 救助活動の困難性

災害の規模、負傷者の発生数は、当市の消防力をはるかに超えるものでしたが、中でも地震直後に同時多発した火災による延焼拡大は、救助活動を制限するとともに、不足していた救助力をさらに分散することになりました。特に消火と救助を兼務する兼務救助隊は、延焼危険のある倒壊建物に、まだ未救出の生き埋め者が多数いたことから、救助を目的とした消火活動を支援し、延焼阻止を行う必要がありました。

一つの倒壊建物から、生き埋め者を救出するためには、場合によっては2時間を要する現場も相当ありました。そのため、延焼までに救出する時間がなく、やむをえず消火活動にあたったものの、水が出ず、食い止めることができなかった場所もありました。救助隊員の心には、「助けようにも助けてやるができなかった」という悔しい気持ちだけが残った災害でもあったわけです。

## 隊員の苦悩

地震発生時に当直日にあたり、救助活動にあたっていた救助隊員等が家族の安否の連絡がとれたのは、ほとんどの者が3～4日後ぐらいであったため、その間、死傷者を掘り出すたびに、家族と交差して後味の悪い救助活動でした。また、再三襲ってくる余震に、屋内進入している隊は、まさに決死を覚悟しての救助活動でした。

救助隊は危険な状況での現場活動が多いため、安全管理には特に厳しくしていますが、ここでは救助法でいうように「安全管理者をきめて、統一した安全管理体制をとる」ということは、とてもできない状況でした。隊員一人ひとりが自分でできる範囲内で安全管理をするしかなかったわけです。「17日夕方ごろ、救助隊員が作業中に殉職した」と情報が入りましたが、どこの隊員か、また正確な情報か調べようがない状況であった。後でわかったのは、隊員の子供さんとお母さんがなくなったというのが真実でしたが、救助隊員の手記の中に、「屋内進入する自分の順番が回ってくるのが怖かった」と書かれているのが現場活動をしている隊員がいかに危険な状況にあったか物語っていると思います。

神戸の救助隊員が交代で休息がとれだしたのは1月20日の夜からでした。それまでの間は不眠不休の活動を続けました。休む間もない連日の救助活動で救助隊員の過労が進み、心身ともへとへとになってくるに連れて、明らかに集中力を欠き、精神的に安定を失った言動が出てきました。隊員間では、通常では笑って済ませる言葉にも、すぐに仲間同志が言い合いになることがありました。「隊長は隊員の管理を十分するように・・・」と指示しましたが、私も不眠不休の状態が6日間続き、22日の3時ごろになると、相手が言っていることが、どうしても理解できなくなってきました。こういう状態を医学的には「ただの寝不足」と言うのかどうかわかりませんが、まさに睡眠の重要性を身をもって体験した災害でもありました。

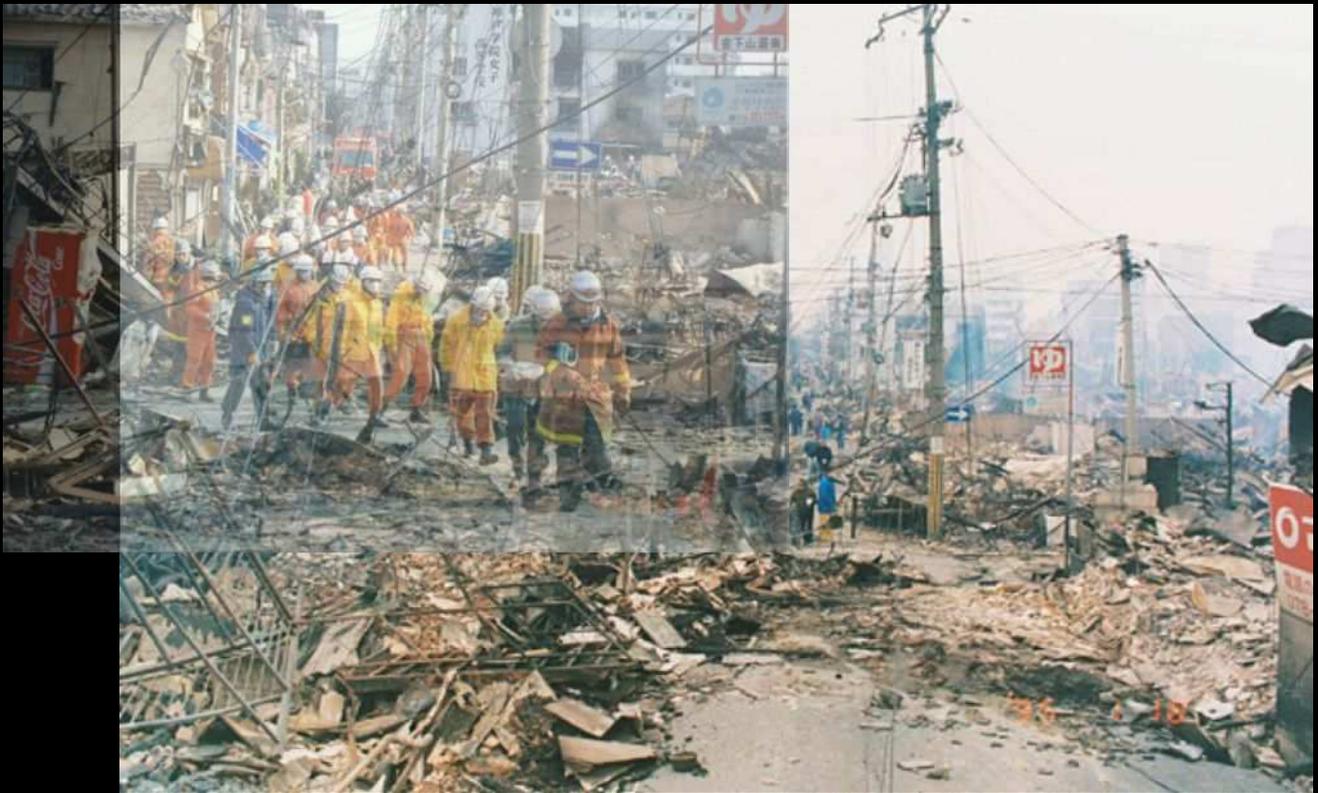
今回の救助隊員の活動方針は、テレビ等でも報道されたが、他都市からの応援隊が完備するまでは、本当に人手不足であり、その中でできる限りの生存救出を図る必要がありました。そのため、初期の段階における救助活動は、「生存の可能性がある者にしぼって救出すること」を徹底する必要がありました。通常の災害現場では、生死に関係なく、いくら時間を要しても最後の一人まで救出するのですが、今回は一つの現場に見切りをつけるのも、一人でも多くの生存者を救出する一つ的手段でもありました。私の立場としては、災害の状況からみて当然の行為だと認識していますが、直接現場活動をしている隊員については、泣きすぎる家族を前にして、救助活動を打ち切るのが辛い判断でした。



## 外国救助隊

スイス救助犬、イギリス救助隊、フランス救助隊が入国したが、結果的に神戸市が受けたのは19日に現地入りできた救助犬12頭を率いるスイス救助隊員25人でした。スイス救助隊は、連日夜を徹しての検索活動を実施し、その結果9人を瓦礫の中から発見しましたが、既に時機を失していたのか、遺体としての救出でした。救助犬について、マスコミはスイス救助犬のみをとりあげていましたが、ボランティアとして参加し、合同活動をした日本の救助犬の優秀さも忘れてはなりません。

スイス救助隊長が通訳を通じて私に言った言葉は、「日本レスキュー隊の救助技術は素晴らしい。現場の統一と救助器具の凄さには、敬意を表する。」ということでした。すぐに「日本レスキュー隊は世界に通用するか。」と質問すると、「勿論」という答えが返ってきました。災害の大きさに無力さを感じた中で、この言葉ほど救助隊を勇気づけたものはなかったと今でも思っています。



## まとめ

最後に、今回の震災は特に、救助活動にたずさわる関係機関に多くの反省と教訓を与えました。すでに自治省消防庁は、国際消防救助隊のみならず国内で発生した大規模災害の救援に対しても緊急消防援助隊の発足を図りました。

また、神戸市の消防体制の強化は勿論、全国の消防機関においても救助力の向上が図られようとしています。私が考える「レスキュー」とは、公的機関か民間機関を問わず、またそれが小さな事故であったとしても、その場にいた者が「助け合う」ことだと思えます。ご聴講ありがとうございました。

(平成7年9月9日 佐賀県救急医学会にて発表された原稿より)

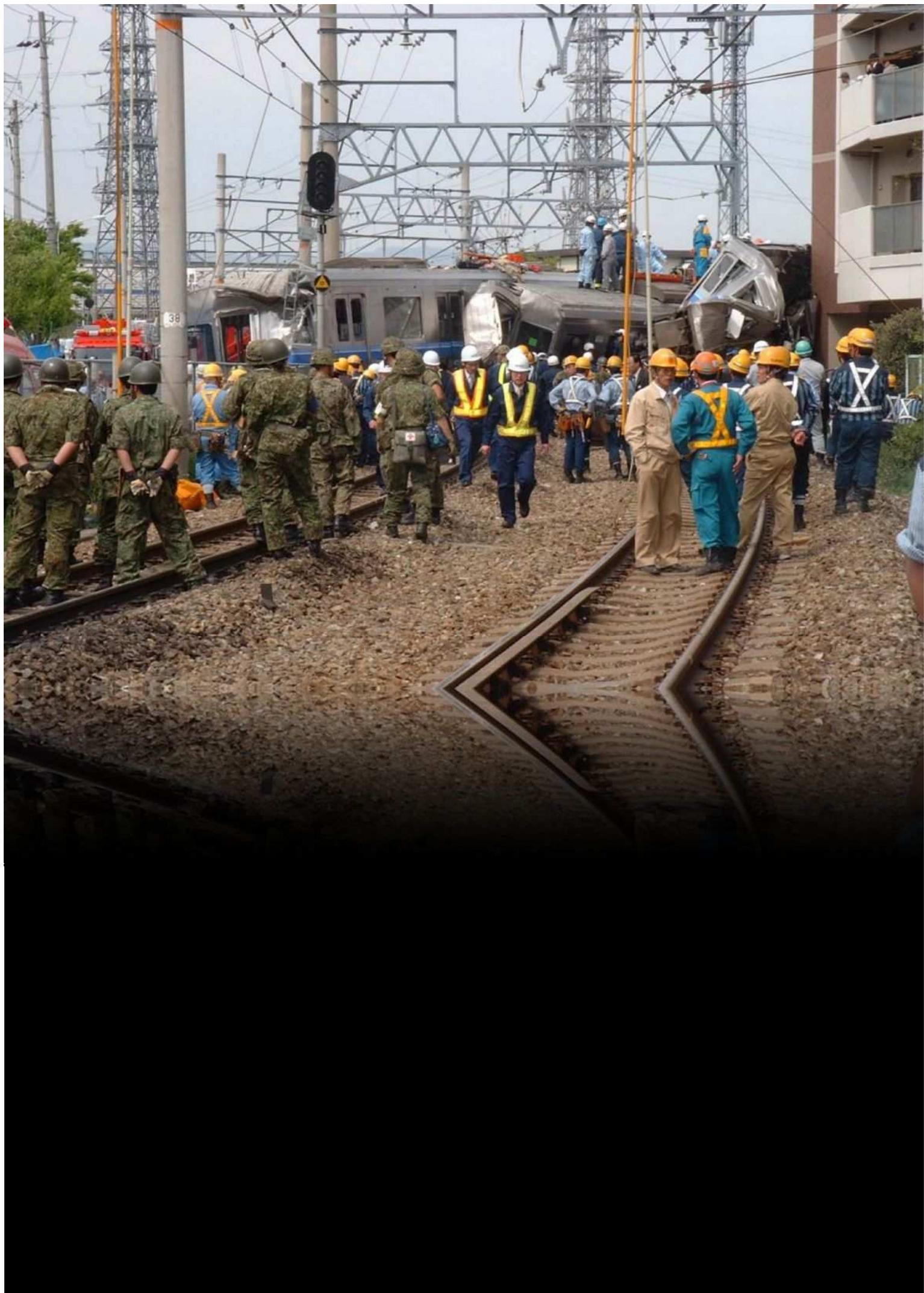
# 尼崎市

# JR福知山線鉄道事故

平成17年4月25日（月）9時18分頃、JR宝塚駅9時03分発同志社前駅行き上り快速電車（乗客者数約580人）が脱線し、建物へ衝突した。

事故車両は7両編成のうち前5両が脱線し、そのうちの2両が沿線のマンションに衝突した。死者107人、負傷者460人（重症149人、軽症311人）、消防機関等による医療機関への搬送人員240人。

（尼崎市JR福知山線鉄道事故応援活動報告書(最終版) 神戸市消防局）



## 神戸市消防局からの部隊派遣

9時50分にテレビ報道で事故発生を覚知し、兵庫県広域消防相互応援協定に基づき4月25日から28日にわたり、のべ29隊107名を派遣するとともに兵庫県消防防災航空隊（神戸市航空機動隊）から2機13名が出動しました。

## 救助隊の活動

救助隊の初動活動場所は先頭から2両目の車両でした。車両はマンションの壁体に衝突し「く」の字に曲がった状態で、非常に不安定な足場での救助作業となりました。

続いてマンション1階駐車場に入り込んでいた1両目の活動に移ると、車両内から3名の助けを求める声を聞きとり、即座に横転した車両の上部に開口部を設け、活動を開始しました。しかし、非常に狭い活動スペースに加え、マンション駐車場の破損した乗用車からガソリンが漏れだすなどの悪環境での活動となりました。



さらに、要救助者が折り重なるように倒れており、上部に倒れた者から順次救助しなければ、助けを求めて声を発する要救助者の位置まで到達できない状況でした。



## 兵庫県消防防災航空隊

9時55分、ヘリで現場へ向かう途中、地上部隊の無線交信から重症者の発生を覚知しました。地上部隊と連絡を取り、臨時離着陸場を決定し患者搬送を実施しました。

ヘリ搬送は2機により、8回8名におよびました。また、航空隊基地では、テレビ報道から医師派遣の必要性を判断し、災害医療センターと調整し、現場へ医師と看護師を搬送しました

このように、救助活動は非常に困難を極めました。神戸市の救助隊は兵庫県の救助隊の中心として、他隊と連携し慎重かつ積極的に活動を行い、数多くの要救助者を救出しました。

# 東日本大震災

2011（平成23）年3月11日14時46分、三陸沖（北緯38.1度、東経142.9度）、深さ約24kmを震源とするマグニチュード9.0の地震が発生しました。これは日本国内観測史上最大規模の地震でした。

この地震は広範囲にわたる地震動や巨大な津波により死者、行方不明者合わせて約2万人という人的被害と、全壊約13万棟、半壊約27万棟という住家被害をもたらしました。

『出典：『東日本大震災記録集』（総務省消防庁）』  
『<http://www.fdma.go.jp>』



『出典：いわて震災津波アーカイブ/提供者：釜石市』



## 『広大な搜索範囲のなかで』 井上雅文（水上消防署特別高度救助隊）

地震当日、テレビで信じられない光景を目にした。防波堤を乗り越え、車、家、船を押し流す、すさまじい津波の光景で、阪神・淡路大震災では想像もつかない情景である。

第2次派遣隊として14日神戸を出発し15日より19日までの5日間にわたる活動を通じて津波の脅威を肌で感じた。

活動は16日南三陸町寄木地区、田尻畑地区、下保呂毛地区、17日波伝谷地区、津ノ宮地区、滝浜地区、18日波伝谷地区、水戸部地区の人命検索、搜索活動を実施した。

災害対策本部より活動地区の指示、詳細な地図、住民情報は津波により消失し大まかな地図一枚に示された場所を検索することになったが、人命情報等詳細な情報がないまま現地に赴くこととなり、情報収集から活動地区の特定をおこない人命検索、搜索活動をおこなわなければならなかった。

寄木地区へは救助工作車が進入できず、救急車で送迎、県隊指揮、災害対策本部との無線通信が直接できず中継車両を配置するなど現場進入、連絡体制についての対策が必要であった。

現地で住民の方に場所の確認をおこなうと、必ず区長のところに案内された。区長は、地域の状況を完全に把握されており的確な情報を得ることができ、また、地元消防団の方々が中心となり一度は搜索活動が実施されていた。消防団の方に現場案内をしていただいて現場状況確認も把握することができ、活動計画を立てるうえで有効な情報であった。常日頃からの住民間のつながりを垣間見ることができた。

災害状況は、地震により倒壊した建物ではなく、津波により押し流された建物、元にあった場所には基礎のみ、遠く離れた場所に家屋を発見、建物の2階にトラックが、山の中腹には漁船、魚網、浮き等漁で使われていた物が・・・。

活動をおこなううえでの安全対策、津波警報発令時の連絡体制、活動隊への連絡、避難場所の選定等活動をおこなうまでの対策が必要であった。消防無線が直接災害対策本部、指揮所に通じないために中継車両を配置し連絡体制を確保した。携帯電話は不通であった。

活動にあっては、重点検索場所（建物内、斜面地、瓦礫が集まっている場所、畦等凸凹がある場所、河川等）を取り決め除去可能な瓦礫を除去、一方向ではなく多方面からの目視による確認をおこなうように意思統一を図り検索、搜索活動を実施したが範囲は広大であった。



17日は朝から大雪となり気温マイナス7度のなかでの活動となった。三陸自動車道路ではタイヤチェーンを装着、約2時間を要し陸前戸倉に到着、車両を駐車し地元消防団長の誘導により徒歩で津ノ宮、滝浜地区へ向かった。雪の中、足元はぬかるみ、橋が流されているため渡れる場所を探し、寸断された国道沿いに進入すること約2時間、滝浜地区に到着。



地区消防団の方の話では、一度はみんなで捜索をおこなったが発見できなかったとのことであった。日没までの時間を逆算し3時30分までの活動とし、約2時間30分の活動となった。不明者の居住場所、当時の状況を聞き検索場所、範囲を定めて活動、遺族の方からの要望に応じての捜索活動を実施した。

ベースキャンプから現地まで、おおむね1時間の予定が2時間、徒歩1時間の予定が2時間と現場到着まで時間を要し活動時間に制約があるなか、長時間資器材を持参しての移動、活動。

隊員は泣き言一つ言うわけでもなく全力で人命検索活動を実施。神戸隊のモチベーションの高さを感じることができた。

救助工作車が進入でき、重機があればもっと違う活動ができたのでは・・・、人海戦術には限界が・・・、思いは色々ある。

阪神・淡路大震災とはまったく違う災害であり、津波の破壊力に驚くばかりであった。



# 熊本地震

平成28年4月14日21時26分に熊本県熊本地方の深さ約10kmを震源とするマグニチュード6.5（暫定値）の「熊本地震」が発生し、益城町では震度7が確認された。その2日後の16日1時25分にも同地方の深さ約10kmを震源とするマグニチュード7.3（暫定値）と阪神・淡路大震災と同規模の地震が発生し、益城町と西原町で震度7が観測された。4月14日の地震が前震、4月16日の地震が本震と位置付けられた。

主な被害は死者49人、震災関連死15人、全壊住宅8,549棟、半壊住宅27,728棟に上っている。（熊本地震被災地への神戸市支援活動の記録 平成29年3月）



# 広島災害

平成30年6月28日以降の台風7号や梅雨前線の影響により記録的な豪雨（平成30年7月豪雨）となり、それに伴い、西日本を中心に広い範囲で多数の要救助者や行方不明者が発生しました。

神戸市消防局は広島県広島市安芸区上瀬野地区へ緊急消防援助隊兵庫県大隊として延べ13隊68名の消防部隊を平成30年7月12日から平成30年7月20日までの間、土砂災害現場における救助活動のため派遣しました。





# 主な災害対応の軌跡

年	月	種別	場所	概要
1968年（昭和43年）	11	火災	兵庫県有馬町 （池之坊満月城）	有馬温泉の旅館火災 死者30名
	12	山岳	東灘区住吉町 （大月地獄谷F2）	転落による負傷者を担架に固定し約8時間かけて救出
1969年（昭和44年）	6	火災	兵庫県浜崎通 （福山通運株）	LPG爆発により壁の下敷きになっていた3名を救出
	6	水難	東灘区本庄町 （はしけ）	波浪によりはしけにいた2名をロープ滑車により救出
	8	火災	兵庫県遠矢浜 （北海道）	神戸灯台沖合 船舶火災 死者4人 負傷者3人
1970年（昭和45年）	1	水難	東灘区本山町 （横の池）	池の水が割れ小学生が水没
1971年（昭和46年）	4	火災	東灘区住吉浜町 （神戸サイロ株）	負傷者5人
1972年（昭和47年）	4	火災	生田区中山手通 （神田工業所）	280㎡焼損 死者4人 負傷者5人
	6	自然	神戸市全域 （昭和47年7月豪雨）	死者3人 負傷者5人 家屋全半壊7件 家屋浸水912件
1973年（昭和48年）	3	火災	生田区中山手通 （安芸アパート）	603㎡焼損 負傷者3人
	6	火災	北区有馬町 （株古泉園）	有馬温泉旅館火災 476㎡焼損
	7	火災	灘区摩耶埠頭 （伊勢丸）	船舶火災 負傷者1人
1974年（昭和49年）	10	火災	生田区北長狹通 （坂口荘簡易宿泊所）	213㎡焼損 死者6人 負傷者5人
	2	火災	長田区腕塚町 （神戸デパート）	6,289㎡焼損 死者1人 負傷者40人
	5	火災	灘区森後町 （宮前市場）	2,185㎡焼損 負傷者5人
1975年（昭和50年）	3	交通	生田区海岸通 （海上保安部前）	車両に閉じ込め
	2	火災	長田区大橋町 （街区火災）	517㎡焼損 負傷者4人
1976年（昭和51年）	7	火災	東灘区魚崎西町 （久星酒造株）	1,362㎡焼損 負傷者1人
	12	火災	長田区久保町 （神戸昭和コム工業所）	909㎡焼損 死者4人
1977年（昭和52年）	2	火災	葦合区東雲通 （三和E）	389㎡焼損 死者3人 負傷者6人
	10	生き埋め	灘区灘浜町 （小野田レミコン株）	長時間の救出活動
1978年（昭和53年）	6	生き埋め	垂水区神出町	野井戸内の石積擁壁が崩れ土砂に埋没
1980年（昭和55年）	8	火災	生田区下山手通 （踊子ビル）	15人救助
	12	火災	中央区坂口通 （中西興産ビル）	1人救助
1981年（昭和56年）	11	火災	中央区旭通 （国際マーケット）	集合店舗（市場）火災 2,367㎡焼損 負傷者1人
1983年（昭和58年）	12	火災	中央区北長狹通 （チェリービル）	逃げ遅れた2人を救出
1986年（昭和61年）	8	火災	中央区旭通 （まや荘）	逃げ遅れた身体不自由な人を救出
	7	火災	北区有野町 （陽気寮）	社会福祉施設火災 1,375㎡焼損 死者8人
1987年（昭和62年）	2	その他	西区伊川谷町 （阪神高速北神戸線）	橋桁工事中に崩落し死傷者が発生 死者2人
	7	生き埋め	西区伊川谷町 （セイコー化成）	化学工場爆発火災 1人救助
1988年（昭和63年）	1	山岳	灘区六甲山町 （南六甲保塁岩）	ロッククライミング中にロープ操作を誤り転落負傷
	3	火災	長田区堀切町 （寿マンション）	3階で逃げ遅れた2人を救出
	11	火災	中央区加納町 （日本生命三宮ビル）	11階から進入し屋内階段を利用し12階の2人を救出
1989年（平成元年）	4	火災	兵庫県高松町 （株ライオン高松工場）	2,033㎡焼損 負傷者1人
	11	その他	中央区加納町 （JR新神戸駅）	連絡通路（15m）から飛び降りネット式救助法にて救助



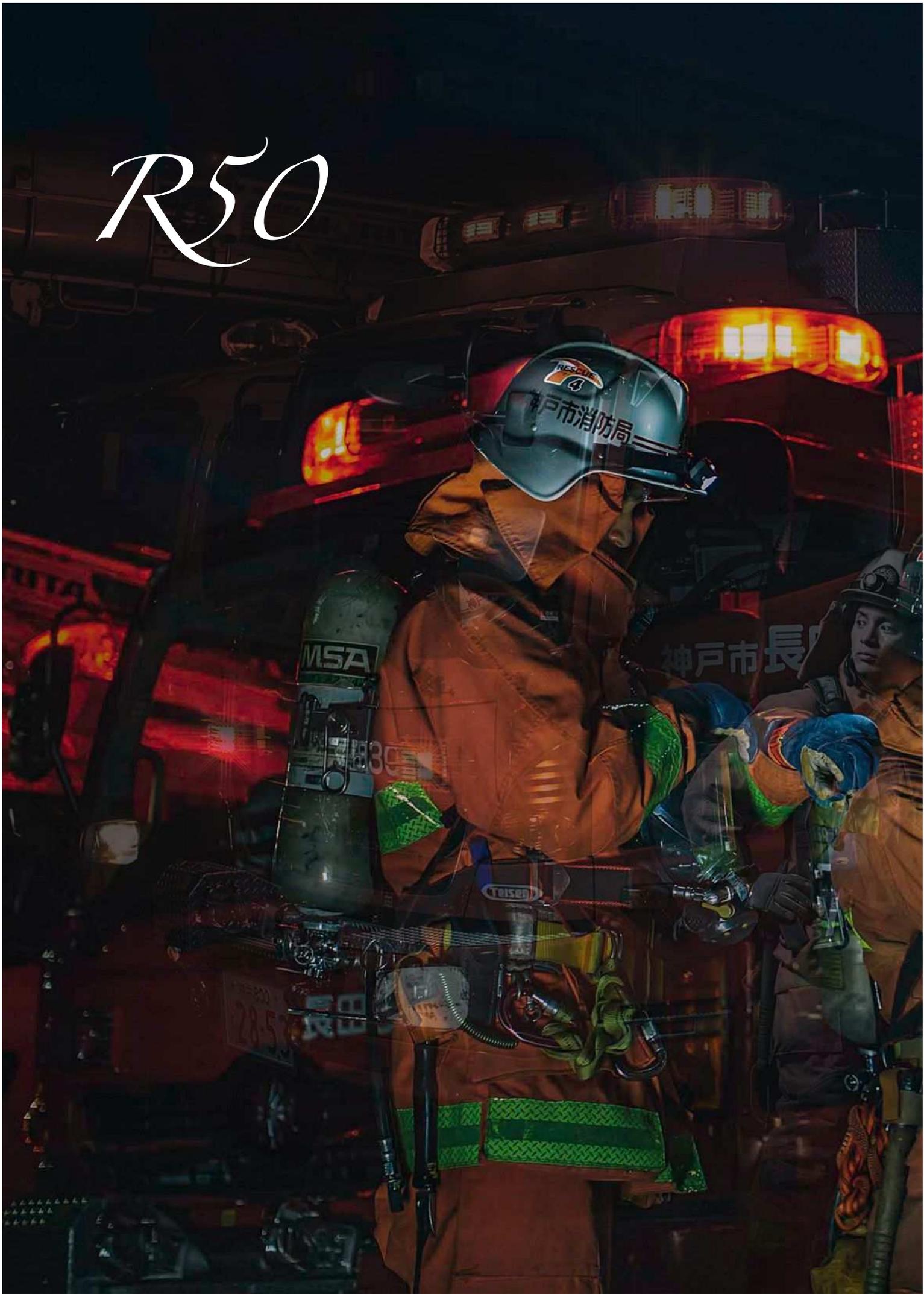




# 主な災害対応の軌跡

1990年（平成2年）	3	火災	長田区四番町（酒店）	屋内に取り残された意識不明、呼吸停止の1人を救出
	4	生き埋め	中央区雲井通（日本石油特約西村株）	建物取り壊し作業中に屋根と側壁が崩落し3人が下敷き
	9	その他	垂水区東舞子町	遊泳中に溺れ意識不明1人をテトラポットから救出
	12	交通	神戸港沖（ボートアイランド沖）	小型ヘリ墜落 死者3人
1991年（平成3年）	5	自然	（ボートアイランド沖） （国際救助隊派遣）	サイクロン災害 死者12万5千730人
	10	山岳	灘区六甲山町（西谷山紅葉谷）	12m下の岩場に転落負傷し約5時間かけて担架搬送
1992年（平成4年）	4	交通	須磨区一の谷（JR西日本軌道敷上）	寝台特急「さくら号」脱線 負傷者20人
1994年（平成6年）	5	機械	灘区六甲山町（六甲有馬ロープウェイ）	宙吊り 展望台
1995年（平成7年）	1	自然	神戸市全域（阪神・淡路大震災）	死者約6,500人 負傷者約44,000人
1996年（平成8年）	7	ガス	中央区港島（神戸新交通株）	立坑内で作業中の硫化水素中毒者2人救出
1997年（平成9年）	1	水難	島根県隠岐島沖（ナホトカ号）	ロシア船タンカー重油流出事故による 職員派遣
1998年（平成10年）	2	交通	北区山田町（神戸電鉄有馬線）	沢第2踏切にて列車とトラックの踏切での衝突脱線事故
	6	その他	須磨区西須磨（立坑工事現場）	最深36mの立坑内において約2m転落負傷
	9	自然	兵庫区東山町（新湊川）	水害（第1回）
1999年（平成11年）	6	自然	兵庫区東山町（新湊川）	水害（第2回）
	8	自然	トルコ共和国（国際救助隊派遣）	地震災害
2000年（平成12年）	3	火災	中央区北長狭通（リソリンハウス元町店）	死者4人
2001年（平成13年）	7	その他	明石市大蔵海岸通（朝霧歩道橋）	明石花火大会歩道橋事故 死者11人
2002年（平成14年）	7	交通	神戸淡路鳴門自動車道下り（18.1Kポスト）	バスやトラックなど車両9台の多重衝突事故 死者4人
	11	ガス	中央区港島南町（神戸フィッシュミール共同組合ビル）	魚粉製造工場にて硫化水素が発生し死傷者が発生
2003年（平成15年）	6	火災	西区伊川谷町（伊川谷建物火災）	消防職員殉職事案
	2	ガス	長田区菊葉島町（金川造船菊葉島工場）	船内タンクで有毒ガスにより意識不明の負傷者を救出
2004年（平成16年）	10	自然	豊岡市（台風23号）	台風の影響により円山川の堤防が決壊 職員派遣
2005年（平成17年）	3	その他	中央区加納町（ビル解体工事現場）	作業中の重機が4階から1階へ転落
	4	交通	尼崎市（JR西日本福知山線脱線）	塚1駅〜尼崎駅間脱線 職員派遣 死者107人
2006年（平成18年）	2	水難	兵庫区築地町（兵庫第1突堤東側海上）	海に沈んだ軽乗用車から1人を救出
	9	火災	灘区倉石通（畑原市場）	トタン屋根小屋裏を急激に延焼拡大した市場火災
2008年（平成20年）	3	交通	垂水区（明石海峡海域）	貨物船3隻が衝突し複数の外国人負傷者発生と油流出
	7	水難	灘区水道筋（都賀川）	局地的な豪雨により河川が増水し要救助者9人が発生
	12	山岳	灘区摩耶山町	夜間・氷点下のなか約5時間にわたる捜索活動後に救出
2009年（平成21年）	6	火災	東灘区深江浜町（株三輪北工場）	消防職員殉職事案
2010年（平成22年）	4	山岳	灘区六甲山頂町（大月地獄谷ルート）	悪条件での長時間検索活動により要救助者を発見し救助
	8	火災	須磨区天神町（西須磨市場）	進入口が屋内階段1箇所のみの建物において5人を救出
2011年（平成23年）	3	自然	東日本大震災	職員派遣
2012年（平成24年）	8	水難	中央区東川崎町（川崎重工神戸造船所）	2名で潜水訓練中に1人が行方不明
	9	火災	姫路市網干区興浜（株日本触媒姫路製造所）	職員派遣 消防職員を含む死傷者37人
2014年（平成26年）	4	その他	中央区布引町	解体中の建物外壁倒壊事故 負傷者2人
	8	自然	北区山田町（柏尾谷リバーパークキャンプ場）	河川増水により下山できない51人を救助
2016年（平成28年）	4	自然	熊本地震	職員派遣
	4	その他	北区道場町（新名神高速道路工事現場）	橋桁落下 10人死傷
2017年（平成29年）	7	交通	中央区神戸空港（神戸空港海上アクセスターミナル）	ベイ・シャトル接触事故 重軽傷者13人
2018年（平成30年）	7	自然	灘区篠原台（平成30年7月豪雨）	土砂崩れ
	8	自然	兵庫区築地町（台風20号）	仮眠中のトラック運転手が周囲の水位上昇に気づかず孤立
	9	自然	東灘区向洋町東（台風21号）	床上浸水により建物2階に従業員が取り残される

R50





救助工作車  
救助回轉翼機  
消防艇

歷史



昭和の時代、

## 真っ先に駆け付けて来るランクルの救助車

がかっこ良かったです。

当時の救助隊は、防火服も着ずに火災現場の最前線で活動しており、

凄いと思っていました。今後も力強い存在でいてください。

桂 敏美 (59歳)





トヨタランドクルーザー

〔変遷〕

昭和43年 消防局消防課（消防4）

昭和43年 退役



日産パトロール

〔変遷〕

昭和44年 消防局消防課（消防4）

昭和45年 灘消防署（消防4）

昭和49年 退役

## 救助工作車の歴史

火災をはじめ、交通事故、山岳救助、水難事故や機械事故、特殊災害にと多種多様な災害に対応するため、様々な資機材を装備している救助工作車ですが、50年前の発隊当時は1台の小さな四輪駆動車から始まりました。



日野レンジャー

〔変遷〕

昭和59年 生田消防署（生田30）

平成6年 退役



トヨタランドクルーザー

〔変遷〕

昭和54年 須磨消防署（須磨30）

昭和62年 退役



トヨタランドクルーザー

〔変遷〕

昭和45年 消防局消防課（消防7）  
昭和49年 生田消防署（消防7）  
昭和50年 灘消防署（消防92）  
昭和50年 退役



トヨタランドクルーザー

〔変遷〕

昭和46年 須磨消防署（消防9）  
昭和53年 退役



日産SC80改

〔変遷〕

昭和50年 生田消防署（消防94）  
昭和58年 退役



トヨタランドクルーザー

〔変遷〕

昭和51年 灘消防署（消防92）  
昭和59年 退役



いすゞエルフ

〔変遷〕

昭和60年 灘消防署 (灘30)  
平成6年 退役



日産コンドル

〔変遷〕

昭和63年 須磨消防署 (須磨30)  
平成11年 退役



F U S O



日産コンドル

〔変遷〕

平成11年 長田消防署 (長田30)  
平成25年 退役



三菱グレート

〔変遷〕

平成8年 西消防署 (西30)  
平成19年 垂水消防署 (垂水31)  
平成21年 退役



日野レンジャー

〔変遷〕

平成5年 西消防署（西30）  
 平成8年 灘消防署（灘30）  
 平成13年 東灘消防署（東灘30）  
 平成19年 灘消防署（灘30）  
 平成19年 退役



いすゞフォワード

〔変遷〕

平成7年 生田消防署（生田30）  
 平成12年 中央消防署（中央30）  
 平成19年 垂水消防署（垂水30）  
 平成21年 退役



三菱ファイター

[変遷]

平成12年 須磨消防署 (須磨30)  
平成13年 北消防署 (北30)  
平成26年 退役



日野レンジャー

[変遷]

平成18年 中央消防署 (中央30)  
平成19年 水上消防署 (水上30)  
平成25年 消防局警防課 (神消30)



日野レンジャー

[変遷]

平成27年 北消防署 (北30)



日野レンジャー

[変遷]

平成26年 長田消防署 (長田30)



日野レンジャー

[変遷]  
平成20年 灘消防署 (灘30)



日野レンジャー

[変遷]  
平成22年 垂水消防署 (垂水30)



三菱ファイター

【変遷】  
 昭和63年 垂水消防署 (垂水4)  
 平成13年 (垂水4→垂水33)  
 平成15年 退役



三菱ファイター

【変遷】  
 昭和63年 北消防署 (北1)  
 平成13年 須磨消防署 (須磨33)  
 平成15年 退役

# ポンプ付救助車の歴史

増加する救助事案に対応するため、当初はポンプ車に救助資機材を積載し災害現場へ出動していました。昭和62年に本格的に救助資機材を積載しつつもポンプ車としての機能を併せ持つポンプ付救助車を配備しました。



三菱ファイター

【変遷】  
 平成4年 長田消防署 (長田3)  
 平成10年 専任救助隊発足に伴い  
 普通ポンプ車扱いへ  
 平成18年 退役



三菱ファイター

【変遷】  
 平成4年 善合消防署 (善合4)  
 平成12年 中央署山手出張所 (中央4)  
 平成13年 (中央4→中央33)  
 平成15年 北神分署 (北33)  
 平成18年 退役





日産コンドル

〔変遷〕

平成元年 水上消防署（水上1）  
平成13年 （水上1→水上35）  
平成16年 退役



日産コンドル

〔変遷〕

平成元年 兵庫消防署（兵庫3）  
平成13年 （兵庫3→兵庫33）  
平成16年 退役



三菱ファイター

〔変遷〕

平成2年 西消防署（西1）  
平成4年 専任救助隊発足に伴い  
普通ポンプ車扱いとなる  
平成16年 専任救助隊が代車運用  
平成17年 退役



三菱ファイター

〔変遷〕

平成2年 東灘消防署（東灘4）  
平成13年 灘消防署（灘33）  
平成17年 退役



日産コンドル

【写真】  
平成16年 垂水消防署（垂水33）  
平成19年 西消防署（西33）



三菱ファイター

【写真】  
平成19年 北神北神分署（北33）





日産コンドル

[変遷]

平成16年 須磨消防署 (須磨33)



いすゞフォワード

[変遷]

平成17年 兵庫消防署 (兵庫33)



日野レンジャー

[変遷]

平成18年 瀬消防署 (瀬33)

平成19年 東瀬消防署 (東瀬33)



いすゞフォワード

[変遷]

平成17年 水戸消防署 (水戸35)

平成19年 中央署突出出張所 (中央33)

平成25年 水戸消防署 (水戸33)





神消ヘリ I (S47.1~S60.10)  
昭和47年1号機を「KOBE」と命名。  
独自開発した空中消火ノズルを装備可能でした。  
型式名 川崎ヒューズ式369HS型  
登録記号 JA9069

神消ヘリ II (S56.1~H6.4)  
昭和56年 2号機を「KOBE-II」と命名。  
空から進出する部隊として機動救助隊が試行編成されました。  
型式名 BO-105S型  
登録記号 JA9556



神消ヘリ III (S60.3~H19.6)  
昭和60年 3号機を「KOBE-III」と命名。  
今日も消防防災機として活躍するBK-117型を国内最初に装備しました。  
型式名 BK-117型(※就航時)  
登録記号 JA9608

ヘリ IIIは運用中に2度の機体性能向上改修を実施し、BK-117B-2型となりました。最大離陸重量も3,350kgまで増加しました。また外塗装も平成6年に4号機に準じたデザインに変更されました。



BK-117型は旅客仕様で11人乗りの広いキャビンスペースがあり、必要な救助隊員と救助資機材を搭載し活動が可能なヘリコプターとして広く活用されています。

今日のラペリングやホイスト装置を駆使した山岳救助、水難救助、消火バケツを懸垂した林野火災防御活動を確立したヘリコプターです。



神消ヘリ I (H6.12~H26.12)  
平成6年4号機を「KOBE-1」と命名。  
操縦安定増加装置、電波高度計を装備し山岳救助能力が向上しました。  
型式名 BK-117B-2型  
登録記号 JA6739

ヘリ I は平成10年に画像伝送システム(ヘリTV)搭載の追加改修を実施し、新たに画像情報収集任務が付与されました。

大規模災害等で上空からリアルタイムの画像伝送することは災害状況の把握にとっても役立ちます。





ヘリコプターは、水難救助現場へ最先着することが多く、航空救助隊員は水難捜索・救助訓練が欠かせませんでした。

一度潜水活動を実施すると気圧変化の影響を懸念して、帰路は陸移動で庁舎へ戻ることも多々ありました。



ひょうごへりⅡ(S63.8～H18.8)

平成16年より兵庫県・神戸市の共同運航に伴い県市3機一体運用が開始されました。

愛称 ひょうご

型式名 BK-117B-2型

登録記号 JA9909



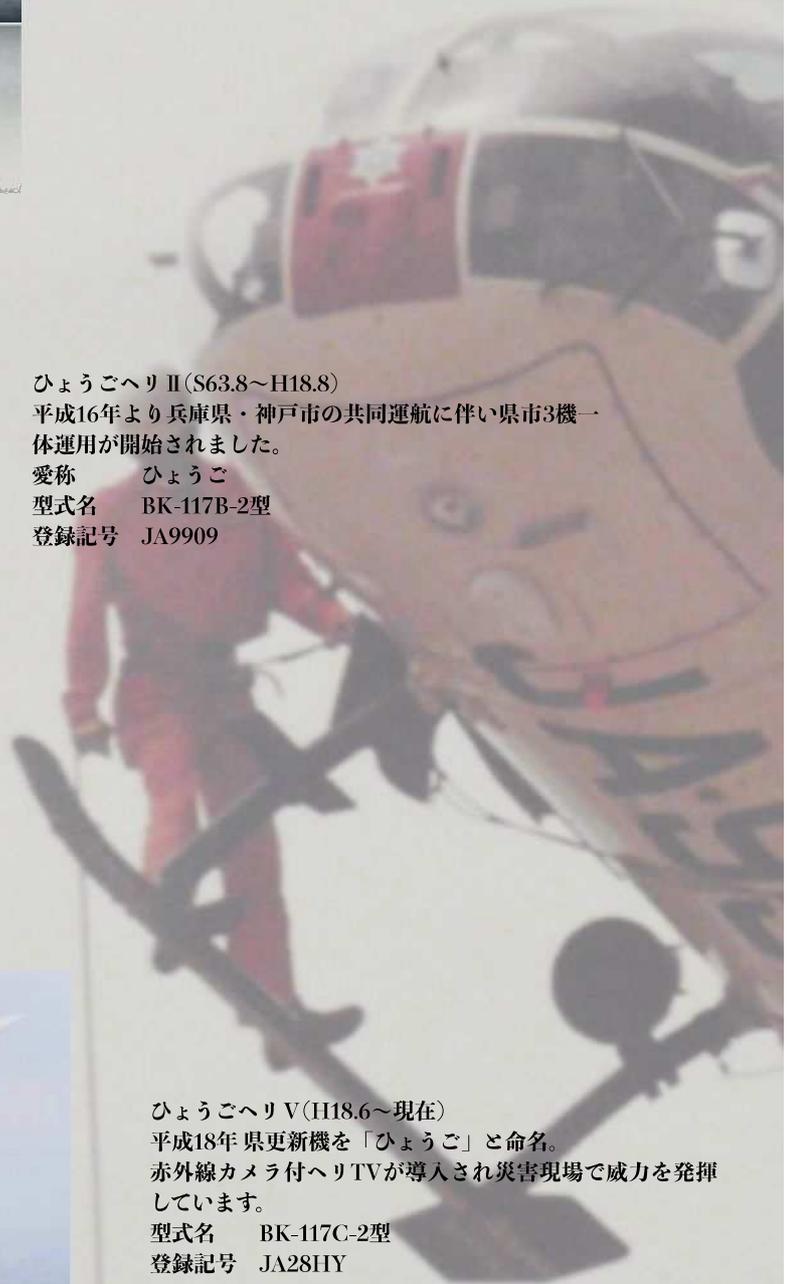
ひょうごへりⅤ(H18.6～現在)

平成18年県更新機を「ひょうご」と命名。

赤外線カメラ付ヘリTVが導入され災害現場で威力を発揮しています。

型式名 BK-117C-2型

登録記号 JA28HY





ひょうごヘリVは平成28年にヘリTVの更新改修をおこな  
い赤外線付ハイビジョンカメラとデジタル電送システムに  
機能向上しました。

平成16年からの兵庫県・神戸市の共同運航に伴い航空救助隊員  
は総数11名、常時2機稼働体制となり、県市の境なく同一事案の  
災害概要によっては2機のヘリコプターと多数の救助隊員を投入  
可能となり迅速且つ能率的な災害対応が可能となりました。

また緊急消防援助隊航空部門として県外応援をしつつ、県下警  
備も同時に実施可能な全国的にも数少ない航空部隊です。



ヘリⅡ(H19.3～現在)

平成19年 5号機を「KOBE-Ⅱ」と命名。

C-2型は胴体容積が拡大すると共にホイスト長も90mとなりまし  
た。

型式名 BK-117C-2型

登録記号 JA02KB

KOBE-Ⅱ」のデザインは神戸市消防局救助隊のシンボルである  
イーグルを赤色で描いています。

全体のデザインは先代「KOBE-I」「KOBE-Ⅲ」を継承し、六  
甲山の緑の風を纏って力強く飛翔するイメージを込めたのです





平成19年、新旧交代の記念飛行を実施。  
 「KOBE-I」「KOBE-II」「KOBE-III」の3機が同時に飛行した一期一会の機会でした。  
 この年、歴代最長の22年もの間、神戸の安全安心を空から守って来た「KOBE-III」が引退しました。  
 総飛行時間4536時間25分でした。

神戸市の航空隊は昭和47年の発足から46年が経過しました。

機体性能が向上した今日においてもヘリコプターを用いた救助、消火、救急、情報収集等の各任務において、隊員個々の技能が活動の安全、確実、迅速の根本であることは不変であると言えます。

また組織活動が前提である消防活動の中、時に山岳救助等において孤軍奮闘を余儀なくされるのが航空小隊活動の特徴であると言えます。

自ら活動方針を立て、安全管理を行いつつ実践対処する、高度な技術と判断力が不可欠であることはこの先も変わらない消防航空活動の根拠です。



ヘリ I (H27.1～現在)

平成27年 6号機を「HYOGO・KOBE-I」と命名。  
 県市共同購入で機種統一した3機で災害対応を実施しています。  
 型式名 BK-117C-2型  
 登録記号 JA01HK



平成30年4月  
兵庫県消防防災航空隊/神戸市航空機動隊は神戸空港に基地を移転し、最新の施設で災害待機を開始しました。

<https://www.youtube.com/embed/SRGCL4q555Q>



初代救助艇「たちばな」（木造船19.69 t）

西暦

1936年6月神戸港救難所に配置

1949年8月生田消防署に無償貸与、消防艇の機能追加のため修理、偽装を実施

1950年4月生田消防署水上消防隊に就航、兵庫埠頭「国際倉庫」火災に初出動

1966年4月休船となり接岸用栈橋兼乗組員宿泊施設となる

1966年7月芦屋浜に曳航され、解体



初代消防艇「くすのき」（鋼鉄船19.99 t）

西暦

1942年9月兵庫県警にて建造

1945年8月進駐軍が接收

1953年2月神戸市へ返還、生田消防署水上消防隊に就航

1967年5月休船

西暦

1960年6月6日配置

2代目「たちばな」/19.5 t





西暦  
1967年進水  
2代目「くすのき」/ 36.6 t  
(消防艇)



西暦  
1975年進水  
3代目「たちばな」/ 43.44 t  
(化学消防艇)



西暦  
1982年進水  
3代目「くすのき」/ 133.72 t  
(化学消防艇)





平成3年12月配置

4代目「たちばな」/46.0 t

(化学消防艇)

配置された当時は日本最速を誇る消防艇。

平成7年には阪神・淡路大震災を経験し、当時は消防用水が不足する中、港から海水をくみ上げ、火災現場まで送水を続けた。





平成24年2月配置  
4代目「くすのき」19トン  
(化学消防艇)  
3代目「くすのき」よりも小型化されたことにより、機動力が向上しました。



平成29年4月配置  
「たかとり」46.0トン

名の由来

神戸市の市街地西部の長田区と須磨区の境界に位置する「高取山」に由来します。  
高取山は、古くから漁民や航海者の安全を守る守護神が座す御山（おやま）とされてきました。  
また、神戸港沖からは高取山をくっきりと望むことができます。  
神戸の風景、海と港の歴史を体現する名前です。

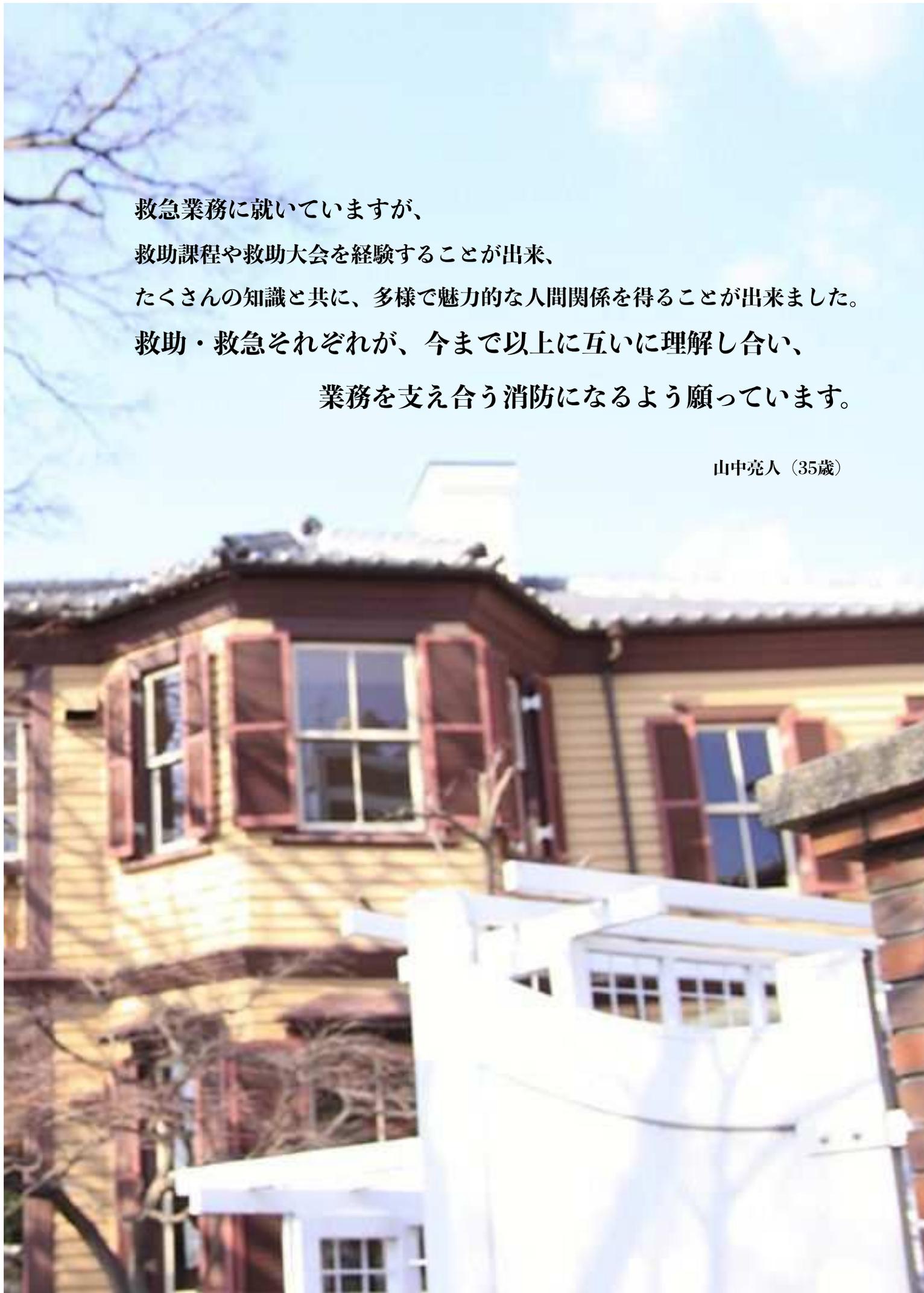
三 全般的建築物  
HOKKAI UNIVERSITY  
UNIVERSITY OF EDUCATION  
UNIVERSITY OF EDUCATION  
UNIVERSITY OF EDUCATION

ライムの館

北野町東公園

救急業務に就いていますが、  
救助課程や救助大会を経験することが出来、  
たくさんの知識と共に、多様で魅力的な人間関係を得ることが出来ました。  
救助・救急それぞれが、今まで以上に互いに理解し合い、  
業務を支え合う消防になるよう願っています。

山中亮人（35歳）





真っ白なページに描く未来



救助については、初任科の救助訓練しか携わったことはありませんが、厳しく愛のある指導を受けた記憶があります。救助隊発足50周年、今後も頑張ってください。

立花文太（22才）



# Rescue Training

## 救助課程



救助隊員の資格は、消防大学校における救助科又は消防学校の教育訓練の基準に規定する消防学校の救助科を修了した者とされています。

神戸市消防局では神戸市消防学校において、救助課程として、3週間の特別な訓練を実施しています。





神戸市の救助課程は、昭和41年、陸上自衛隊富士学校でのレンジャー訓練から始まりました。昭和41年富士学校1期生から平成30年度の第43期生まで、**総勢1108名**（神戸市の救助課程には、兵庫県下の各消防本部、和歌山県、高知県、熊本県等、各地の消防本部からも入校し180名が修了しています。）の職員が厳しい訓練を修了しています。

修法ヶ原での渡過訓練



神戸市消防学校での渡過訓練



神戸市の救助課程は自衛隊富士学校のレンジャー訓練を基に構成されており、救助操法、ロープワーク、救助器具取り扱い訓練、山岳救助訓練、救助体育、テンマイル等を実施、全国でも1，2を争う厳しい救助訓練として有名です。特に訓練最終日に実施される「テンマイル」は真夜中の六甲山約30kmを体力調整をしながら走破する過酷な訓練です。

# 救助課程を振り返る



昭和40年ごろ、高度経済成長期後半、神戸市の災害は多種多様化し、人命救助を必要とする複雑な現場が増加の一途にありました。

人命救助事案に対応するため、神戸市消防局は消防専任救助隊発足を目指します。

救助訓練の先駆けとして、昭和41年3月、陸上自衛隊から教官を招き、救助に必要なレンジャー技術を導入しました。

## <第1期生（昭和41年）～第3期生（昭和43年）>

昭和41年12月4日、神戸市消防局10名の精鋭が、陸上自衛隊富士学校のレンジャー訓練に派遣されました。これが救助課程の第1期生です。

7日間の地獄のような訓練、救助課程の歴史はここから始まります。

翌昭和42年に10名、昭和43年に6名の隊員が派遣され人命救助の基本、技術、精神力を徹底的に叩き込まれました。

この富士学校での厳しい訓練が、現在の救助課程の基本となっています。

「テンマイル」は富士学校からの伝統です。



保塁岩



初代救助課程研修生の修了写真



<救助課程 第4期生（昭和44年）～第7期生（昭和48年）>



第4期生からの昭和44年11月3日から9日まで、富士学校の卒業生が指導員となり、市教育植物園にて、救助訓練が実施されました。

陸上自衛隊富士学校で鍛えられた隊員が富士学校の教官と同じように、鬼教官となり指導にあたりました。

昭和46年には陸上自衛隊福知山駐屯地に、第5期生10名が、翌年には陸上自衛隊伊丹駐屯地に第6期生14名が派遣され訓練を受けています。自衛隊での訓練はこの年が最終となりました。



救助課程 第7期生 7 graduating class

救助課程 第5期生 5 graduating class

昭和46年には、第5期生の10名が陸上自衛隊福知山駐屯地でレンジャー訓練を受けました。陸上自衛隊富士学校同様、とても厳しい訓練でした。

第7期生からは、神戸市消防学校において専任救助隊員が指導員となり教育しています。専任救助隊員が指導員となる現在の指導体制はここから確立されていきました。

# 救助課程の思い出

救助課程第8期生 近藤正一

はじめに

私の42年間の消防人生の中で救助隊として携わったのは、航空隊を含めて17年間でした。この間、阪神タイガース2軍キャンプに参加したこと。消防学校に掲げられている「ロープに挑む消防士像」のモデルになったこと。第15回全国消防救助技術大会神戸大会で宣誓をしたこと。酷寒の六甲山での山岳救助。大晦日の荒れ狂う海での水難救助。濃煙熱気の火災現場での救助活動など語り尽くせないほどの思い出がよみがえります。中でも私に消防士としての基礎を築いてくれた救助課程は鮮明に覚えています。

鬼の朝熊、仏の福井

以前より救助課程を志願していた私は、念願かなって第8期救助課程を受けることになりました。

第7期の訓練を受けた先輩から「厳しい訓練で怖い教官ばかりやで」と脅かされていたので、期待よりも不安の方が大きかった様に思います。

研修は、教官7名、学生22名で、最初の1週間は兵庫区荒田町にあった旧消防学校で、残りの1週間は六甲山神戸市教育植物園（現在の北区山田町下谷上中一里山、森林植物園内）で合宿訓練を行うという内容でした。

訓練初日のオリエンテーションでは、自衛隊富士学校で訓練を受けられた「鬼の朝熊、仏の福井」と異名を取るお二人から「訓練中は愚痴を言うな、悲鳴を上げるな、弱音を吐くな、全てやり通せ」といった内容の事を話され、全員が背筋を真っ直ぐにして真剣な面持ちで聞いていたような記憶があります。

「レンジャー！！」

この訓練で最初に教えられたことが、「レンジャー！！」という言葉でした。「レンジャー」とは、教育訓練により鍛え抜かれた精鋭部隊という意味が込められていました。「別れ！！」と言われると、敬礼と同時に大きな声で「レンジャー！！」登はんや、渡過、降下の際には「レンジャー近藤、降下準備よし！！」と呼称するよう指導されました。

消防学校での訓練

兵庫区荒田町にあった消防学校の北東側のグラウンド隅に4階建ての訓練棟があり、この訓練棟から南に20m離れた所に支柱が建てられており、この間に上下2段に水平ロープが張られていました。

今のような立派な施設ではありませんでしたが、訓練の内容は、縦穴救助などの操法訓練、屋上からの脱出訓練、斜めロープによる登はん、斜降脱出訓練などが行われ、水平ロープを使ってはセーラー（水平渡り）、モンキー、チロリアン渡り、2段の水平ロープを使っては平行渡りから肝試しと称して、ホール（両手を離して命綱だけでぶら下がる）など現在と変わりません。

体力調整の合間にロープワーク、操法の合間に体力調整と体を徹底的に鍛え上げ、訓練の仕上げは烏ヶ原水源地までのランニング。へとへとになり筋肉痛で足を引き摺りながら仲間と駅まで帰ったものです。

合宿訓練

訓練2週目の月曜日の朝、音楽隊のバスで六甲山神戸市教育植物園に向かいました。

ここで行う合宿訓練は、午前6時に起床、朝食前のランニングと体力調整から始まります。朝食後は、午前9時から宿舎の裏山に入り、自然の立木を使ってのフットロック登はんや斜め登はん。立木と立木の間には20mの長さの水平ロープを三角形に張り、そのロープを水平渡りで2～3名が次から次へ休む間も無く渡って行くという訓練でした。登れなくなった者、渡れなくなった者がロープに吊るされたまま、苦しさの余り弱音を吐く声と教官の激が周囲の山に木霊していました。

次の日は訓練用資機材やロープを携行して、急坂の再度山ドライブウェイを再度公園目指してランニング。たどり着いたとたん再度公園の修法ヶ原池の兩岸の立木にロープを張る様に指示されました。訓練はこのロープを水平渡りで渡って行くのですが、渡って行くたびに丁度中程ぐらいで足が水面すれすれになるという設定になっていました。ロープから落ちた者は全身が池に浸かり、ずぶ濡れになった活動服は疲れた体に重くのしかかりました。

夜間の訓練

夕食後は夜間訓練と称して、照明を消した真っ暗な室内でのロープ結索訓練。間違えると体力調整が待っています。入浴中や就寝中にも呼集があり、遅れて来た者、服装が乱れている者、毛布の耳を揃えて畳んでいなかった者がいれば、「全体責任。腕立て用意！！」となります。それが終わると、深夜の再度山ドライブウェイを連続歩調でランニングするというのが日課となっていました。ある日は、再度公園で帰れると思っていると、そのまま進み続けてビーナスブリッジの近くまで南下し、眼下に神戸の夜景を見たこともありました。

## 林園長の豚汁

宿泊研修で食事などの身の回りの世話をして頂いたのが、教育植物園の林園長さんでした。

辛い訓練で疲れて宿舎に戻って来ての食事は、時には冷たかったり、おかずは質素でしたが具沢山の豚汁など汁物が用意されており、激しい訓練のあとに食べると本当に美味しかった記憶があります。

## 保塁岩での訓練

テンマイルを明日に控えた金曜日の午後から、六甲山の保塁岩での訓練がありました。保塁岩は六甲ケーブル六甲山上駅の西側に位置し、断崖絶壁の谷を挟んで二つの大きな迫り出した岩場で、ロッククライミングの名所となっている場所です。

訓練は岩場と岩場の間に水平ロープを張り、ここを何人が繋がって渡るといいうものでした。もちろん安全ネットなど有りません。全員が水平渡過の状態から命綱を握ってぶら下がり「命綱から手を離せ！！頭を下にして目を開けて下を見ろ！！」と言われるのですが、高所恐怖症の者には命綱から手を離すことは出来ず、まして目を開けることなど到底無理な事で、とうとう力尽きた仲間がロープの真ん中でぶら下がったままとなり「給料いりません。ボーナスもいりません。飯もいりません。助けてください！！」と谷底に向かって大声で訴えていた光景が思い出されます。

## テンマイル走

テンマイルは、深夜3時に教育植物園宿舎を出発し、西神戸ドライブウェイを六甲山頂目指して登っていく研修最後の訓練です。どこまで走るか、どこで体力調整をするのかは知らせてくれない為、体力だけでなく精神的に追い込まれました。

六甲山牧場で体力調整を終えると、レモンが丸ごと1個配られました。いつもなら酸っぱくて顔が歪みそうになるレモンが、喉が渇いて口が粘っている時に食べたものですから、この時ばかりはレモンがこんなにも甘く感じたことは有りませんでした。

休憩後、再び走り出して下山するのかなと思った矢先、くるり方向転換し六甲山頂目指して登って行った時は気持ちが切れそうになる思いでした。

テンマイルの途中には、声出しの隊員に合わせて他の隊員が追いかけるように、いわゆる木霊のような声を出す事は現在も行っていると思いますが、訓練も終盤にさしかかり、なんくそと言う思いを込めて、ある隊員が「我ら」、「元気」、「教官」、「バテた！！」と声出しをしたため、教官の怒りを買って、体力調整をさせられた挙げ句に、元来た道に戻る羽目になりました。

のどの渇きを癒すため小川に倒れ込み水を飲み、膝を痛めていた者に肩を貸して走り、走れなくなった者をロープで引っ張り、担架に乗せて走ったりと、全員が必ず最後まで完走するんだと叱咤激励されました。訓練当初から両膝を痛めていた隊員は、激痛に涙を流し、足を引き摺りながらも、全員が一人も脱落すること無く、各消防署長や幹部、林園長が待つ宿舎前に感動のゴールをしました。

## 総合訓練

テンマイルが終了し訓練の総仕上げとして、兵庫区荒田町荒田高層住宅において総合訓練を披露しました。水平担架救出や座席降下、斜めロープによる登はんや斜降脱出。私は9階から子豚搬送（人間を背負っての降下）による救助を行いました。訓練中、眼下には大勢の通行中の市民が足を止めて訓練を見ていた光景が目に見えます。

## 2回目の救助課程

昭和51年4月、希望がかなって灘消防署に異動となり専任救助隊の補助隊員となりました。しかし、5月に入って間もなく、救助係より5月17日から6月5日までの第9期救助課程に教官として参加するようと言われました。当然、救助係には補助隊員で何も出来ませんとお断りをしたのですが、帰って来た言葉が「教官とは仮の名で、もう一度鍛え直すから、生徒と同じかそれ以上のことをやれ」と言われ、第8期から私を含め3名が教官として参加しました。私の経歴表の研修欄には2段に救助課程と記載されていました。

## 終わりに

救助課程はロープワークを始めとする、あらゆる救助技術の習得は元より、体力の限界においても任務を完全に遂行する為の体力・気力・忍耐力・不撓不屈の精神を養う訓練であり、これらは陸上自衛隊富士学校から受け継いでいるレンジャーの精神の様に思いました。

私が17年間、救助隊に携わってこれたのは、救助課程で徹底的に指導を受け、授かったレンジャー精神があっこそと感謝しております。

これからも、この精神を引き継いで行って頂き、神戸市消防局消防救助隊の益々の発展を祈念申し上げますとともに、救助隊発足50周年記念のお祝いの言葉とさせていただきます。

# 救助課程選考会

*Not defeated*

神戸市消防局の救助課程は、誰もが受講できるわけではなく、救助課程選考会で、定められた基準（実技と学科）以上の成績を残し、所属内で上位の成績を残さなければ、救助課程を受講することができません。8月中旬のまだまだ暑い夏の日、救助隊を目指す、熱き男たちの挑戦が繰り返されます。

オリエンテーションの様子



学校教官から選考会に際しての諸注意等があります。

学生は、筆記試験後の体力試験に備えてトレーニングウェアで受講しています。

## 救助課程事前選考会突破の基準

筆記試験（50点）・体力試験（100点）合計150点中、90点を選考基準としています。

各所属は基準を満たした者の中から所属事情に応じて入校生を決定することになります。選考基準点を満たしていないものは、所属判断でも救助課程を受講することはできません。

神戸市救助隊発足50周年となる平成30年度救助課程事前選考会受講者は総勢53名で、入校資格者は34名となりました。

筆記試験の様子



救助隊員として必要な知識について筆記試験が実施されます。

この筆記試験が取り入れられたのは、平成28年度の選考会からです。

## 筆記試験の内容

出題範囲

神戸市消防局救助規程・救助指針・訓練実施要綱・小隊活動基準・消防救助操法の基準など

平成30年度救助課程事前選考会受講生の筆記試験成績

最高成績 45点（総合成績3位）

総合成績1位の受講者は筆記試験で42点、2位は41点の成績をおさめているように、救助隊は体力だけあってもなれません。また逆に筆記試験で43点を得ても入校資格がない者もあり、バランスが問われています。

## 体力試験の内容

### 種目内容

現在は3000m走・上体起こし・腕立て伏せ・反復横飛び・懸垂となっています。平成26年度以前は7m登はんや握力測定、短距離走なども実施種目にありました。

平成30年度救助課程事前選考会受講生の試験成績

最高成績 93点 (総合成績1位)

各種目の最高記録は以下のとおり



### 腕立て伏せ

計時員の笛の合図で2秒に1回、腕立て伏せを実施します。床の高さ約10センチに置いているスポンジに顎が触れるまで腕を曲げ、元の姿勢に戻る動作を繰り返します。

『平成30年度実施最高得点』

最高得点20点

最高回数150回 (150回上限)



### 上体起こし

実施者は開始の合図で、両肘が両膝に触れるまで上体を起こし、再び背中がマットに触れるまで倒します。30秒間実施し、10秒後に再度30秒間実施、その合計を競います。

『平成30年度実施最高得点』

最高得点20点

最高回数89回



### 反復横飛び

サイドステップで中央ラインとサイドラインを繰り返し往復します。20秒間でラインを越すか、踏むかの回数を競います。

『平成30年度実施最高得点』

最高得点20点

最高回数69回

### 懸垂

計時員の笛の合図で3秒に1回実施します。鉄棒にぶら下がり、鉄棒より顎が上に出た回数を計測します。

『平成30年度実施最高得点』

最高得点20点

最高回数30回 (30回上限)



### 3000m走

200mトラックを15周走り、その時間を測定します。

『平成30年度実施最高得点』

最高得点20点

最高タイム 10分21秒



心を整える

## 救助員点検

救助課程では、通常点検の代わりに救助員点検を行います。「服装の乱れは心の乱れ」、体調確認に始まり、活動服のしわ、汚れ、手袋の破れがないか、特殊作業靴をピカピカに磨いているか、時には爪のチェック、カラビナの手入れ、頭の先からつま先まで、入念な点検を実施します。

指摘箇所1箇所につき腕立て伏せ10回、「よし」と大きな声で呼称し行います。部隊活動を基本とする救助課程では、一人でも指摘箇所があれば全員で腕立て伏せを行います。朝の点検から腕立て300回！これが毎朝の始まりです。

不思議なことに、なぜか、救助課程終了まで、指摘箇所が無くなることはありません。

# 連帯責任



# 準備万端



# 勤儉力行

# Rope work・救助操法

## セーラー渡過



セーラー渡過は、水兵が用いるところからこの名で呼ばれ、この渡過方法はロープの下方が見えるため、高所に対する恐怖心が伴いますが、熟達すれば軽量の物を携行することも可能です。

## モンキー渡過



モンキー渡過は、渡過するときの格好が猿に似ているところからこの名が付きました。この渡過方法は上を見ながら渡るため、高さに対する恐怖心を緩和することができますが、腕力と腹筋力を必要とします。

## フットロック登はん



上部より垂れ下がった懸垂ロープを片足もしくは両足に巻きつけ、登はん者と補助者が協力して登はんする方法です。

## モンキー登はん



斜めに展張したロープを、モンキー渡過の要領で登はんします。

## チロリアン渡過



オーストリアのチロル地方の人が、谷等に渡したロープを渡るときに使ったところからこの名が付きました。比較的体力を使わずに渡過することができ、かつ、スピーディーに渡過することができます。

### はしご救助クレーン操作



3連はしごをクレーンとして利用し、滑車を用い、容易にかつ安全、確実に救出する方法です。

### 検索救助操法



検索救助操法は火災現場における基本的な検索方法です。

### 立て坑救助操法



地下タンク等出入口が狭い立て坑内で発生した事故の救助方法です。

### 応急はしご救助操法



火災等で高所にいる要救助者を、3連はしごとロープを使い、迅速に救出する方法です。

### はしご水平救助操法1法



はしご水平救助は、担架に乗せた要救助者を、水平状態に保ったまま救助できる方法で、高所から安全に救助ができます。

### はしご水平救助操法2法





## Tenmile

救助課程最終日には、テンマイルという過酷な訓練が待ち構えています。真夜中の午前2時頃、摩耶山掬星台をスタートし、消防学校までの約30km、全員で声を掛け合い、全員で走破します。



途中、六甲山牧場、森林植物園、再度山大龍寺、大野社グランド等で、数回の体力調整を実施します。



掬星台から神戸の夜景に誓います。  
神戸の街を、神戸市民の安全を、救助隊員となって守ることを。



50年の歳月を重ね、

苦しい先にも、待つ神戸の「今」がある。  
昭和41年から始まったこの救助課程ではある  
が変わらず続く、この正念場...

言い換えれば、神戸市の救助隊員は全員、この  
*Tenmile*を経験している。



救助課程受講者全員が救助隊になるわけでは  
ないが、この時はみんなが歯を食いしばり、神  
戸の未来を背負う覚悟を決める。

*Tenmile*とは、神戸市消防局救助隊の

礎であり、**宝**なのである。



救助課程のテンマイル走は過酷でしたが、救助隊としての気概を身につけるために必要な訓練だと思います。時代と共に変化するものもありますが、良い伝統は残し、後世に伝えていく必要があると思います。救助隊発足50年、さらなる発展を願っています。

岸野克也 (33才)



Tennmileの締めくくりは、最後の救助員点検です。

訓練学生、指導員、全員が手袋を外し、  
指導員から学生たちに労いの言葉とともに  
熱い握手が交わされます。



伊関将司 消防司令補

### 経歴

平成17年 救助課程卒業（第34期生）  
平成19年 第1方面専任救助隊に配属  
平成20年 第5方面専任救助隊に異動  
平成25年 第4方面専任救助隊に異動  
平成26年 消防司令補昇任 救助隊長に選任される  
平成29年 消防大学校 救助科卒業  
同年 市民防災総合センター教育係に配属

### 当時の気持ちを振り返って



Tennmileを走り切った後、体はボロボロ、喉はガラガラ・・・同期全員がただ涙を流して指導員の方々と強く握手したのを覚えています。

私にとって専任救助隊は憧れであると同時にスタートでもありました。この時改めて、必ず専任救助隊になり、一人でも多くの方を災害から守ることを誓い、次は私がこの想いを後輩に伝えられる隊員になるのだと決意しました。

高松弘毅 消防士長

### 経歴

平成24年 救助課程卒業（第39期生）  
平成25年 北神消防救助隊に配属  
平成29年 第1方面専任救助隊に配属



第1方面専任救助隊の高松です。私は救助課程最終日の握手で達成感と疲労で涙が出たのを覚えています。それと同時に救助隊の先輩方から何かを託されたような感覚もあり、わずか数秒の握手ですが、お互いの想いが詰まった温かく、重たい握手でした。

専任救助隊となり未来の救助隊員へ託す側となった今は、『救助の世界へこいよ』という想いを込めて握手するようにしています。

## 第42期救助課程修了者

# 新人隊員の抱負



長田消防署消防第2係専任救助隊  
消防士長 野田 航一

私は平成30年4月に専任救助隊になりました。神戸市消防局の内定が決まる前から救助隊への憧れがあり、平成26年に神戸市消防局に入局してからずっと目指してきました。救助隊員は自分に厳しく、一瞬の間も見せない仕事人という印象があり、そんな職人のような男らしさに強い憧れがありました。そして憧れである救助隊員になるための登竜門である救助課程を受講し、ますます救助隊員になりたいという思いが強くなりました。

神戸市では専任救助隊になるためには救助課程という研修を受講しなければなりません。

そこでは救助隊に必要な知識や技術はもちろんのこと、強靱な体力、不屈の精神力も養われます。専科研修の中でも1番過酷な研修で、自分の限界まで追い込まれます。なぜならいかなる状況においても、人命救助という任務を遂行させる必要があるからです。私は平成28年にこの研修を受講し、これまでの人生の中で一番がむしゃらになって自分の限界に挑戦した期間でした。この研修を終えた後の達成感や学生の一体感は、私の宝物となりました。この先の消防人生においても記憶から消えることはありませんし、これを糧にどんなことがあろうと乗り越えられる自信ができました。またこの研修の指導に当たった専任救助隊の方々には、私にはとても眩しく見え、厳しさの中に愛情があり、いつか私もこんな救助隊になりたいと思いました。

念願の救助隊となり、今は上司の背中を見ながら日々勉強に励む一方、後輩の指導に当たっています。救助課程でお世話になった方々の指導方法を思い出して指導していますが、私の伝えたいことが伝わっているか、伝え方に問題はないかなどを考え、指導することの難しさを実感しています。しかし復習することで新たな気付きがあり、私自身勉強になるため、やり甲斐を感じています。また指導と平行して救助隊員としてのスキルアップのため、新規潜水隊員養成研修や特殊災害課程などの専科研修を受講し、一人前の救助隊員への道を突き進んでいます。

最後に救助隊発足50周年を向かえ、私はこれまでの災害で得た教訓や先輩方が培ってきた知識、技術を受け継ぎ、次の世代へ伝承していきたいと思っています。また憧れであった歴史ある専任救助隊となったので、責任感を持ち先輩方に恥じぬよう人命救助という使命を全うしたいと思っています。いつか眩しく見られるように、愛情のある救助隊員を目指してこれからの消防人生を歩んでいきたいと思っています。

# 神戸市消防局救助課程修了者

## 第1期S41.12.4～12.11

小野亙、掛井貞男、黒木勝美、高橋邦彦、高橋日出男、友定毅、中尾清和、山下高弘、横谷忠、野辺貞夫 (10名)自衛隊富士学校

## 第2期S42.10.22～10.29

朝熊一義、岡本茂樹、正方常夫、関重徳、竹内知一、新田正孝、野村一夫、福井啓剛、藤本貞夫、本折雅昭 (10名)自衛隊富士学校

## 第3期S43.11.3～11.9

岩橋三吉、太田宝広、川上慶典、久保田勝馬、中部裕、森本幸信 (6名)自衛隊富士学校

## 第4期S44.11.10～11.23

太田和男、久保壽夫、芝田逸美、新免経由、二杉徳和、野辺三郎、八村弘、福島増男、森本正臣、山崎芳春、山田悠三、山中邦雄、渡辺勤 (13名)市教育植物園

## 第5期S46.12.8～12.18

秋国忠則、大笹滋、亀井寛、蔵元一己、下浦正士、札常寛、鳥井悟、橋本悟、村岡好雄、藤原厚司 (10名)自衛隊福知山

## 第6期S47.9.19～9.30

赤沢保、浅利修二、池田善泰、太田有一、岡久、岡野永久、熊野修充、重野昌巳、芝地茂男、戸田真陽、坊池正、前益幸、清端康浩、森本健治 (14名)自衛隊伊丹

## 第7期S48.11.16～12.1

丹下哲夫、谷口清正、伊関薫、井上健一、佐藤浩一、芝田貴邦、高馬清三、東末敏宏、戸田明、中川賢一、西垣内勝、藤井和幸、藤田洋一、三宅康美、宮本正嗣、山田峰男、横垣内勝巳 (17名)神戸市消防学校

## 第8期S49.11.15～11.30

永吉哲也、新川茂樹、豊福武夫、片平久喜、福居清、清水昌利、重野功人、栗林利樹、藤田昌宏、近藤正一、池本周一、田中茂廣、竹之中貞二、坂元香、満尾勝徳、井上行央、吉川洋三、飯塚均、東嶋司、寺口晴喜、末吉秀喜、前田親 (22名)神戸市消防学校

## 第9期S51.5.17～6.5

源水英正、清水一正、幸山司、富田正隆、明石幸三、塚原康則、寺谷等、山田雄一、久次善信、千種文夫、上村季広、井上雅文、森口和樹、林正徳、石本種八、勝山繁樹、大森隆、上橋正和、織野広幸、長野一郎、麻生秀利 (21名)神戸市消防学校

## 第10期S53.2.20～3.4

北代泰光、山本雅夫、立垣康夫、清政勝司、植松健至、橋田昭、初世敏春、仲田嘉典、山下一彦、奥橋政輝、永野安信、堀江健一、合志知男、湯川卓郎、長岡和仁、植田耕治郎、加藤貞美、青木一正、谷口弘幸 (19名)神戸市消防学校

## 第11期S54.3.12～3.24

池田豊秋、稲岡信吾、奥田和義、北山昇吾、岡本吉永、岡本智、藤原信行、原見洋三、武田栄造、藤原義弘、中西義次、坂下靖司、芦田英明、鳥居義和、大藪正人、内山敦司、谷本光生、桂敏美、桜木勝利、黒田誠 (20名)神戸市消防学校

## 第12期S55.2.18～3.1

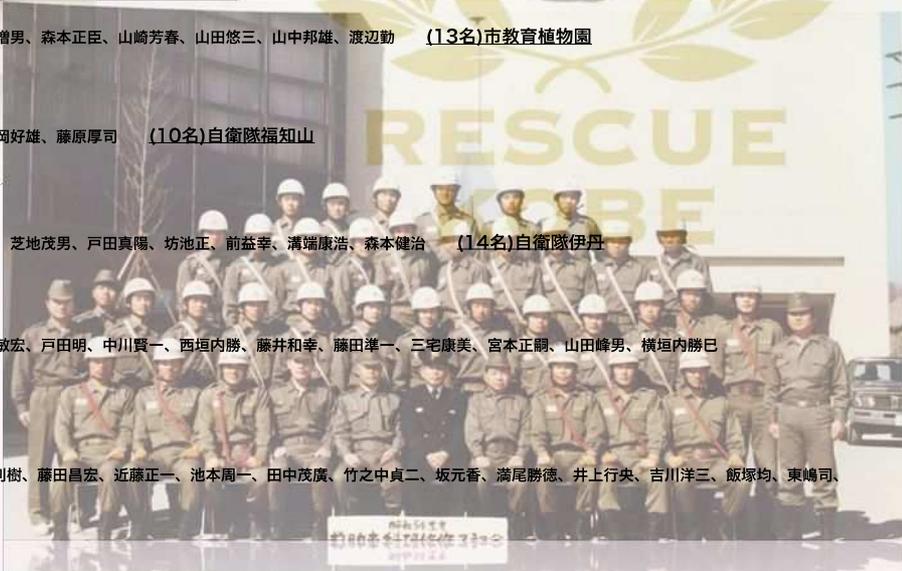
瀧尾浩一、大杉猛、樽一弘、池田潤、片平幸喜、津田貢、川西静夫、牧野勲、中谷明美、橋本好明、塩田昇、長谷幸雄、富永久雄、辻本孝雄、檜垣博敏、鷺野豊広、橋本富士夫、時本修、木村敏博、久戸章義、脇田裕之、原田良弘、大島雅幸、足立文磨、足立三佐雄、藤原兼人 (26名)神戸市消防学校

## 第13期S56.2.16～2.28

武内年生、高田恭男、高田義治、山本宏、中本也寸志、住友進、朝比奈寛、山本雅美、藤岡昭浩、坂本恵二、吉岡英樹、篠田和宏、甲斐康之、新谷孝、青山実、植山大二郎、近藤公成、吉本孝宏、清水康弘、川竹弘之、長野敏也 (21名)神戸市消防学校

## 第14期S57.2.22～3.6

春日和隆、山田敦司、名間健治、坂上志司、大西和哉、大橋達、日浦二一、松浦哲男、高原進、本岡克弘、中川均、藤森栄二、井上哲男、松谷安洋、秋永定利、吉岡義正、上山良介、谷口和幸、田中敏久、藤本利明、小林浩太郎、笹谷信之、山本周作 (23名)神戸市消防学校



## 第15期S57.12.6~12.18

小川巨隆、前田光明、東洋昭、新免勇人、原田嘉之、八代谷徹、黒田義和、小林秀蔵、塚川正彦、藤原幸人、山中啓嗣、加刈克久、東田和雄、田中利一、池田秀樹、肥田孝昭、岩田浩明、藤本哲正、橋本伸一、足立修、藤尾晃一、中田秀泰、中村隆男、藤川美博、時本和志、角金勝彦、北村滋朗、小松正幸、浜窪健一、山地卓 (30名)神戸市消防学校

## 第16期S58.12.5~12.17

小谷高士、石田秀欣、萩原裕士、黒川勝、前北忠志、加治屋博志、足立浩司、吉田克己、清水宏志、岡部喜久男、齋内生也、山村雅彦、菅原務、松隆智洋、小松原恒蔵、岩佐敏行、河本幸舟、田中廣一、鈴木英樹、神藤一郎、久米潔、田路雅幸、尾崎武彦、山口桂司、草壁伸雄、藤盛頼幸、坂本龍二、猪野敏、川崎祥志 (29名)神戸市消防学校

## 第17期S59.11.5~11.17

酒井信彦、千葉章雄、濱家雅之、角田浩二、浦瀬成久、岸本任、青木宏行、橋田達広、吉野忠、岡孝夫、藤田光一郎、岩井一尊、濱田宗徳、村上覚、駒坂茂三、前田徹、加藤泰一、坂田正人、寺坂浩、小畑勝己、足立真一、菅田慎三、中嶋久、岸本新一、藤本康人、長井慶喜、伊藤忠明、岸本喜朗、吉谷卓治、吉谷洋司、徳岡恒夫、八百川寿水、岡村義人 (33名)神戸市消防学校

## 第18期S60.11.1~11.16

岡田幸宏、下園英樹、西田隆行、福居敏夫、八尾和彦、藤原正幸、森本耕市、柴田誠二、森岡良喜、高村憲生、石井孝之、堀祥之、橋和臣、奥村芳彦、田中裕二、城本壮一、鷲尾敏治、森繁樹、小原靖彦、田中昌信、大島誠道、植田達也、藤原博徳、藤原正勝、中古谷康彦、中嶋昭、松本正俊、太田正明、宮本正之、神岡俊輔、富永誠也、宮原礼二、永野剛、中田英詞、森本博 (35名)神戸市消防学校

## 第19期S61.11.10~11.22

尾野俊介、井上修、土本一之、鈴木伸二、渡海正則、田中進、芝田賢弘、佐藤茂樹、平井秀樹、原田志朗、實井誠治、田内健作、藤田哲哉、岡田敏幸、木下功、新元治、吉田一志、浅野智文、福本泰三、久保裕司、高村浩二、植野智昭、神吉通生、岩井司、牛尾勝利、尾崎浩司、岩本満幸、藤本建治、小谷満輝男、広瀬康二、片岡敦一(31名)神戸市消防学校

## 第20期S62.11.9~11.21

志井秀樹、松下利宗、成田正道、田中由人、古市嗣夫、井上周二、櫛橋克治、波方宏彰、今村明、井上正晴、陰山修治、熊田晃久、藤原美義、野々村芳宏、正井潔、西村康男、辻正、繁田伸一、佐藤義明、藤本博、北山俊一、谷口忠弘、馬場喜己、角金勝彦、高井明、藤原俊平、久保理貴、岩瀬澄男、松村道博、高井祐介 (30名)神戸市消防学校

## 第21期S63.11.7~11.19

木元一昭、来徹男、中田充武、實井篤、城月徹、村上正人、喜多浩二郎、西村正利、水野厚、土井隆、赤迫啓至、田村公宏、川井清弘、大島勲夫、早原賢治、山端康人、藤原浩之、永井裕、星野誠治、藤田広樹、小川雄二、奥山英世、掃部康久、栗岡耕治、北藤義彦、河戸英昭、森常伸二、石川博文、佐田昇士、片田浩 (30名)神戸市消防学校

## 第22期H1.11.6~11.18

橋本邦彦、川上喜太郎、石原裕士、三浦信次、石井敬一郎、中原力、浅井薫、鶴田省二、長榮哲哉、藤田浩一、大槻幸蔵、橋本隆史、高橋信人、土居重政、木村博信、乾正延、松尾健史、田口和史、高原文治、山中賢彦、大槻忠義、梅田勇城、福島和久、和久井正人、岡本輝靖、内田斉、石川裕次、原信仁、堀川明彦、秋吉卓、西村安織、木村信介 (32名)神戸市消防学校

## 第23期H2.11.5~11.30

森本崇、山本雅章、森下雅之、谷川信一、藤井圭介、池口禎啓、中村繁孝、丸本和也、林田弘嗣、平田正好、生船憲司、浅野永治、後藤宣宏、生田恵士、星山博臣、花山昇、恩澤康次、廣田光彦、落合恒夫、塩田良夫、石田功幸、福田琢延、高瀬耕次、森脇浩、西垣浩次、中川裕文、西谷朋巳、増永高次、松本晃一 (29名)神戸市消防学校

## 第24期H3.11.5~11.30

香西義隆、高橋智、高田尚義、東泰宏、木村一郎、関根英司、金谷謙児、和田章夫、芝田真二、齋内勇、先間幸博、向井良、小林浩明、中垣政彦、鈴木崇正、田尾知弘、松井司、花谷好人、田上英樹、宮下英夫、大西広光、上村和裕、宮本有希雄、西川宜孝 (24名)神戸市消防学校

## 第25期H4.11.9~12.5

永石俊弘、井上登彦、一宮和宏、安部吉師、菊池晃司、伊藤力、柴原裕明、二見広一、藤本武久、田淵信久、新田幸司、戸田太、廣田尚史、住野圭司、由良哲朗、上間義宏、増田勝巳、富永雄一、宮野哲也、杉本和久、金野利彦、森田満、足立曉史、西村隆三、藤本世志起、猪野哲男、北村嘉健、山本篤史、藤山修一 (29名)神戸市消防学校

## 第26期H6.10.11~11.4

酒井広児、知野見和之、寺神貞憲、松本英樹、小西芳史、中垣伸弥、村上圭、田口裕史、飯田明、脇田聖治、長谷川博基、柏原隆志、有田達洋、横山悟、小林啓治、坊古居良友、片岡伸太郎、古市泰士、岡本晃始、藤本浩司、宮中智弘、板敷昇、玉林宏、加茂仁、柳生陽一、羽濑考策、今井照郎、市原英和 (28名)神戸市消防学校

## 第27期H8.11.19~12.13

松末人、中西健次、南兵衛、物袋和裕、佐藤孝、山本大二郎、益岡壽夫、川井寛司、松本貴士、宮村利幸、石崎親一、川辺晃生、柏原剛、加藤貴之、梶原一馬、炭谷泰弘、菅原聖次、飯田淳、末澤泰裕、西川建治、山本一利、矢野孔明、山下敬之、北川忠、佐藤繁、正垣哲、安達孝、宮地孝正、片岡和仁、西村勝光、小谷伸行、北尾大介、赤藤繁、美濃部敏雄、日比野望 (34名)神戸市消防学校

## 第28期H10.10.1.23~3.13

宮越清貴、小林鋭二、足立学、脇坂和明、岡本武士、桐野伸隆、羽淵隆則、藤田房幹、土屋貴志、下元俊二、安部浩二、宮慶真義、前田征啓、金子雅人、梅林龍治、栗林延功、三浦直樹、柴永賢吾、松田和文、厚貴則、鈴木雅未、森下建治、今村竜一、吉岡利征、垣田哲秀、藤本博年、藤賀裕之、岸本敦司、小山真規、藤下英二、和田清秀 (31名)神戸市消防学校

## 第29期H11.3.1~3.19

森田拓志、松村泰程、結城康之、松原賢司、車力勇、笹倉隆史、山本秀樹、山中裕司、知野見明生、香西辰哉、中川明法、泉川浩、鈴木三郎、森俊介、徳力英治、高津充雄、青山浩二、竹田充、河合龍治、西田貴幸、今村謙次、萬代恭紀、北崎宏行、伊藤彰男、村井慎二郎、田中睦之、藤原康知、野村尚史、田中孝明、島田剛幸、和田将志 (31名)神戸市消防学校

## 第30期H11.11.24~12.14

牧山勉、田中薫、広内実、立脇龍也、飯田隆彦、小松康範、岡村聡、岡野篤、杉山睦、下條純、立石信行、山西洋志、森下祐司、村瀬元一、三枝正平、廣町則行、橋本寛記、八澤直之、吉村量太、片山慶明、大田欽崇、日笠山樹、藤永英郎、奥田章裕、菅野修二、藤原潤 (26名)神戸市消防学校

### 第31期H12.11.27~12.15

田中洋、堤和也、森仁志、山本千昭、太田貴志、山本鉄也、窪田政夫、増田隆志、西村敏一、佐々木裕道、南智明、岩下勝、水門浩一、谷本成範、菊間貴光、上龍三、後藤宣徳、伊藤公一、今中憲弘、田中幹人、川北敏寛、田中裕臣、安達英之、山本和孝、平尾貴、大原忍、松本慎一、加形暢浩 (27名)神戸市消防学校

### 第32期H14.11.11~11.29

薄波哲也、真野信之介、姫嶋康文、高橋智宏、田辺剛、山口雅之、前田征治、安部亮平、上原拓真、泉辰朗、澁谷佳彦、小林正幸、藤井香介、北濱雄一、西山健太郎、野村哲也、三家靖啓、貝澤大介、鎌田智之、糸長直樹、園尾隆晴、野中伸一郎、石丸祐介、伊藤公一、青島隆也、藤井隆人、山根丈範、北野欽也、長濱央治、藤原佑也、福田輔、河野勝則、清水浩次、大久保雅章 (34名)神戸市消防学校

### 第33期H15.11.4~11.21

東亨、赤松宏章、福井淳、西川大輔、前田智義、藤原昌也、大津暢人、北川貴之、長渡昭虎、木下浩史、野田明、住吉樹、菊池悠、勝地聡、杉山裕一、釜江和孝、大森和宏、永井康道、國本哲、竹田了平、江川正和、松原勲史、古賀隆之、岸本敏和、小嶋康生、高見和雅、丸谷聡、千代延浩史、多田善宏、鈴鹿幸雄、羽瀧光太郎、玉谷伸一、竹本勇二 (33名)神戸市消防学校

### 第34期H17.10.11~10.28

塩谷俊行、福西信介、樋掛靖佳、足立崇也、高見洋輔、松本隆年、竹中邦明、阿部徹、作田健、宮本佳一、村上大輔、曾根拓磨、前川伸、木船優治、濱野勝一、松上倫也、伊関将司、前田邦夫、山本武志、鍋島浩紀、花房聖史、神野晃利、長谷雅之、鹿島周平、田中和宏、入田優、川田英靖、福原祐、岩國健太、田中健吾、神宮司直也、玉置修作、藤岡久人 (33名)神戸市消防学校

### 第35期H18.10.10~10.27

石丸亮介、神手大輔、奈島武弘、井上大輔、西川忠伸、坂本遼、中川祐樹、与那原基樹、乾翔太郎、伊東貢司、古川誠、正壽源太、塚本智尋、林英二、梅崎直樹、八木貴裕、三宅巨、敦見宗弘、藤原亮太、速水力、中間悠介、松尾優、岡田和臣 (23名)神戸市消防学校

### 第36期H20.10.6~10.26

前川央志、金澤勇太、坊真吾、長瀬享、木崎義統、梅木裕史、瀧田隆志、木本貴彦、松下謙一、上辻和也、中田考次、齊藤真也、山本修、高松由、中島影則、中島康夫、酒井大輔、中坪俊仁、赤松知明、柿木和哉、明石一弥、安部俊樹、山本志昭、村松匠、松栄陽介、横山貴幸、紀徳雄、藤原圭一、中澤寛之、長澤一平、芳澤輝雄、高木敏一郎、松原宏樹、加賀山達也、谷敏行、島崎武雄、久保田晋輔、石橋雅美、武内慎太郎、川順吉 (40名)神戸市消防学校

### 第37期H21.10.13~10.30

中井靖之、山本利彦、和知大祐、三木博文、津坂大輔、道本英樹、山口正瑛、辻岳史、河島弘和、松岡恭輔、増田拓、田路大祐、手塚寛、深尾剛之、谷奥大地、四方宏佑、山中亮人、森将剛、櫻井辰悠、松井謙佑、下河祐介、行天隆郎、蔵元良平、上野耕輔、横山元樹、古川哲也、吉田真悟、山本和揮、守谷圭太、村上拓也、谷池史章、中村衆、多鹿公哉、藤原敬太、杉本拓磨、勝庸一、池田雅孝、岩倉徹、東憲太郎 (39名)神戸市消防学校

### 第38期H23.10.11~10.28

川村翔太、坂本匡司、中矢健、庄司一貴、藤原広樹、前田拓也、中林謹介、石川森一、河野裕、芳賀佳祐、木村賢太、千葉伸一、島崎淳之介、梅垣行輔、三宅雄太、瀧井智雄、難波良行、石丸大地、道永直生、吉田大輝、大橋美徳、有永亮太、高橋良尚、松永寛志、竹中裕貴、中野正也、山本亮平、塚島隼人、山田俊介、青山大祐、橘知哉、角野公彦、井上純一 (33名)神戸市消防学校

### 第39期H24.11.5~11.22

河内乾吾、今後智、楠瀬純史、岩本穂、清水翔太、田中裕樹、高尾敏、南浦将樹、菅貴洋、今駒省吾、花瀬智也、藤本章平、三木悠平、馬田健太郎、政田達彦、諏訪慧介、高松弘毅、河野多加志、片桐伸太郎、石井由真、前田陽太、橋本淳一、井上晶雄、井川翔太、塚川祐基、富田有晴、西川菜、崎久保洋太、石橋隆、宮本宗宜、磯野信二、西海文洋、工藤康裕、迫田浩輝、城内秀斗、高井勝平 (36名)神戸市消防学校

### 第40期H25.11.11~11.29

池内聡、岸野亮也、中尾侑希、吉田智貴、片岡洋、杉尾友樹、谷本佑太、上田貴文、新井康裕、藤本竜介、尾崎洋平、石見崇典、草嶋伸也、黒田賢広、森野修平、中岡陸、前川北斗、森井郁也、内山亘人、福井直彦、西原隆史、吉田真生、阿部陽佑、佐藤寛之、塩田竜佑、吉中直哉、中筋広樹、伊保恒毅、中野祐介、上月佑介、小西佑祐 (31名)神戸市消防学校

### 第41期H27.11.9~11.27

藤田隼平、西別府穂、乾青夏、佐成侑亮、岡田颯太、藤原宏輔、石井司、木村直人、中村晴紀、田中嗣人、茅野拓史、今津初夫、松原迪哉、江本陽祐、井上竣介、津田裕貴、小川拳、塩本智之、上田樹、小野史樹、藤原康成、山本達馬、秋山健、平松昌基、塩谷拓馬、小西洋輔、石黒大佑、納富力、中田大祐、大西純平、澁谷知紀、井岡義成、藤戸俊宏、玉置利弘 (34名)神戸市消防学校

### 第42期H28.11.7~11.25

山形直也、苅谷敏行、山田拓巳、吉川貴也、藤原祐介、湊雄太郎、福井俊弥、伊東泰宏、志水愛、成松大樹、今井太一、菅原光雄、毎田航大、鶴田直斗、山本洋人、柳瀬貴之、前田剛宜、杉本魁、田口侑希、野田航一、藤井淳真、麻生誠人、原弘樹、栗野渉、野口昂輝、松下匠、高瀬晋太郎、生田俊宏、秦野生夢、藤川航貴、古澤健太郎、米澤暢晃、山下晃司、著尾知哉 (34名)神戸市消防学校

### 第43期H30.11.5~11.22

山崎旭洋、具志堅修人、鳥居正義、吉岡雅駿、川谷累二、松本耀介、大芝陸斗、小西一将、奥直也、神崎修平、伊藤雄馬、宮村歩夢、福田力、加百正人、小川隼平、城月康平、大林一航、武田幹大、武貞健太、後川優人、篠原龍仁、中島庸、先濱朗、中岸巧、山下渡渡、道浦大輝、玉川博基、植井将吾、新家佳也汰 (27名)神戸市消防学校



初任科の救助訓練、救助課程では災害現場の厳しさをたたきこまれました。

現在、私は救急救命士として救急隊員をしていますが、  
救助隊と一緒に現場活動を行うときは、

その洗練された動きに尊敬の念を抱かずにはられません。

中澤寛之（38歳）

# 特別高度救助課程

平成18年、総務省消防庁は、新潟県中越地震や福知山線脱線事故等の教訓から、「救助隊の編成、装備及び配置の基準を定める省令」の一部改正を行い、第6条の規定により「特別高度救助隊」を東京都及び政令指定都市に整備するように定めました。

神戸市においても、平成18年4月、中央消防署の第2方面専任救助隊を、特別高度救助隊に格上げし、名称を「スーパーイーグルこうべ」、通称「**SEK**」として発隊しました。

平成20年度（平成21年2月）、第1回特別高度救助課程が行われました。

高度資機材の取り扱い、NBC災害対応訓練、地震災害を想定したCSR（閉鎖空間での救助）等、特別高度救助隊に必要な知識・技術の習得に特化した訓練です。

平成20年度から平成29年度までに5回の特別高度救助課程が実施されました。



特別高度救助課程第1期



特別高度救助課程第2期



## 特別高度救助課程修了者

### 平成20年度

#### 第1期 (H21.2.2~2.6)

渡海正則、知野見和之、笹倉隆史、三浦直樹、中垣政彦、古市泰士、和田章夫、村上正人、山本千昭、松本貴士、向井良、宮中智弘、高橋信人、高田尚義、上間義宏、(姫路市) 中野博信、山名康司、(尼崎市) 田伏敦、平根真人、(西宮市) 中南貴博、上山保人 (21名)

### 平成21年度

#### 第2期 (H22.2.22~2.26)

末澤泰裕、竹田充、岩下勝、石崎親一、知野見明生、片山慶明、柏原剛、宮村利幸、三枝正平、結城康之、香西辰哉、(尼崎市) 遠藤雄史、藤井真吾、太田正幸、(西宮市) 鈴鹿幸雄、浜口浩、(川西市) 原知弘、(北はりま) 山本行浩 (18名)

### 平成24年度

#### 第3期 (H25.2.4~2.8)

上原拓真、北濱雄一、古川誠、藤原圭一、高見洋輔、前田征治、西川忠伸、入田優、渋谷佳彦、田中幹人、伊関将司、南兵衛、神手大輔、(尼崎市) 佐古知春、碓慎吾、(西宮市) 小島将樹、(加古川市) 西村嘉記 (17名)

### 平成26年度

#### 第4期 (H26.11.17~11.21)

釜江和孝、辻岳史、岩倉徹、酒井大輔、高松由、梅崎直樹、上野耕輔、泉辰朗、松栄陽介、横山貴幸、横山元樹、(尼崎市) 川端太、菅崎晃、(西宮市) 小金丸章、(加古川市) 小林孝行、濱田真 (16名)

### 平成29年度

#### 第5期 (H29.11.13~11.17)

村上拓也、岩本穂、住吉樹、濱田隆志、瀧井智雄、糺徳雄、田中和宏、河内乾吾、政田達彦、勝庸一、松井謙佑、河島弘和、(姫路市) 為則裕介、(尼崎市) 五百尾達也、(西宮市) 川崎孝行 (15名)

特別高度救助課程第3期



特別高度救助課程第4期



特別高度救助課程第5期

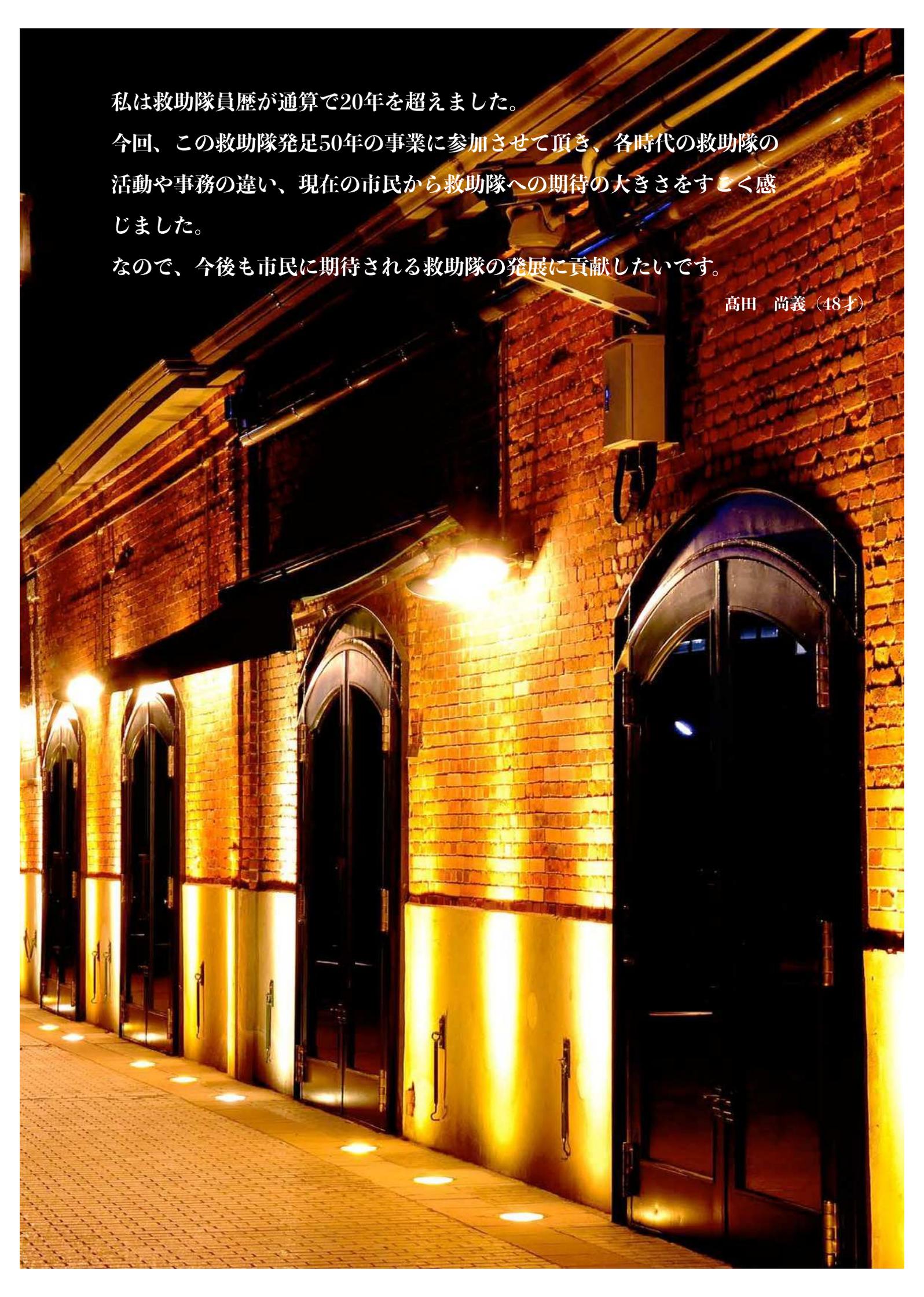




神戸消防救助隊発足50周年おめでとうございます。

発足以来、常にあらゆる災害現場の先兵となり活動する救助隊。  
その中で約20年、救助隊に育てられ関わられたこと、誇りに思います。  
近年の災害は増々複雑多岐化の傾向ですが、各々更にスキルを高め、  
市民の安全・安心のため活躍されることを期待します。

宮本正嗣（67歳）

A photograph of a brick building at night. The building features a series of arched doorways, each with a dark metal frame and a glass panel. The brickwork is illuminated from below, creating a warm, golden glow. The ground in front of the building is paved with cobblestones, and several small, circular lights are embedded in the pavement, casting a soft light. The overall atmosphere is cozy and historic.

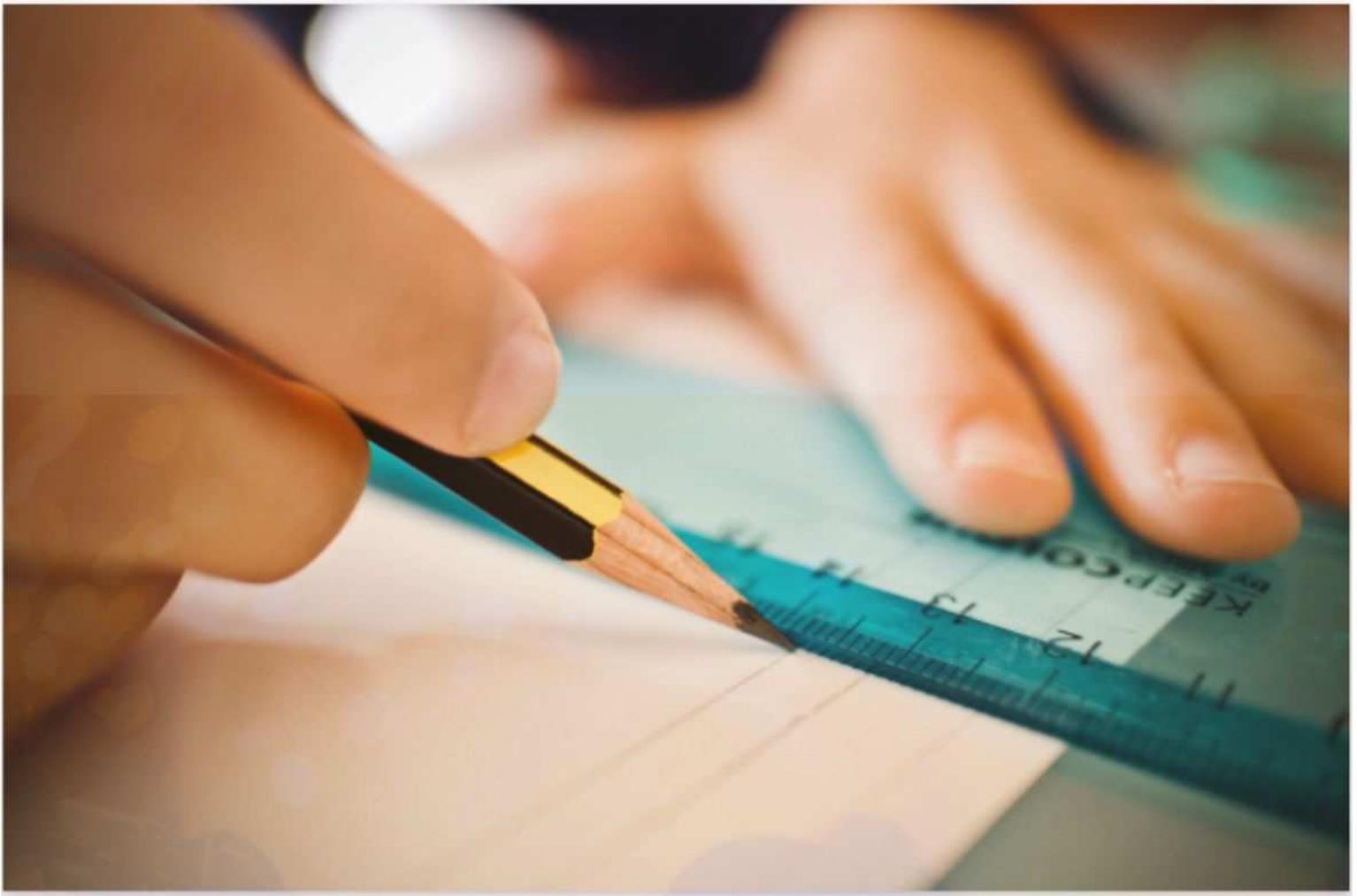
私は救助隊員歴が通算で20年を超えました。

今回、この救助隊発足50年の事業に参加させて頂き、各時代の救助隊の活動や事務の違い、現在の市民から救助隊への期待の大きさをすごく感じました。

なので、今後も市民に期待される救助隊の発展に貢献したいです。

高田 尚義 (48才)





# 消防救助隊教育訓練

*Training Education*

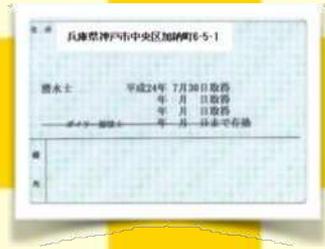
# 資格取得

## 潜水士

労働安全衛生法により、ボンベからの給気を受けて、水中で作業を行う場合には『潜水士』免許が必要で、都道府県労働局長が実施する試験に合格することで交付されるものです。消防機関が実施する潜水救助活動も水中作業に該当するため、潜水救助活動を行う救助隊員にとっては、必須の免許です。

平成30年度現在では、特別高度救助隊、長田救助隊、垂水救助隊及び水上救助隊の4隊に所属する救助隊員の計63名が潜水業務に携わっており、潜水士免許を取得しています。

水難救助現場は、年間30～50件程度を推移しており、その中でも潜水救助活動を伴うものは、約1割の年間5件前後です。決して多くはありませんが、特殊な環境下での救助活動であるが故の危険性が数多く潜んでいます。こうした状況の中、免許取得時に学んだ基礎知識をベースに、より安全な潜水活動が実施できるよう、月2回程度の潜水救助訓練を継続して行い、個人の技術向上はもちろん、連携強化や更なる知識、技術の向上を図ることで、2次災害を未然に防ぎ、安全な潜水業務を遂行しています。



## 二級小型船舶操縦士

船舶職員及び小型船舶操縦者法により、総トン数20トンまたは長さ24m未満の大型プレジャーボートの船舶で海岸から5海里以内の水域および平水区域を航行するために必要な免許で、国土交通大臣が実施する身体検査、学科試験及び実技試験の3つに合格することで交付されるものです。神戸市消防局が保有する船外機付ボートを操船するのに必要な免許です。

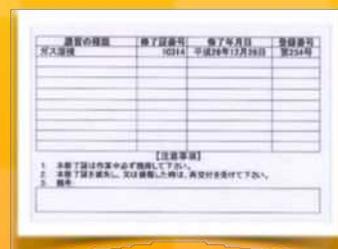
平成30年度現在では、特別高度救助隊、すべての専任救助隊、須磨救助隊及び水上救助隊の計7隊の救助隊に船外機付ボートが配備され、二級小型船舶操縦士免許を取得しています。水難救助現場では、海上はもちろんのこと、内水面（池やダム等）で活用されています。



## ガス溶接 技能講習

労働安全衛生法により、可燃性ガス及び酸素を用いて行う金属の溶接・溶断又は加熱の業務を行う場合に必要資格で、都道府県労働局長の登録を受けた教習機関が実施する2日間の学科講習と実技講習を修了することで取得できます。救助の編成、装備及び配置の基準を定める省令（省令別表第1）に記載されている救助資機材のガス溶断機を使用するために必要な資格です。

平成30年度現在では、全救助隊11隊がガス溶断機を保有しており、各救助隊員が資格を取得しています。強固な鉄鋼などでも容易かつ迅速に切断が可能ですが、適切な取扱いが出来なければかなりの危険が伴うため、有資格者による正しい資機材取扱いが出来るよう、訓練を継続して実施しています。

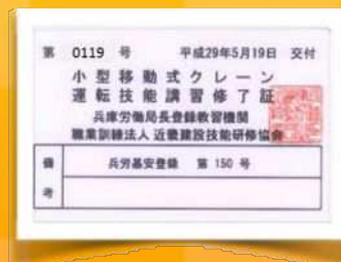


## 小型移動式クレーン運転 技能講習

労働安全衛生法により、吊り上げ荷重1トン以上5トン未満の能力を有する移動式クレーンを運転する場合に必要な資格で、都道府県労働局長の登録を受けた教習機関が実施する3日間の学科講習及び実技講習を修了することで習得できます。

平成30年度現在、特別高度救助隊及びすべての専任救助隊が保有する救助工作車には、吊り上げ荷重2.9トンのクレーンが装備されており、本資格が必要となります。初めて神戸市の救助工作車にクレーンが装備されたのは、平成8年5月配置の西消防署の救助工作車でした。平成25年12月に、長田消防署にクレーン付救助工作車が配備され、クレーン付救助工作の配備が完了しました。

救助工作車のクレーンは、交通事故現場での事故車両の移動や、低所転落時の引揚げ作業、またボートを水面に下ろす際や、上部支点としての活用など、様々な救助現場において活用可能であり、現状なくてはならない装備のひとつとして大変活躍しています。



## 酸素欠乏・硫化水素危険作業主任者 技能講習

労働安全衛生法により、「酸素欠乏症や硫化水素中毒にかかる恐れのある場所で作業を行う際には、中毒や欠乏にかかることを防止し、傷病者への応急手当の為、法令に基づき酸素欠乏危険作業主任者を選任しなければならない。」と定められ、都道府県労働局長の登録を受けた教習機関が実施する3日間の学科講習と実技講習を修了することで取得できます。

酸欠現場や硫化水素の発生する現場の直近で活動する救助隊員にとって必要な資格です。酸欠は、古井戸やマンホール内などの、空気の流れが無い堅穴内や閉鎖空間内でのガス漏洩などで発生します。硫化水素は、人為的に発生させたものや、地下道内で腐敗した有機物質から発生することもあります。

こうした災害現場での救助活動時に、本資格を取得し知識を得ることで、酸欠・硫化水素に係る現場において、二次災害を防ぎ、活動隊員の安全を確保しながら、より迅速に救助活動を行うことが可能となります。



## 玉掛け 技能講習

労働安全衛生法により、吊り上げ荷重1トン以上の能力を有するクレーンのフックに荷物を掛ける作業をする場合に必要な資格で、都道府県労働局長の登録を受けた教習機関が実施する3日間の学科講習並びに実技講習を修了することで取得できます。クレーンで吊り上げ作業を行う際、対象物の重心やワイヤー強度等を学ぶことにより、安全性の向上に繋がります。



# 潜水技術研修

本研修は、ニッスイマリン工業株式会社日本サバイバルトレーニングセンターが主催しており、神奈川県横須賀市にある国立研究開発法人 海洋研究開発機構（通称：JAMSTEC）のプールで実施されます。本研修の受講目的は、水難救助の指導方法及び潜水技術の導入を図ることで、水難救助技術の高度化を図ることを目的としています。

神戸市消防局からは、平成18年度に初めて特別高度救助隊から1名が受講しています。平成23年度以降は水難事故を主に担当している長田救助隊から1名が毎年受講しています。

研修内容は、基礎知識、事故事例の紹介、スキンドайビング及びスキューバダイビングにおける技術の習得、安全管理方法の習得で、水難救助活動に伴う基本的事項をすべて習得することが可能な研修です。また本研修の修了隊員が、神戸市消防局で実施する新規潜水隊員養成研修の指導員となることで、しっかりフィードバックすることができ、水難救助活動の安全性の向上が図られ、また技術向上に大きく貢献しており、非常に効果の高い研修です。



# 山岳遭難救助研修会

本研修は、独立行政法人日本スポーツ振興センターが主催しており、富山県中新川郡にある国立登山研修所と周辺山域で実施されます。本研修の受講目的は、山岳遭難救助活動を行う組織の指導的立場にある者を対象として、山岳遭難救助に関する知識と技術、救助計画の構成法及びその指導方法について学び、現場での即応力及び指導者としての資質の向上を主たる目的としています。

神戸市消防局は、平成20年度、平成23年度、平成27年度に、山岳救助を主に担当している北救助隊から1名ずつが受講しています。

研修内容は、確保理論や支点構築に関わる基礎知識を学び、引揚げ・吊り降ろし救助、張り込み救助や宙吊り救助といった山岳現場に必要な救助技術の習得や総合訓練を実施します。本研修の修了隊員が所属する北救助隊が主となり、応用訓練で実施される山岳救助訓練の企画立案を行い、消防救助隊の山岳救助知識及び技術の向上に役立てています。



# 消防大学校救助科

本研修は、総務省消防庁 消防大学校が主催しており、東京都調布市にある消防大学校で実施されます。本科は、救助業務に関する高度の知識及び技術を専門的に修得させ警防業務の教育指導者としての資質を向上させることを目的とし設置された科であり、主な内容は救助活動の多様な理論、事例、戦術、指揮訓練、図上訓練、教育技法、講義演習を学びます。

なお、開講は昭和56年で、年に2回程度実施されここ数年では年間120名の隊員が受講しています。兵庫県下では128名、神戸市消防局からは、16名の隊員が救助科を卒業しています。

消防大学校救助科卒業生

卒業年月日	期	名 前	卒業年月日	期	名 前
昭和55年10月	第3期	山崎 芳春	昭和56年10月	第5期	中川 賢一
昭和57年10月	第7期	浅利 修二	昭和58年10月	第9期	芝田 貴邦
昭和59年5月	第10期	坊池 正	昭和60年10月	第13期	近藤 正一
昭和62年5月	第16期	満尾 勝徳	平成1年5月	第20期	井上 雅文
平成2年6月	第22期	末吉 秀喜	平成6年6月	第30期	中谷 明美
平成9年10月	第37期	芝田 賢弘	平成15年11月	第49期	向井 良
平成17年6月	第52期	二見 広一	平成21年10月	第61期	高田 尚義
平成25年10月	第67期	岩下 勝	平成29年6月	第75期	伊関 将司



# 流水救助研修（スイフトウォーターレスキューテクニシャン）

本研修は、株式会社レスキュージャパンが主催しており、京都府亀岡市にある保津川流域で実施されます。本研修の受講目的は、水難事故の中でも、最も危険性が高い流水域での、救助技術及び安全管理方法を習得することを目的としています。

平成20年7月28日に発生した神戸市灘区の都賀川での水難事故を契機に、流水救助体制の確立及び強化を図るため、平成20年に特別高度救助隊から2名の隊員が初めて受講し、以降毎年1名ずつ受講しています。

研修は、流水に関する基礎知識と安全管理に関する知識から、救出方法の実技講習や危機事象の体験及び救出訓練を実施する内容となっています。

また、研修を修了した隊員が流水救助実技訓練を、流水救助活動を担う特別高度救助隊、専任救助隊、西及び北救助隊へ指導することで、研修で得た流水域の危険性や最新の知識と技術を普及することで、流水救助活動の高度化に繋がっています。



## 消防大学校 高度救助・特別高度救助コース（平成24年～現在）

NBC 特別高度救助コース（平成20年～平成23年）

緊急消防援助隊教育科NBC 特別高度救助コース（平成19年～平成23年）

本研修は、総務省消防庁 消防大学校が主催しており、東京都調布市にある消防大学校で実施されます。本研修の受講目的は、特別高度救助隊の隊長等が業務に必要な知識及び能力を習得することを主たる目的として受講しています。

研修内容は、広域消防応援、安全管理体制、高度救助資機材取扱い、シミュレーション訓練、多数傷病者対応、地震災害想定など、さまざまな研修内容となっています。本研修を受けることで、最新の知識と技術を習得はもちろんのこと、全国の消防職員と繋がりができ、意見交換ができることで『顔の見える関係』が構築できます。

この『顔の見える関係』が、強い日本の救助チームを作る礎となっています。

### NBC 特別高度救助コース卒業生

卒業年月日	期	名 前	卒業年月日	期	名 前
平成20年 2月	第 1期	橋 和臣	平成21年 2月	第 2期	木下 功
平成22年 2月	第 3期	岡田 敏幸	平成23年 2月	第 4期	村上 寛



### 緊急消防援助隊教育科 高度救助コース卒業生

卒業年月日	期	名 前
平成23年 3月	第 5期	田口 和史

### 消防大学校高度救助・特別高度救助コース卒業生

卒業年月日	期	名 前	卒業年月日	期	名 前
平成24年 2月	第 1期	松末 人	平成25年 2月	第 2期	柴原 裕明
平成26年 2月	第 3期	村上 圭	平成27年 2月	第 4期	結城 康之
平成28年 2月	第 5期	森本 崇	平成29年 2月	第 6期	知野見 和之
平成30年 2月	第 7期	古市 泰士	平成31年 2月	第 8期	高田 尚義



# 消防救助隊教育訓練

4月～5月「基礎訓練」、6月～7月「救助特別強化訓練」、8月～翌3月「応用訓練」と年間を通じた計画的な訓練を実施することで、隊員個人の能力、小隊の能力を向上させ、さまざまな災害に対応するための技術を習得することを目的とします。

## 基礎訓練

資機材取扱や基本操法など基本を中心とした訓練に取り組み、個々の救助隊員としての能力向上を図ることを目的とした訓練です。また消防救助技術近畿地区指導会に参加する隊員については指導会訓練の事前訓練を実施しています。





厳しかった訓練、

辛かった現場活動が今は良い思い出です。

神戸の熱い救助魂が後世の若き隊員に

引き継がれて行くことを期待します。

吉田一志（52歳）

# 救助特別強化訓練

*Strengthening*

救助特別強化訓練は、消防救助技術の向上、強靱な精神力及び体力の育成を目的として行われる消防救助技術測定会で選考された隊員と警防部長指名を受けた隊員が、神戸市消防局の代表として神戸市民防災総合センターで集中的に行う訓練です。

訓練隊員は、地区大会にあたる消防救助技術近畿地区指導会に出場し、地区代表権を得て、近畿地区代表として全国消防救助技術大会へ参加します。

## 開始式

*Opening ceremony*





## 引揚救助



5人一组（要救助者を含む）で2人が空気呼吸器を装着して塔上から塔下へ降下し、検索後、要救助者を塔下へ搬送、4人で協力して塔上へ救出した後、ロープ登はんにより脱出します。地下やマンホール等での災害を想定した訓練で、災害発生現場において有毒ガスの発生や酸欠等の状況が想定されますので、空気呼吸器を装着して進入します。

## ロープブリッジ渡過

水平に展張された渡過ロープ20m（往復40m）を往路はセーラー渡過（水平渡り）、復路はモンキー渡過（猿渡り）で渡ります。ロープ渡過の基本的な訓練です。



## はしご登はん

自己確保用の命綱を結索した後、垂直に固定されたはしごを15m登はんします。災害建物への進入など、消防活動には欠かせない訓練です。





## ほふく救助

3人一组（要救助者を含む）で、1人が空気呼吸器を着装して長さ8mの煙道を検索し、要救助者を屋外に救出した後、2人で安全地点まで搬送します。ビルや地下街などで煙に巻かれた人を救出するための訓練です。

## ロープブリッジ救出

4人一组（要救助者を含む）で、2人が水平に展張された渡過ロープ20mにより対面する塔上へ進入し、要救助者を救出ロープに吊り下げて、牽引して救出した後、脱出します。建物や河川の中洲などに取り残された要救助者を隣の建物や対岸などから進入して救出することを想定した訓練です。



## 障害突破

5人一组（補助者を含む）で、4人が緊密なる連携の下、一致協力して「乗り越える」「登る」「渡る」「降りる」「濃煙を通過する」の基本動作により5つの障害を突破します。災害現場の様々な障害を想定し、いかなる状況下においても、対応することを目的とした訓練です。





## ロープ応用登はん

登はん者と補助者が二人で協力し、器材を使わずに塔上から垂らされたロープ15mを登はんする訓練です。足をロープに固定させながら登るので、迅速に登はんすることができます。



## 終了式 *Closing session*



## 複合結索

スキューバダイビング及び水難救助活動の基本であるマスク、スノーケル、フィン装着し、スノーケリングで障害物に見立てた浮環を突破しながら水中に沈められたリング4個を検索して、引き揚げる訓練です。

## 基本泳法

水難救助の基本である飛び込み、泳法の訓練で「じゅんか飛び込み」で入水し、「ぬき手泳法」と「ぬき平泳法」でそれぞれ25mずつ泳ぐ。常に水面から顔を出し、前方を注視している所が競泳とは異なります。



水中の溺者を救助者1名で救出する基本的な水難救助法です。救助者が「じゅんか飛び込み」で入水後、20m先の溺者を注視しながら近づき、チンプールで確保した後、ヘアーキャリーにより救助します。

## 溺者搬送

## 水中結索

3人一組で、スタート地点から20m先に沈めてある結索環に、第1泳者は「もやい結び」、第2泳者は「巻き結び」、第3泳者は「ふた回りふた結び」の結索をリレー方式で行う訓練です。





## 溺者救助

25m先の溺者を、救命浮環を使用し救助する訓練です。補助者が救命浮環に救助ロープを結着後、プール内に投下し、救助者がある救命浮環を溺者の位置まで搬送して、これに溺者をつかまらせて、補助者が救助ロープをたぐり寄せて救助します。

## 人命救助

20m先の溺者と25m先の水没しつつある溺者（訓練人形）を救助する訓練です。救助者が「二重もやい結び」のロープをたすき掛けにして要救助者の位置まで泳ぎ、溺者をクロスチェストキャリアで確保し、補助者が救助ロープをたぐり寄せて救助します。その後、救助者はただちに25m先で水没しつつある要救助者（訓練人形）の位置まで泳ぎ、水面に引き揚げ救助します。



## 水中検索救助

水没しつつある溺者を検索し、発見後救助する訓練です。4人一組で第1泳者が水面を、第2泳者が水中を検索し、水中の溺者（訓練人形）を発見して水面へ引き揚げた後、第3泳者と第4泳者が協力して水面を搬送し救助します。



# 応用訓練

神戸市は、市街地や港湾地域及び山岳地域など、多様な地域を有しています。

気象変動や高度成長などの社会情勢の変化により、自然災害や特殊災害など災害形態は複雑多様化の傾向にあります。

これらの災害に対応するため、各方面専任救助隊が、それぞれ異なる分野の災害を研究し「**救助活動マニュアル**」を作成しました。

各方面専任救助隊は、担当災害の座学及び実働訓練のみならず、専門機関による研修や連携訓練など、必要に応じた応用訓練を企画し、全救助隊の知識及び技術の向上を図ります。

第1方面隊（灘救助隊）

担当災害

交通事故・電気事故・水難救助（水面）

第2方面隊（特別高度救助隊）

担当災害

特殊化学災害（NBC）・その他

第4方面隊（長田救助隊）

担当災害

水難事故（潜水）・機械事故

第3方面隊（北救助隊）

担当災害

山岳事故・建物・工作物事故

第5方面隊（垂水救助隊）

担当災害

火災・爆発災害・その他救助（生き埋め等）

# 第1方面救助隊（灘救助隊）

## 交通事故

自動車事故（車対人、車対単車及び車同士）等により、発生した要救助者を、救助工作車のクレーンや大型油圧器具等を活用し救出する訓練の実施や、ハイブリッドカーや電気自動車の特徴や特性を理解する等の特殊な車両についても、研究を実施しています。



## 電気事故

電気事故が発生した際の対応方法や、死亡事故につながる感電から身を守る技術や初動対応等を、電気事業者の協力を得て、専門的知識の研究を実施しています。



## 水難事故

(水面)

海、河川、池等の水面で助けを求めている要救助者を、救助棒やロープ等の資機材を活用、または、直接泳いで救出する訓練等、早期に要救助者を救出する方法の研究を実施しています。



## 第2方面救助隊（特別高度救助隊）

### 特殊化学災害

特殊な物質（化学物質、放射能、生物剤など）に係わる災害が発生した際の対応方法、特殊な資機材や身体防具を活用した訓練を実施し被害が最小限に抑えられるよう、各種専門機関の協力を得て専門的知識の研究を実施しています。



### CSRM

(confined space rescue and medicine) 訓練

地震で崩壊した建物や瓦礫現場等の閉鎖空間で取り残され、または、脱出できない要救助者を発見し、観察と早期救出を行うために、色々な資機材を駆使し救出する方法の研究を実施しています。



# 第3方面救助隊（北救助隊）

## 山岳事故

神戸市には六甲山があり、その山岳地域における、ハイカーによる道迷いや転倒によるけが、また、滑落事故等により発生した要救助者の捜索や長距離搬送及び、救出方法の研究を実施しています。



## 建物・工作物事故

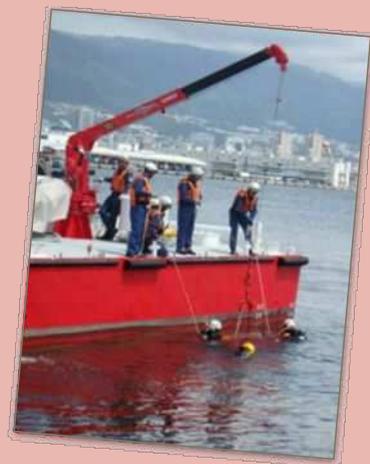
室内に閉じ込められた要救助者や、遊具に挟まれた子供等を救助隊が保有する特殊工具や資機材を活用し救出する方法の研究を実施しています。



# 第4方面救助隊（長田救助隊）

## 水難事故（潜水）

海、河川、池等に転落した車両や溺れた要救助者を、潜水器具を活用し水中検索方法を考える等早期に陸上へ救出する方法の研究を実施しています。



## 機械事故

多数存在する機械（印刷機、食品加工機、回転機、昇降機等）で、事故が発生した際、要救助者を早期に救出できるように、それぞれの機械構造や特徴及び救出方法の研究を実施しています。



# 第5方面救助隊（垂水救助隊）

## 火災・爆発事故

建物火災や爆発を伴う事故等が発生した際、逃げ遅れた要救助者の救出方法や、消防隊員の二次災害発生時の対処方法の研究を実施しています。



## その他救助（生き埋め・建物等倒壊）

地震、火災、生理めや建物等の倒壊で発生した災害で、危険な場所への進入救助隊員の安全を守るとともに逃げ遅れた要救助者を安全・迅速・確実に救出する方法の研究を実施しています。



# その他の訓練

## 流水救助訓練

2008年7月に起こった「都賀川水難事故」を契機に、急流河川での訓練や河川救助計画書を作成するとともに、実際に滋賀県の「瀬田川」、京都府の「保津川」の急流河川にて訓練を実施しています。



## ロープウェイ 緊急対応訓練

ロープウェイが運行中に緊急停止や、ロープウェイ内での点検や作業中の要救助者が発生した救助事案での救出方法を研究し、安全に乗客を地上に救出する訓練を実施しています。



## 兵庫県下 IRT合同訓練

国際消防救助隊として海外に派遣されることを想定し、年1回、県下4消防本部「神戸・尼崎・西宮・姫路」が集まり訓練を実施しています。

## 県警機動隊 合同訓練



兵庫県警機動隊とは、大規模災害で連携し活動することもあるため、大阪府堺市にある近畿管区警察局災害警備訓練施設を活用し定期的な訓練を実施しています。



# 三機関潜水訓練

(海上保安庁・県警機動隊・消防救助隊)

海上保安庁を中心に、消防救助隊と兵庫県警機動隊が集まり、月1回の合同潜水訓練を実施しています。



# 陸上自衛隊合同訓練

陸上自衛隊とは、大規模災害等で連携し活動することもあるため、お互いの技術を共有する訓練を実施し、連携強化をはかるとともに合同訓練を実施しています。



# 日本レスキュー協会連携訓練

(救助犬)

日本レスキュー協会（災害救助犬）とは、平成8年に協定を結び、地震や土砂災害で瓦礫や土砂に埋もれた要救助者を、災害救助犬とともに連携、捜索活動を行い多くの要救助者を救出するための訓練を実施しています。



## DMAT訓練

災害派遣医療チームとは、地震や土砂災害で瓦礫や土砂に埋もれた要救助者を、救助隊と医療従事者が協力し瓦礫の外へ救出し救急処置訓練を実施しています。



## ドローン連携訓練

ドローン協定事業社とは、最新のドローン技術を活かし、あらゆる災害現場で活用できるよう連携訓練を実施しています。実際に神戸市内の土砂災害現場の空撮や山岳事故の遭難現場で活用しています。



## 土砂災害合同訓練

(兵庫県下救助隊)

異常気象の影響で増加している土砂災害に対応するため、兵庫県下救助隊が集まり土砂災害を想定した訓練を実施しています。また、兵庫県消防本部の中で唯一保有している、宝塚市消防本部の重機も訓練に参加しています。



# 山岳救助合同訓練

(大阪市消防局)

近年増加傾向にある山岳救助事案に対応するため、実際の山岳部を活用し、救助隊員の技術向上を図るとともに、大阪市消防局、神戸市消防局との合同訓練により救助技術の共有と相互の連携強化を目的として実施しています。



# 潜水合同訓練

(大阪市消防局)

大阪湾消防艇相互応援協定及び五都市（名古屋市・京都市・大阪市・堺市・神戸市）消防相互応援協定に基づき、大規模災害発生時に連携、協力し相互が効率的に活動できるよう水難救助活動能力の向上を図るために合同訓練を実施しています。



20歳代、熱く取り組んだ救助大会。

仲間や指導者、そして何よりも**最高の相方**に恵まれました。

大会に出場することで、

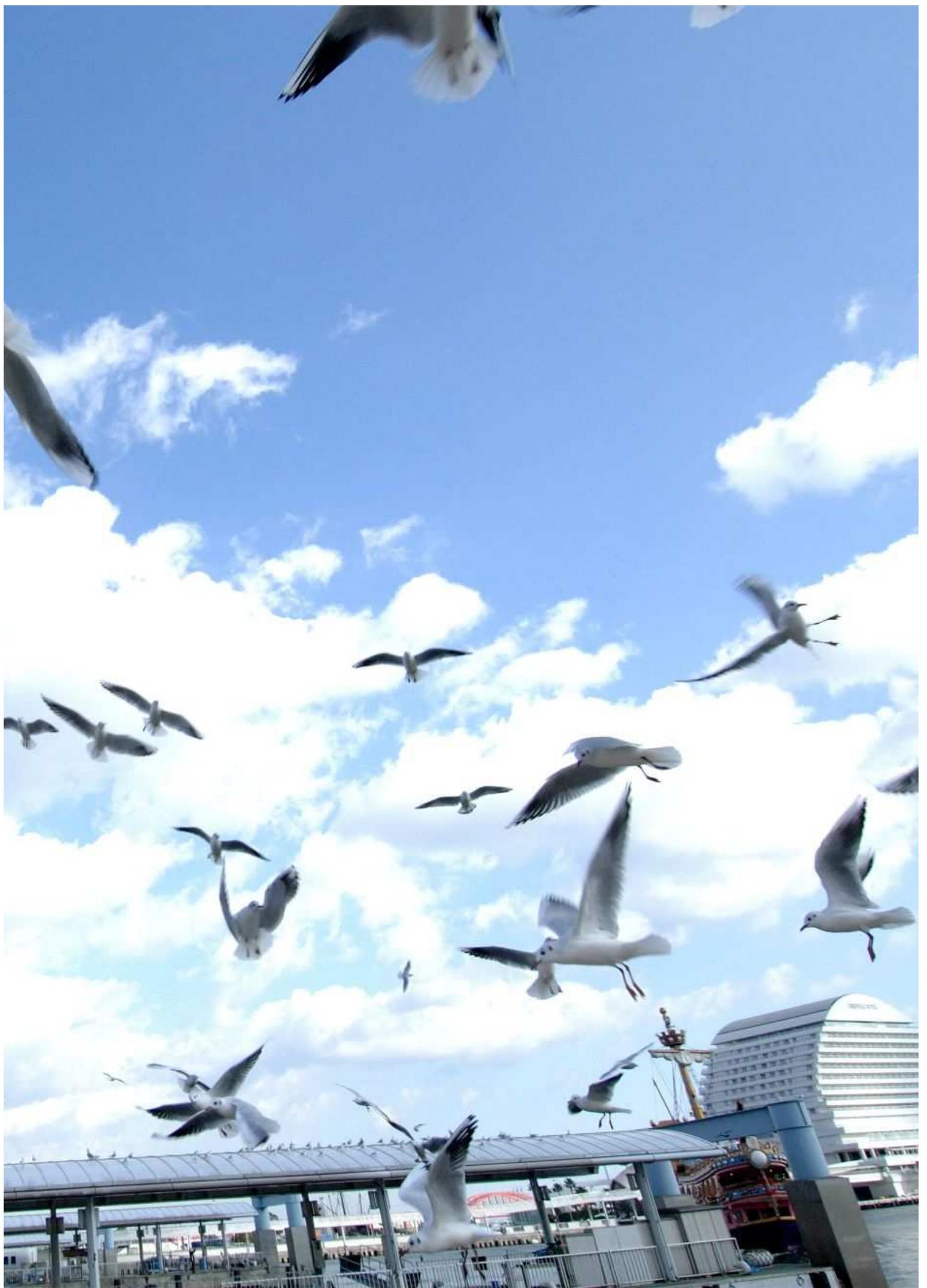
素質や才能も無い自分が何かを勝ち取るためには、

努力するしかないことを学び、

今もその経験が人生の「**土台**」になっています。

笹倉 隆史 (42才)







# 救助大会

幼少期から漠然と、人の命を助ける仕事がしたいと思っており、神戸消防に入りました。

オレンジの服に憧れ、

救助隊を目指して救助大会に出場しようと必死に頑張ったのは、

生涯忘れられない思い出です。

間近で見るオレンジは、先輩後輩を問わずかっこよく、

私の目には眩しく映ったのを鮮明に覚えています。

角野公彦（32歳）



# 救助大会クロニクル

## 救助大会創成期

昭和40年代中頃から、災害規模が複雑化・大規模化していくのに伴い、それらに対応する消防職員の人命救助についての実技的な教養を身につける必要が求められるようになりました。当時の消防機関にあっても装備、技術及び指導者の確保の面で十分とはいえない状況下であり、これをうけて全国消防協会は消防救助技術指導に関する事業を推進することとなりました。

そこで、昭和47年度（1972年）から消防救助技術指導会を協会地区支部で実施し、また全国大会を実施することとなり、9月4日に大阪市長居競技場にて近畿地区消防救助技術指導会を、9月28日に東京都豊島園にて全国消防救助技術大会の第1回が開催されました。

当初は手探りの状態での実施となり、毎年実施種目が変わる創成期特有の不安定な実施でした。当時の総括ではタイムレース化への懸念が繰り返し取り上げられており、「救助技術とは何か」を決める上で必要な混乱だったのかもしれませんが。

昭和53年9月に「救助操法の基準」が自治省（現総務省）により告示され、遂に救助業務が消防の本来業務として法制化されました。この基準制定にあたり、全国規模で開催される地区指導会と全国大会の意義はとても大きいものであったと考えられます。





邂逅と**交流**、そして**競う**～

救**助**技術とは**何**か その**技術**を**全国**へ

～**救助**業務の**法制化**

# 第1回

近畿地区指導会 昭和47年9月4日 大阪市長居競技場 陸30名 水29名参加  
 全国大会 昭和47年9月28日 東京都豊島園 陸5名 水5名参加

種目	参加隊員
水平渡り	新田正孝 山崎芳春
モンキー渡り	黒木勝美 村岡好雄
ロープ登はん	八村弘 鳥井悟
はしご登はん	岩橋三吉 下浦正士
救命素発射銃	中部裕 太田宝広
タイトロープ	新田正孝・村岡好雄・正方常夫 黒木勝美・山崎芳春・竹内和一
暗中横索	岩橋三吉・野辺三郎・鳥井悟 中部裕・太田宝広・八村弘
障害突破	中尾清和・芝田逸美・新免経由 掛井貞男・久保研夫・野村一夫
50m自由形	辻本文一 奥橋正輝
50m平泳	八木康行 高馬清三
50m背泳	木本弘志 村田義勝
50mバタフライ	奥橋正輝 木本弘志
100m自由型	麻生芳和 岩井昭
100m平泳	八木康行 栗林敬康
100m背泳	麻生芳和 村田義勝
溺者搬送	栗林敬康 高馬清三
浮遊物突破	三木克允 池田道泰
人命救助	岩井昭・麻生芳和 高馬清三・木本弘志
年令別200mリレー	奥橋正輝・八木康行・辻本文一 村田義勝・三木克允・河津勇

# 第2回

近畿地区指導会 昭和48年9月14日 大阪市長居競技場 陸21名 水18名参加  
 全国大会 昭和48年9月21日 大阪市扇町公園 陸5名 水5名参加

種目	参加隊員
ロープブリッジ渡過	村岡好雄 山崎芳春
ロープ登はん	太田有一 岩橋三吉 野辺三郎
はしご登はん	札常寛 野辺三郎 下浦正士 大笹滋
ロープ応用登はん	新田正孝・鳥井悟 岡本茂樹・太田和男
救命素発射銃	太田宝広
障害突破	中尾清和・新免経由・正方常夫・蔵元一己
宙づり傷者の救出	黒木勝美・野辺三郎 福井啓剛・中部裕
50m自由形	辻本文一 金川政宏
50m平泳	柏木和宏 高馬清三
50m背泳	木本弘志 麻生芳和
50mバタフライ	奥橋正輝 田中繁広
100m自由型	堀江健一 金川政宏
100m平泳	高馬清三 八木康行
100mバタフライ	奥橋正輝 田中繁広
100m背泳	木本弘志 村田義勝
200m年令別リレー	奥橋正輝・八木康行・辻本文一
200mリレー	麻生芳和・岩井昭・三木克允・村田義勝
溺者搬送	岩井昭 池田道泰
浮遊物突破	堀江健一 三木克允
人命救助	梶原正義・栗林敬康 長谷川嘉晴・竹之中貞二

## 全国大会出場

ロープブリッジ渡過	山崎芳春
ロープ登はん	太田有一
はしご登はん	野辺三郎
宙づり傷者の救出	福井啓剛・中部裕
100m平泳	高馬清三
100m背泳	木本弘志 村田義勝
50m平泳	高馬清三
50m背泳	木本弘志
100mバタフライ	奥橋正輝
200m年令別リレー	奥橋正輝・八木康行・辻本文一

## 全国大会出場

水平渡り	新田正孝
ロープ登はん	野辺三郎
暗中横索	中部裕・太田宝広・八村弘
50mバタフライ	木本弘志
100m平泳	高馬清三
200mリレー	奥橋正輝・八木康行・辻本文一

# 第3回

近畿地区指導会 昭和49年9月6日 神戸市みのたにグリーンズスポーツホテル 陸20名 水18名参加  
 全国大会 昭和48年9月21日 大阪市扇町公園 水7名参加

種目	参加隊員
ロープブリッジ渡過	藤井和幸 山崎芳春 鳥井 悟
ロープ登はん	戸田明 重野功人
はしご登はん	岩橋三吉 戸田義
ロープ応用登はん	新田正孝・芝地茂男 村岡好雄・浅利修二 上川慶典・森本正臣
ほふく救出	中川賢一 野村一夫
高所人命救助	太田和男・岡久・黒木勝美・伊関薫 下浦正士・大田有・札常寛・大笹滋 野村一夫・山崎芳春・芝地茂男・八村弘
ロープブリッジ救出	中尾清和・秋国忠則・正方常夫・八村弘 新田正孝・新免経由・鳥井悟・蔵元一己 上川慶典・下浦正士・札常寛・太田有一
障害突破	中尾清和・正方常夫・新免経由・蔵元一己
50m自由型(30未満)	渡辺勤 明石幸三
50m自由型(30以上)	中本武治 辻本文一
50m平泳	高馬清三 小野泰男
50mバタフライ	奥橋正輝 木本弘志
50m背泳	木本弘志 麻生芳和
100m平泳(30未満)	高馬清三 木下茂信
100m平泳(30以上)	八木康行 細川浩志
100m背泳	村田義勝 仲田嘉典
100m自由型	黒島臣弘 上村季広
200mメドレーリレー	仲田嘉典・細川・木本弘志・奥橋正輝
200m年令別リレー	奥橋正輝・八木康行・辻本文一
200mリレー	黒島臣弘・渡辺勤・三木克允・村田義勝
溺者搬送	岩井昭・明石幸三 佐藤義明・小野泰男
浮遊物突破	森本健二 三木克允
人命救助	梶原正義・上村季広 明石幸三・小野泰男
水中結索	山下万 立花章三郎

## 全国大会出場

100m平泳(30未満)	高馬清三
100m平泳(30以上)	八木康行
100m背泳	仲田嘉典
50m平泳	高馬清三
50mバタフライ	奥橋正輝 木本弘志
50m背泳	木本弘志
人命救助	明石幸三・小野泰男
200mメドレーリレー	仲田嘉典・高馬清三・木本弘志・奥橋正輝

# 第4回

近畿地区指導会 昭和50年9月2日 堺市立金岡公園 陸24名 水22名参加  
全国大会 昭和50年9月10日 東京都平和島公園 水6名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	古市嗣夫
はしご登はん	岩橋三吉
ほふく救出	栗林利樹
高所人命救助	蔵元一己・宮本正嗣・黒木勝美・伊関薫 中尾清和・瀧尾勝徳・谷口清正・藤田準一
ロープブリッジ救出	新田正孝・山崎芳春・新免経由・鳥井 悟 芝田逸美・正方常夫・赤沢保・芝田貴邦 下浦正士・大田有一・浅利修二・坂元香
障害突破	奥橋正輝 八村弘
50m自由型 (30未満)	黒鳥臣弘 辻本文一
50m自由型 (30以上)	木本弘志 高馬清三
50m平泳ぎ (30未満)	梶原正義 八木康行
50m平泳ぎ (30以上)	八村弘 仲田嘉典
100m自由型	高馬清三 上坂光弘
100m平泳	細川浩志 立花肇三郎
水中検索A	木下茂信 八村弘
水中検索B	森本健治 奥橋正輝
浮遊物突破	上村季広 明石幸三
溺者搬送A	山下万・小野泰男
溺者搬送B	明石幸三・小野泰男
人命救助A	栗林敬康・木本弘志・上村季広
人命救助B	末吉秀喜・村田義勝・森本健治
水中結索	八木康行・辻本文一・仲田嘉典・渡辺勤
200mリレー	

## 全国大会出場

50m自由型 (30以上)	上川慶典
100m自由型	檜垣博敏
水中検索	細川浩志
水中結索	奥橋正輝・黒鳥臣弘・仲田嘉典

# 第5回

近畿地区指導会 昭和51年8月26日 尼崎市立記念公園内陸上競技場 陸32名 水20名参加  
全国大会 昭和51年9月10日 尼崎市芦原市民プール 名古屋市白川公園・瑞穂プール 陸4 水11名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	片平久喜
はしご登はん	上村季広 青木一正
ロープブリッジ渡過	幸山司 藤田昌宏
ロープ応用登はん	伊関薫・岡久
ほふく救出	栗林利樹・上村季広 坂元香・瀧尾勝徳
高所人命救助	中尾清和・大笹滋・下浦正士・前益幸
ロープブリッジ救出	新田正孝・宮本正嗣・浅利修二・千種文夫
障害突破	黒木勝美・近藤正一・末吉秀喜・瀧尾勝徳・井上雅文
50m自由型 (30以上)	黒鳥臣弘 上川慶典
100m自由型	仲田嘉典 檜垣博敏
100m平泳	細川浩志 木本弘志
水中検索	細川浩志 木本弘志
浮遊物突破	奥橋正輝 森本健治
溺者搬送	木下茂信・森本健治 大杉猛・奥橋正輝
人命救助	梶谷昭男・奥橋正輝・森本健治
水中結索	渡辺勤・野村一夫・木本弘志
200mリレー	黒鳥臣弘・渡辺勤・仲田嘉典 上川慶典・八村弘・奥橋正輝・檜垣博敏

## 全国大会出場

100m自由形	八村弘
水中検索A	細川浩志
浮遊物突破	奥橋正輝
水中結索	黒鳥臣弘・渡辺勤・仲田嘉典

# 第6回

近畿地区指導会 昭和52年7月20日 大阪市消防学校 陸23名 水16名参加  
全国大会 昭和52年8月18日 横浜市消防訓練センター 日本大学藤沢高校 水6名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	中尾清和 片平久喜
はしご登はん	山田雄一 青木一正
ロープブリッジ渡過	幸山司
ロープ応用登はん	太田和男・岡久 正方常夫・坊池正
ほふく救出	森口和樹・山田雄一 栗林利樹・東嶋司
高所人命救助	中尾清和・山崎芳春・大田有一・芝地茂男
ロープブリッジ救出	新田正孝・新免経由・宮本正嗣・浅利修二 東嶋司・石本種八・千種文夫・大森隆
障害突破	黒木勝美・坂元香・田中茂広・瀧尾勝徳・末吉秀喜 福井啓剛・下浦正士・近藤正一・上村季広・井上雅文
50m自由型 (30以上)	黒鳥臣弘 上川慶典
100m自由型	八村弘 奥橋正輝
100m平泳	八木康行 木本弘志
水中検索	木本弘志 上野敏明
浮遊物突破	森本健二 奥橋正輝
溺者搬送	木下茂信・竹之中貞二 大杉猛・奥橋正輝
人命救助	野村一夫・上川慶典・奥橋正輝
水中結索	森本健治・梶谷昭男・竹之中貞二 大杉猛・上野敏明・木下茂信
200mリレー	黒鳥臣弘・渡辺勤・仲田嘉典 八村弘・八木康行・仲田嘉典・渡辺勤

## 全国大会出場

高所人命救助	中尾清和・山崎芳春・大田有一・芝地茂男
50m自由型 (30以上)	上川慶典
100m平泳	木本弘志
100m自由型	八村弘
浮遊物突破	奥橋正輝
溺者搬送	大杉猛・上野敏明
水中結索	黒鳥臣弘・渡辺勤・仲田嘉典
人命救助	森本健治・野村一夫・上野敏明

# 第7回

近畿地区指導会 昭和53年7月13日 姫路市立陸上競技場・市民プール 陸30名、水16名参加  
全国大会 昭和53年8月22日 千葉県消防学校 陸4名、水8名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	片平久喜
はしご登はん	青木一正 満尾勝徳
ロープブリッジ渡過	幸山司
ロープ応用登はん	伊関薫 横垣内勝己 寺口晴喜 末吉秀喜
ほふく救出	野辺三郎 大笹滋 坂元香
高所人命救助	野辺三郎 大笹滋 下浦正士 芝地茂男 村岡好雄 前益幸 伊関薫 横垣内勝己 山中邦雄 岡久 片平久喜 藤田準一
ロープブリッジ救出	池田善泰 大田有一 栗林利樹 上村季広 宮本正嗣 浅利修二 近藤正一 千種文夫
障害突破	黒木勝次 藤田昌宏 末吉秀喜 井上雅文 満尾勝徳 新田正孝 宮本正嗣 浅利修二 近藤正一 千種文夫
水中検索	細川浩志 木本弘志
浮遊物突破	奥橋正輝 榎垣博敏
溺者搬送	八村弘 奥橋正輝 山崎芳春 前川和男
人命救助A	梶谷昭男 奥橋正輝 森本健治 仲田嘉典 上川慶典 野村一夫 森本健治 前川和男
人命救助B	細川浩志 奥橋正輝 細見正幸 木本弘志 東崎司 前川和男
救援物資搬送	八村弘 山崎芳春 森本健治
水中結索	黒鳥臣弘 渡辺勤 仲田嘉典
200mリレー	上川慶典 奥橋正輝 榎垣博敏 前川和男

## 全国大会出場

ロープブリッジ救出	宮本正嗣 浅利修二 近藤正一 千種文夫
水中検索	細川浩志
浮遊物突破	奥橋正輝
人命救助B	細川浩志 奥橋正輝 細見正幸
水中結索	黒鳥臣弘 渡辺勤 仲田嘉典

# 第8回

近畿地区指導会 昭和54年8月1日 大阪市消防学校 陸36名 水17名参加  
全国大会 昭和54年8月24日 大阪市消防学校 水1名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	片平久喜
はしご登はん	池田豊秋 岡本吉永
ロープブリッジ渡過	岡本智
ロープ応用登はん	岡久 寺口晴喜 谷本光生 内山敦司
ほふく救出	野辺三郎 大笹滋 坂元香 宮本正嗣 浅利修二 近藤正一
高所人命救助	岡久 藤田準一 寺口晴喜 青木一正 野辺三郎 大笹滋 伊関薫 岡本智 村岡好雄 下浦正士 横垣内勝己 田中茂広 幸山司
引揚救助	池田善 大田有一 栗林利樹 上村季広
ロープブリッジ救出	谷本光生 榎木勝利 中西義次 芦田英明 宮本正嗣 浅利修二 奥田和義 近藤正一 中川賢一 末吉秀喜 藤田昌宏 井上雅文 満尾勝徳 橋本哲
障害突破	細川浩志 上川慶典
水中検索	奥橋正輝 細見正幸
浮遊物突破	篠田和宏 上川慶典 細川浩志 森本健治
溺者搬送	梶谷昭男 森本健治 細見正幸 渡辺勤
人命救助A	山崎芳春 正方常夫 名間健治 仲田嘉典
人命救助B	榎垣博敏 奥橋正輝 上川慶典 初世敬春 小野泰男 仲田嘉典
救援物資搬送	森本健治 藤原信行 渡辺勤 正方常夫 山崎芳春 篠田和宏
水中結索	黒鳥臣弘 渡辺勤 仲田嘉典 奥橋正輝 榎垣博敏 前川和男 奥橋正輝 榎垣博敏 上川慶典 仲田嘉典
200mリレー	

## 全国大会出場

浮遊物突破 奥橋正輝

# 第9回

近畿地区指導会 昭和55年8月1日 神戸市民防災総合センター 陸35名 水20名参加  
全国大会 昭和48年9月21日 名古屋市白川公園・瑞穂プール 水8名参加

種目	参加隊員
はしご登はん	満尾勝徳 牧野勲 辻本孝雄
ほふく救出	近藤正一 片平幸喜 中谷明美
ロープ応用登はん	岡久 片平幸喜 宮本正嗣 内山敦司
引揚救助	田中茂広 幸山司 榎木勝利 芦田英明 野辺三郎
高所人命救助	横垣内勝己 栗林利樹 藤原信行 牧野勲 岡久 藤田準一 伊関薫 岡本智 浅利修二 寺口晴喜 鳥居義和 鷺野豊広
ロープブリッジ救出	山崎芳春 浅利修二 奥田和義 寺口晴喜 橋本好明 時本修 木村敏博 辻本孝雄 末吉秀喜 井上雅文 藤田昌宏 青木一正
障害突破	中川賢一 宮本正嗣 近藤正一 満尾勝徳 内山敦司 橋本哲 井上雅文 末吉秀喜 藤田昌宏 青木一正
水中検索	武内年生 奥橋正輝
浮遊物突破	奥橋正輝 坂元香
溺者搬送	篠田和宏 黒田誠 細川浩志 名間健治
人命救助A	武内年生 辻正 中西義次 奥橋正輝 森本健治 千種文夫 前川和男 黒田誠
人命救助B	細見正幸 榎垣博敏 前川和男 福岡信吾 樽一弘 奥橋正輝
救援物資搬送	渡辺勤 正方常夫 森本健治 八村弘 坂元香 橋本富士夫
水中結索	奥橋正輝 前川和男 榎垣博敏 黒鳥臣弘 渡辺勤 名間健治
200mリレー	渡辺勤 奥橋正輝 榎垣博敏 名間健治

## 全国大会出場

水中結索	奥橋正輝 前川和男 榎垣博敏 森本健治 名間健治 黒鳥臣弘
浮遊物突破	奥橋正輝 名間健治
救援物資搬送	正方常夫 黒鳥臣弘 森本健治
200mリレー	名間健治 細川浩志 榎垣博敏 奥橋正輝
水中検索	細川浩志

# 第10回

近畿地区指導会 昭和56年7月23日 大阪市消防学校 陸14名 水14名参加  
全国大会 昭和56年8月19日 横浜市消防訓練センター 陸4名 水6名参加

種目	参加隊員
はしご登はん	植山大三郎 牧野勲
ロープ応用登はん	池田潤 鷺野豊広
ロープブリッジ救出	山崎芳春 時本修 木村敏博 寺口晴喜
高所人命救助	栗林利樹 寺口晴喜 鷺野豊広 植山大三郎
障害突破	中川賢一 近藤正一 井上雅文 満尾勝徳 内山敦司
水中検索	武内年生 細川浩志
浮遊物突破	奥橋正輝 名間健治
溺者搬送	磯崎正二 奥橋正輝 細川浩志 前川和男
人命救助A	森本健治 末吉秀喜 奥橋正輝 前川和男 八村弘 武内年生 奥橋正輝 前川和男
人命救助B	榎垣博敏 福岡信吾 前川和男 新谷孝 椎原英樹 奥橋正輝
救援物資搬送	上川慶典 森本健治 椎原英樹 末吉秀喜 新谷孝 八村弘
水中結索	奥橋正輝 榎垣博敏 前川和男 上川慶典 福岡信吾 名間健治
200mリレー	奥橋正輝 榎垣博敏 前川和男 名間健治

## 全国大会出場

高所人命救助	栗林利樹 寺口晴喜 鷺野豊広 植山大三郎
浮遊物突破	奥橋正輝
溺者搬送	細川浩志 森本健治
人命救助B	榎垣博敏 福岡信吾 前川和男

# 第11回

近畿地区指導会 昭和57年8月3日 西宮市 仁川学院 陸20名 水15名参加  
 全国大会 昭和51年8月19日 横浜市消防訓練センター 陸5名 水5名参加

参加隊員  
 野辺三郎・寺口晴喜・鷺野豊広・藤岡昭浩  
 瀧尾勝徳・片平幸喜・池田潤・青木一正  
 引揚救助 野辺三郎・中川賢一・芝田貴邦・植山大三郎・青山実  
 ロープブリッジ救出 山崎芳春・時本修・木村敏博・野辺三郎  
 障害突破 近藤正一・井上雅文・牧野勲・中本也寸志・松谷安洋  
 水中検索 前川和男 新谷孝  
 浮遊物突破 名間健治 藤原幸人  
 複合検索 奥橋正輝 藤原幸人  
 溺者搬送 前川和男 椎原英樹 末吉秀喜・藤原幸人  
 水中結索 名間健治 稲岡信吾 樽一弘  
 奥橋正輝 檜垣博敏 前川和男  
 人命救助A 森本健治 前川和男 八代谷徹 藤原幸人  
 人命救助B 檜垣博敏 稲岡信吾 前川和男  
 樽一弘 椎原英樹 前川和男  
 救援物資搬送 森本健治 新谷孝 末吉秀喜  
 八代谷徹 黒島臣弘 藤原幸人  
 奥橋正輝 檜垣博敏 名間健治 樽一弘  
 200mリレー

## 全国大会出場

障害突破 近藤正一・井上雅文・牧野勲・中本也寸志・松谷安洋  
 浮遊物突破 名間健治  
 複合検索 奥橋正輝  
 水中結索 檜垣博敏・稲岡信吾・樽一弘

# 第12回

近畿地区指導会 昭和58年8月11日 大阪城公園 (陸上) 陸25名 水17名参加  
 全国大会 昭和58年8月19日 大阪市消防学校 (水上) 陸12名 水18名参加

種目 参加隊員  
 ロープ登はん 鷺野豊広  
 はしご登はん 山田敦司  
 ロープブリッジ渡過 山田敦司 春日和隆  
 ロープ応用登はん 池田潤 岡本智  
 ほふく救出 近藤正一・青山実・菅原隆喜  
 高所人命救助 寺口晴喜・岡本智・池田潤 鷺野豊広  
 引揚救助 中川賢一・鳥居義和・片平幸喜・東洋昭・菅原隆喜  
 芝田貴邦・牧野勲・植山大三郎 藤森栄二・菅原隆喜  
 時本修・木村敏博 田中廣一・春日和隆  
 ロープブリッジ救出 近藤正一・井上雅文・内山敦司・中本也寸志・松谷安洋  
 障害突破 奥橋正輝 志水和男  
 複合検索 名間健治 武内年生  
 基本泳法 前川和男 椎原英樹 花山昇 藤原幸人  
 溺者搬送 名間健治 稲岡信吾 樽一弘  
 奥橋正輝 檜垣博敏 前川和男  
 水中結索 森本健治 新谷孝 八代谷徹  
 未吉秀喜 藤原幸人 前川和男 奥橋正輝  
 武内年生 八代谷徹 前川和男 奥橋正輝  
 救援物資搬送 檜垣博敏 花山昇 前川和男  
 樽一弘 稲岡信吾 前川和男  
 人命救助A  
 人命救助B

## 全国大会出場

ほふく救出 近藤正一・青山実・菅原隆喜  
 ロープブリッジ救出 時本修・木村敏博・田中廣一・春日和隆  
 障害突破 近藤正一・井上雅文・内山敦司・中本也寸志・松谷安洋  
 複合検索 奥橋正輝  
 溺者搬送 志水和男・末吉秀喜  
 水中結索 名間健治・稲岡信吾・樽一弘  
 森本健治 檜垣博敏 前川和男  
 人命救助B 檜垣博敏 花山昇 前川和男  
 近藤公成 椎原英樹 藤原幸人  
 人命救助A 武内年生 八代谷徹 前川和男 新谷孝

# 第13回

近畿地区指導会 昭和59年7月27日 姫路市本町球場、姫路市民プール 陸26名 水15名参加  
 全国大会 昭和58年8月24日 名古屋市白川公園・瑞穂プール 陸4名 水8名参加

種目 参加隊員  
 ロープ登はん 小松原恒蔵  
 ロープブリッジ渡過 春日和隆  
 ロープ応用登はん 池田潤・青木一正  
 ほふく救出 近藤正一・青山実・神藤一郎  
 芝田貴邦・石田秀欣・神藤一郎  
 高所人命救助 池田潤 新免経由 青木一正・小松原恒蔵  
 引揚救助 松谷安洋 坂上忠司 藤森栄二 植山大三郎 神藤一郎  
 ロープブリッジ救出 時本修 木村敏博 田中廣一 春日和隆  
 萩原裕士 吉田克己 塚川正彦 春日和隆  
 障害突破 中川賢一 山田敦司 内山敦司 井上雅文 松蔭智洋  
 複合検索 奥橋正輝 志水和男  
 基本泳法 近藤公成 武内年生  
 溺者搬送 椎原英樹 藤原幸人 花山昇 藤原幸人  
 水中結索 名間健治 前川和男 稲岡信吾  
 志水和男 藤原幸人 山中啓嗣  
 人命救助A 末吉秀喜 新谷孝 前川和男 藤原幸人  
 八代谷徹 武内年生 前川和男 藤原幸人  
 人命救助B 花山昇 稲岡信吾 前川和男  
 名間健治 山中啓嗣 前川和男  
 救援物資搬送 椎原英樹 新谷孝 末吉秀喜  
 八代谷徹 藤原幸人 前川和男

## 全国大会出場

ロープブリッジ救出 時本修・木村敏博・田中廣一・春日和隆  
 複合検索 奥橋正輝 志水和男  
 水中結索 武内年生・名間健治・八代谷徹  
 人命救助B 花山昇・稲岡信吾・前川和男

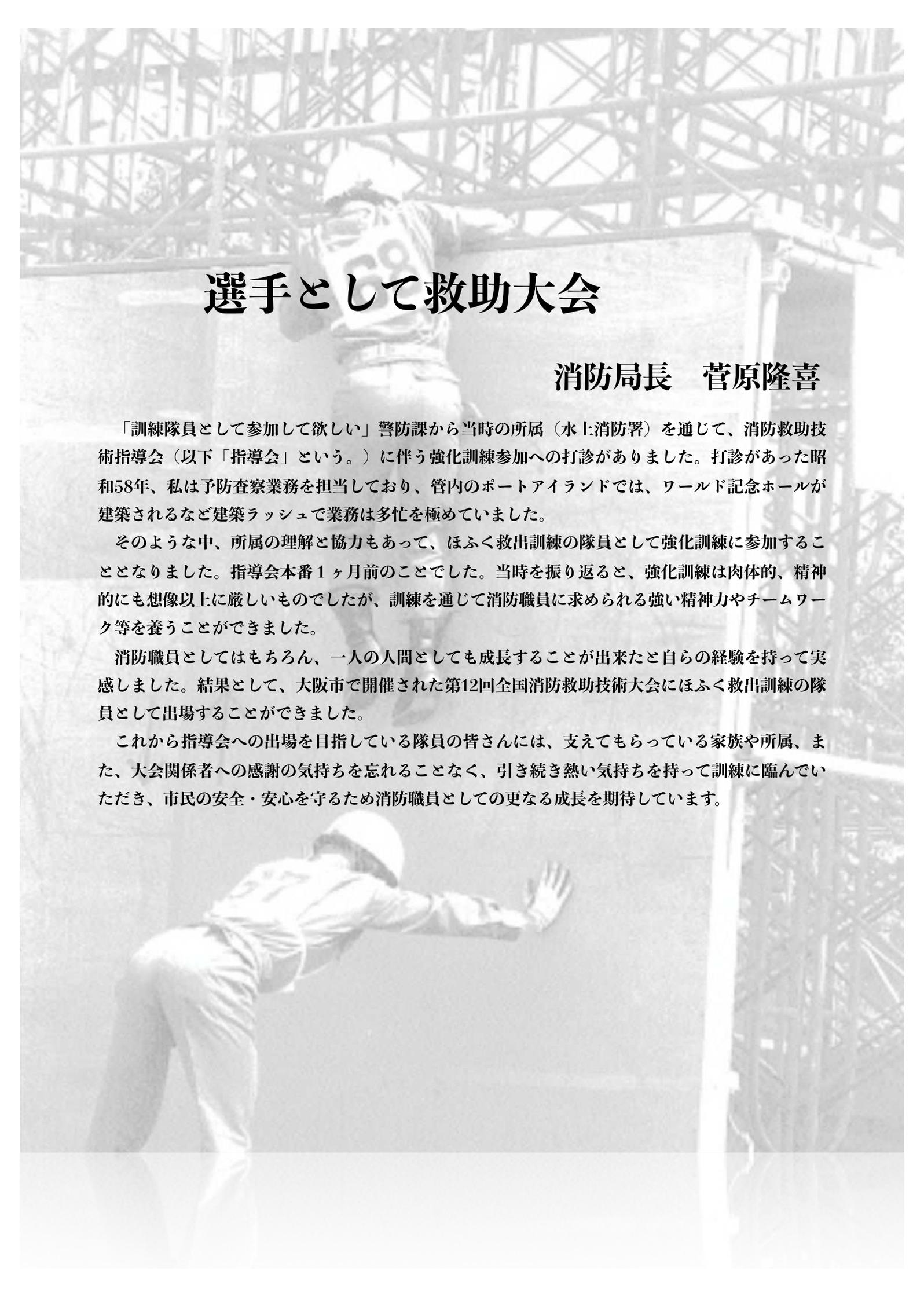
# 第14回

近畿地区指導会 昭和60年8月1日 大阪市消防学校 陸24名 水19名参加  
 全国大会 昭和60年8月23日 広島市中央公園 陸4名 水9名参加

種目 参加隊員  
 はしご登はん 橋和臣 小林秀蔵  
 ロープ応用登はん 池田潤 濱田宗徳  
 ほふく救出 木村敏博 青山実 橋和臣  
 石田秀欣 萩原裕士 橋和臣  
 高所人命救助 瀧尾勝徳 池田潤 片平幸喜 濱田宗徳  
 坂上忠司 藤森栄二 長野敏也 小松原恒蔵 吉田克己  
 引揚救助 時本修 田中廣一 吉田克己 小松原恒蔵  
 ロープブリッジ救出 新免経由 内山敦司 松蔭智洋 奥村彦彦 角田浩二  
 障害突破 奥橋正輝 志水和男  
 複合検索 前田光明 武内年生  
 基本泳法 花山昇 前川和男 谷輪文彦 前川和男  
 溺者搬送 檜垣博敏 前川和男 稲岡信吾  
 水中結索 志水和男 藤原幸人 奥橋正輝  
 谷輪文彦 岩井一尊 前川和男 岩佐敏行  
 八代谷徹 武内年生 前川和男 岩佐敏行  
 人命救助A 稲岡信吾 花山昇 前川和男  
 人命救助B 檜垣博敏 岩佐敏行 前川和男  
 救援物資搬送 新谷孝 八代谷徹 近藤公成  
 岩井一尊 山中啓嗣 藤原幸人

## 全国大会出場

ロープブリッジ救出 時本修・田中廣一・吉田克己・小松原恒蔵  
 複合検索 志水和男  
 溺者搬送 花山昇 藤原幸人  
 水中結索 奥橋正輝 前川和男 稲岡信吾  
 人命救助B 檜垣博敏 岩佐敏行 前川和男  
 救援物資搬送 新谷孝 八代谷徹 近藤公成

A firefighter in full gear, including a helmet and oxygen tank, is shown in a dynamic pose, possibly performing a rescue drill or training exercise on a complex steel structure. The firefighter is wearing a white uniform with 'CO' visible on the back. The background is a blurred industrial or construction site.

# 選手として救助大会

消防局長 菅原隆喜

「訓練隊員として参加して欲しい」警防課から当時の所属（水上消防署）を通じて、消防救助技術指導会（以下「指導会」という。）に伴う強化訓練参加への打診がありました。打診があった昭和58年、私は予防査察業務を担当しており、管内のポートアイランドでは、ワールド記念ホールが建築されるなど建築ラッシュで業務は多忙を極めていました。

そのような中、所属の理解と協力もあって、ほふく救出訓練の隊員として強化訓練に参加することとなりました。指導会本番1ヶ月前のことでした。当時を振り返ると、強化訓練は肉体的、精神的にも想像以上に厳しいものでしたが、訓練を通じて消防職員に求められる強い精神力やチームワーク等を養うことができました。

消防職員としてはもちろん、一人の人間としても成長することが出来たと自らの経験を持って実感しました。結果として、大阪市で開催された第12回全国消防救助技術大会にほふく救出訓練の隊員として出場することができました。

これから指導会への出場を目指している隊員の皆さんには、支えてもらっている家族や所属、また、大会関係者への感謝の気持ちを忘れることなく、引き続き熱い気持ちを持って訓練に臨んでいただき、市民の安全・安心を守るため消防職員としての更なる成長を期待しています。



# 第15回 全国消防救助技術大会

主催 ▶ 財団法人 全国消防協会

15th RESCUE MEET



補助 ▶ 財団法人 日本船舶振興会  
後援 ▶ 自治省消防庁・全国消防長会



## 第15回

近畿地区指導会	昭和61年8月8日	神戸市民防災総合センター・かももプール	陸35名	水22名参加
全国大会	昭和61年8月22日	神戸市民防災総合センター・王子プール	陸8名	水19名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	藤岡昭浩
はしご登はん	神藤一郎 小林秀蔵 橋和臣 松谷安洋
ロープ応用登はん	田中廣一・萩原裕士 吉田克己・時本修
ロープブリッジ渡過	岡田幸宏 小松原恒蔵
ほふく救出	近藤正一・石田秀欣・神藤一郎 青山美・濱田宗徳・浅利修二 大西和哉・岸本任・浅利修二
高所人命救助	池田潤・松谷安洋・村上覚・岸本任
引揚救助	坊池正・岡本智・黒田義和・小松原恒蔵・神藤一郎 坂上忠司・長野敏也・藤岡昭浩・橋和臣・浅利修二
ロープブリッジ救出	木村敏博・田中廣一・萩原裕士・岡田幸宏 時本修・塚川正彦・吉田克己・神藤一郎 宮本正嗣・中谷明美・角田浩二・奥村芳彦・松藤智洋 新免経由・内山敦司・青山美・大西和哉・濱田宗徳
障害突破	樽一弘 志水和尚
複合検索	前田光明 武内年生
基本泳法	花山昇・前川和男 谷輪文彦・前川和男 山中啓嗣・木畑卓也
溺者搬送	名間健治・樽一弘・稲岡信吾
水中結索	桧垣博敏・前川和男・若佐敏行
溺者救助	奥橋正輝・新谷孝・木畑卓也 名間健治・山中啓嗣・木畑卓也 花山昇・近藤公成・木畑卓也
救援物資搬送	岩井一尊・藤原幸人・前田光明 八代谷徹・近藤公成・新谷孝 志水和尚・稲岡信吾・岡孝夫
人命救助	岩井一尊・谷輪文彦・木畑卓也・前川和男 八代谷徹・武内年生・木畑卓也・前川和男

### 全国消防救助技術大会初開催

神戸市で初めての全国消防救助技術大会を  
神戸市民防災総合センター及び王子プール  
にて、全国救助隊員881名と消防関係者・神戸  
市関係者・一般来場者約3,000人が参加し  
盛大に開催されました。

### 全国大会出場

ロープ登はん	藤岡昭浩
ほふく救出	近藤正一・石田秀欣・神藤一郎
ロープブリッジ救出	時本修・塚川正彦・吉田克己・神藤一郎 木村敏博・田中廣一・萩原裕士・岡田幸宏
基本泳法	武内年生
溺者搬送	藤原幸人・花山昇
水中結索	奥橋正輝・樽一弘・稲岡信吾
溺者救助	名間健治・山中啓嗣・木畑卓也
救援物資搬送	八代谷徹・近藤公成・新谷孝 志水和尚・稲岡信吾・岡孝夫
人命救助	武内年生・前田・岩井一尊・谷輪文彦

15TH RESCUE MEET



# 15th Rescue Meet

# 第16回

近畿地区指導会 昭和62年 7月30日 大阪市消防学校 陸46名 水35名参加  
全国大会 昭和62年 8月21日 千葉県消防学校 陸10名 水9名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	藤岡昭浩 鷲尾敏治
ロープブリッジ渡過	岡田幸宏 内山敦司 福居敏夫
ロープ応用登はん	長野敏也・村上寛 岡本智・塚川正彦 時本修・吉田克己
はしご登はん	神藤一郎 橋和臣
ほふく救出	青山実・大西和哉・石井孝之 濱田宗徳・岸本任・石井孝之
高所人命救助	鷲尾敏治・岸本任・福居敏夫・渡海正則
引揚救助	岡本智・神藤一郎・長野敏也・藤岡昭浩・橋和臣
ロープブリッジ救出	木村敏博・黒田義和・足立浩司・岡田幸宏 時本修・塚川正彦・神藤一郎・吉田克己
障害突破	浅利修二・青山実・大西和哉・村上寛・石井孝之 近藤正一・内山敦司・奥村芳彦・濱田宗徳・松蔭智洋
複合検索	奥橋正輝 志水和尚 岩佐敏行
基本泳法	谷内康雄 前田光明
溺者搬送	花山昇・前川和男 山中啓嗣・岩佐敏行
救援物資搬送	八代谷徹 福岡信吾 藤原幸人 岩井一尊 前田光明 岡孝夫
溺者救助	名間健治・山中啓嗣・前川和男 花山昇・近藤公成・岩佐敏行
人命救助	八代谷徹 前田光明 前川和男 岩佐敏行
水中結索	名間健治 前川和男 福岡信吾 奥橋正輝 志水和尚 岩佐敏行

## 全国大会出場

ロープ登はん	藤岡昭浩
ロープブリッジ救出	時本修・塚川正彦・神藤一郎・吉田克己
障害突破	近藤正一・内山敦司・奥村芳彦・濱田宗徳・松蔭智洋
複合検索	岩佐敏行
溺者搬送	花山昇・藤原幸人
水中結索	名間健治・前川和男・福岡信吾
救援物資搬送	岩井一尊・前田光明・岡孝夫

# 第17回

近畿地区指導会 昭和63年 7月29日 尼崎市 産業技術短期大学 陸51名 水35名参加  
全国大会 昭和63年 8月19日 横浜市消防訓練センター 陸4名 水14名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	藤岡昭浩 鷲尾敏治
ロープブリッジ渡過	岡田幸宏 田中進
ロープ応用登はん	塚川正彦・芝田賢弘 木村敏博・足立浩司
はしご登はん	橋和臣 喜多浩二郎
ほふく救出	岸本任・濱田宗徳・森田周一 中谷明美・松蔭智洋・森田周一
高所人命救助	田中廣一・長野敏也・吉田克己・鳥居義和 渡海正則・鷲尾敏治・芝田賢弘・森繁樹
引揚救助	藤岡昭浩・長野敏也・橋和臣・河本幸舟・森田周一
ロープブリッジ救出	木村敏博・田中廣一・足立浩司・波方宏彰 時本修・塚川正彦・吉田克己・波方宏彰 河本幸舟・渡海正則・村上寛・岡田幸宏
障害突破	井上雅文・田中進・喜多浩二郎・岸本任・岡田幸宏 近藤正一・濱田宗徳・中谷明美・松蔭智洋・村上寛
複合検索	奥橋正輝 志水和尚 岩佐敏行
基本泳法	武内年生 原田志朗
溺者搬送	谷輪文彦・岩佐敏行 前川和男・花山昇
水中結索	岩佐敏行 前川和男 志水和尚 前田光明 谷輪文彦 西田隆行
溺者救助	花山昇・山中啓嗣・武内年生 藤原幸人・藤井勝彦・武内年生
救援物資搬送	八代谷徹 岡孝夫 前田光明 谷内康雄 山中啓嗣 藤原幸人
人命救助	藤井勝彦 原田志朗 前川和男 岩佐敏行 八代谷徹 武内年生 前川和男 岩佐敏行

## 全国大会出場

ロープブリッジ救出	時本修・塚川正彦・吉田克己・波方宏彰
溺者搬送	原田志朗・武内年生
水中結索	岩佐敏行・前川和男・谷輪文彦
溺者救助	花山昇・山中啓嗣・西田隆行
救援物資搬送	藤原幸人・藤井勝彦・谷内康雄 八代谷徹 岡孝夫 前田光明

# 第18回

近畿地区指導会 平成元年 7月27日 大阪市消防学校 陸51名 水37名参加  
全国大会 平成元年 8月25日 名古屋市白川公園 瑞穂プール 陸14名 水11名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	岡田幸宏 鷲尾敏治 藤岡昭浩
ロープブリッジ渡過	大月幸蔵 森下雅之 小松原恒蔵
ロープ応用登はん	足立浩司・河本幸舟 木下功・坂上忠司
はしご登はん	橋和臣 喜多浩二郎 松谷安洋 浅井薫
ほふく救出	大西和哉 松蔭智洋 木下功 角田浩二 村上寛 木下功
高所人命救助	坂上忠司 森繁樹 小松原恒蔵 森下雅之 鳥居義和 鷲尾敏治 芝田賢弘 渡海正則
引揚救助	藤岡昭浩 長野敏也 橋和臣 河本幸舟 木下功
ロープブリッジ救出	田中廣一 小谷高士 足立浩司 大月幸蔵 塚川正彦 吉田克己 吉田一志 大月幸蔵
障害突破	松谷安洋 土井隆 岡田幸宏 喜多浩二郎 浅井薫 井上雅文 内山敦司 中谷明美 村上寛 濱田宗徳
複合検索	米谷敬一 岩佐敏行
基本泳法	武内年生 福田琢延
溺者搬送	花山昇 前川和男 原田志朗 藤原幸人
水中結索	福岡信吾 米谷敬一 前田光明 前川和男 志水和尚 岩佐敏行
溺者救助	藤原幸人 藤井勝彦 武内年生 花山昇 山中啓嗣 武内年生
救援物資搬送	岩井一尊 岡孝夫 前田光明 早高伸二 西田隆行 福岡信吾 谷内康雄 山中啓嗣 藤原幸人
人命救助	福田琢延 藤井勝彦 前川和男 志水和尚 武内年生 岩井一尊 前川和男 志水和尚

## 全国大会出場

引揚救助	藤岡昭浩 長野敏也 橋和臣 河本幸舟 木下功
ロープブリッジ救出	塚川正彦 吉田克己 吉田一志 大月幸蔵
障害突破	井上雅文 内山敦司 中谷明美 村上寛 濱田宗徳
複合検索	岩佐敏行
溺者搬送	原田志朗 前田光明 花山昇 岡孝夫
水中結索	前川和男 志水和尚 福岡信吾
溺者救助	藤原幸人 藤井勝彦 武内年生

# 第19回

近畿地区指導会 平成2年 7月27日 神戸市民防災総合センター 陸50名 水39名参加  
全国大会 平成2年 8月24日 広島市中央公園、ファミリープール 陸15名 水20名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	岡田幸宏
ロープブリッジ渡過	大月幸蔵 田中進 小松原恒蔵 實井篤
ロープ応用登はん	木下功・河本幸舟 鶴田省二・藤岡昭浩
はしご登はん	橋和臣 喜多浩二郎 浅野永治
ほふく救出	角田浩二・村上正・鶴田省二 萩原裕士・石井孝之・鶴田省二
高所人命救助	小松原恒蔵 渡海正則 芝田賢弘 土井隆
引揚救助	小谷高士 吉田一志 田中進 浅野永治 鶴田省二 藤岡昭浩 河本幸舟 橋和臣 木下功 鶴田省二
ロープブリッジ救出	木村敏博 田中廣一 小谷高士 大月幸蔵 吉田克己 足立浩司 吉田一志 大月幸蔵
障害突破	井上雅文 中谷明美 村上寛 濱田宗徳 岡田敏幸 松谷安洋 岡田幸宏 喜多浩二郎 田内健作 費井篤
複合検索	米谷敬一 岩佐敏行 松尾健史
基本泳法	武内年生 福田琢延 高橋伸武
溺者搬送	花山昇 前川和男 原田志朗 藤原幸人
水中結索	福岡信吾 榎垣博敏 前田光明 前川和男 志水和尚 岩佐敏行
救援物資搬送	八代谷徹 前田光明 岡孝夫 岩井一尊 福岡信吾 西田隆行 谷内康雄 早高伸二 藤原幸人
溺者救助	藤原幸人 藤井勝彦 武内年生 花山昇 山中啓嗣 前田光明
人命救助	福田琢延 藤井勝彦 前川和男 志水和尚 武内年生 八代谷徹 前川和男 志水和尚

## 全国大会出場

ロープ登はん	岡田幸宏
はしご登はん	橋和臣
ロープブリッジ救出	木村敏博 田中廣一 小谷高士 大月幸蔵 吉田克己 足立浩司 吉田一志 大月幸蔵
障害突破	井上雅文 中谷明美 村上寛 濱田宗徳 岡田敏幸
複合検索	米谷敬一
基本泳法	福田琢延
溺者搬送	原田志朗 藤原幸人
水中結索	前川和男 志水和尚 岩佐敏行
人命救助	武内年生 八代谷徹 谷内康雄 榎垣博敏
溺者救助	花山昇 山中啓嗣 福岡信吾 藤原幸人 藤井勝彦 西田隆行
救援物資搬送	岩井一尊 前田光明 岡孝夫

# 第20回

近畿地区指導会 平成4年8月8日 大阪市消防学校 陸47名 水51名参加  
全国大会 平成4年8月28日 大阪市消防学校 水11名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	藤岡昭浩
ロープブリッジ渡過	田中進 石原裕士 小松原恒蔵
ロープ応用登はん	木下功 河本幸舟
はしご登はん	田内健作 喜多浩二郎 橋和臣
ほふく救出	萩原裕士 中垣政彦 一宮和宏 角田浩二 村上正人 一宮和宏
高所人命救助	小松原恒蔵 渡海正則 芝田賢弘 田中進
引揚救助	小谷高士 森岡良次 石原裕士 吉田一志 一宮和宏 藤岡昭浩 河本幸舟 橋和臣 木下功 一宮和宏
ロープブリッジ救出	吉田克己 小谷高士 山端康人 先閑幸博 吉田一志 田中廣一 足立浩司 先閑幸博
障害突破	松谷安洋 中谷明美 岡田幸宏 田内健作 喜多浩二郎 井上雅文 村上覚 濱田宗徳 岡田敏幸 高村浩二
複合検索	米谷敬一 岩佐敏行 松尾健史
溺者搬送	花山昇 前川和男 早高伸二 藤原幸人 原田志朗 藤原幸人
水中結索	前田光明 志水和尚 福岡信吾 前川和男 花山昇 岩佐敏行
基本泳法	谷内康雄 山中啓嗣 西田隆行
溺者救助	原田志朗 福田琢延 二見広一 高橋伸武 岩井一尊 前川和男 藤原幸人 山中啓嗣 前川和男 米谷敬一 木村一郎 前川和男
救援物資搬送	八代谷徹 前田光明 岡孝夫 谷内康雄 松尾健史 西田隆行
人命救助	岩井一尊 早高伸二 藤原幸人 福田琢延 藤井勝彦 前川和男 藤原幸人 二見広一 木村一郎 前川和男 藤原幸人 高橋伸武 八代谷徹 前川和男 藤原幸人

## 全国大会出場

複合検索	岩佐敏行
溺者搬送	花山昇 藤原幸人
水中結索	前川和男 木村一郎 福岡信吾 前田光明 志水和尚 二見広一

# 第21回

近畿地区指導会 平成4年8月5日 大阪市消防学校 陸51名 水43名参加  
全国大会 平成4年8月20日 千葉県消防学校 水10名参加

種目	参加隊員
ロープブリッジ渡過	東泰宏 田淵信久
ロープ応用登はん	由良哲朗 井上雅文 森本崇 芝田賢弘
はしご登はん	一宮和宏 喜多浩二郎 橋和臣
ほふく救出	萩原裕士 中垣政彦 藤井章史 角田浩二 村上正人 藤井章史 村上覚 森下雅之 藤井章史
斜めブリッジ救助	小松原恒蔵 渡海正則 芝田賢弘 森本崇 田淵信久
引揚救助	八代谷徹 小谷高士 花谷好人 向井良 木下功 藤岡昭浩 河本幸舟 橋和臣 木下功 一宮和宏 山端康人 恩澤康次 先閑幸博 一宮和宏
ロープブリッジ救出	吉田克己 田中廣一 吉田一志 一宮和宏
障害突破	中谷明美 岡田幸宏 岩井一尊 田内健作 喜多浩二郎 岡田敏幸 石原裕士 高村浩二 上間義宏 由良哲朗
複合検索	米谷敬一 岡孝夫 奥藤正輝
溺者搬送	原田志朗 志水和尚 花山昇 藤原幸人 藤本武久 志水和尚
水中結索	早高伸二 志水和尚 福岡信吾 前川和男 花山昇 岩佐敏行
基本泳法	高橋伸武 福田琢延
溺者救助	高橋伸武 山中啓嗣 志水和尚 二見広一 木村一郎 藤原幸人 岩佐敏行 数内勇 前川和男
救援物資搬送	谷内康雄 西田隆行 早高伸二 二見広一 岡孝夫 藤原幸人 数内勇 藤本武久 福岡信吾
人命救助	福田琢延 田中利治 藤原幸人 志水和尚 原田志朗 木村一郎 志水和尚 前川和男

## 全国大会出場

基本泳法	高橋伸武
複合検索	米谷敬一
溺者搬送	原田志朗 藤原幸人
水中結索	前川和男 花山昇 岩佐敏行
溺者救助	木村一郎 志水和尚 二見広一

# 第22回

近畿地区指導会 平成5年8月5日 ポートアイランド関西電力株グランド 陸45名 水40名参加  
全国大会 平成5年8月20日 市立ポートアイランドスポーツセンター 福岡市 新図書館用地 陸12名 水19名参加  
福岡県立総合プール

種目	参加隊員
ロープ登はん	岡田幸宏 柴原裕明
ロープブリッジ渡過	伊藤力
はしご登はん	花谷好人 喜多浩二郎 橋和臣 和田章夫
ほふく救出	萩原裕士 中垣政彦 坊古居良友 角田浩二 村上正人 坊古居良友 森本泰宏 坊古居良友 中垣政彦
斜めブリッジ救助	岡田幸宏 渡海正則 花谷好人 和田章夫 恩澤康次
引揚救助	藤岡昭浩 河本幸舟 橋和臣 向井良 柴原裕明
ロープブリッジ救出	東泰宏 恩澤康次 一宮和宏 吉田克己 吉田克己 田中廣一 吉田一志 一宮和宏
障害突破	八代谷徹 岡田敏幸 高村浩二 由良哲朗 上間義宏 中谷明美 岩井一尊 石原裕士 田内健作 喜多浩二郎
複合検索	米谷敬一 志水和尚
溺者搬送	花山昇 藤原幸人 原田志朗 藤原幸人
水中結索	米谷敬一 田村和照 高橋伸武 前川和男 花山昇 岩佐敏行
基本泳法	柏原隆志 奥藤正輝
溺者救助	二見広一 木村一郎 志水和尚 岩佐敏行 田中利治 知野見和之 高橋伸武 山中啓嗣 志水和尚
救援物資搬送	田村和照 数内勇 知野見和之 谷内康雄 早高伸二 西田隆行 二見広一 藤原幸人 岡孝夫
人命救助	柏原隆志 水野厚 前川和男 志水和尚 原田志朗 木村一郎 藤原幸人 志水和尚

## 全国大会出場

ほふく救出	角田浩二 村上正人 坊古居良友
ロープブリッジ救出	吉田克己 田中廣一 吉田一志 一宮和宏
障害突破	中谷明美 岡田幸宏 岩井一尊 田内健作 喜多浩二郎
複合検索	米谷敬一
溺者搬送	花山昇 岩佐敏行
水中結索	米谷敬一 田村和照 高橋伸武 前川和男 花山昇 岩佐敏行
溺者救助	木村一郎 前川和男 二見広一 高橋伸武 山中啓嗣 志水和尚
人命救助	原田志朗 木村一郎 岡孝夫 志水和尚

# 第23回

近畿地区指導会 平成6年7月28日 大阪市消防学校 陸32名 水23名参加  
全国大会 平成6年8月25日 京都市消防学校 水19名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	柴原裕明
ロープブリッジ渡過	伊藤力 岡田幸宏 田淵信久
はしご登はん	喜多浩二郎
ほふく救出	坊古居良友 中谷明美 中垣政彦 角田浩二 村上正人 坊古居良友 中垣政彦 村上覚 坊古居良友
斜めブリッジ救助	渡海正則 花谷好人 森田満 柴原裕明 田淵信久
引揚救助	岩井一尊 藤岡昭浩 河本幸舟 向井良 吉田克己
ロープブリッジ救出	吉田一志 東泰宏 一宮和宏 吉田克己 森本崇 関根英司 伊藤力 吉田克己
障害突破	中谷明美 田内健作 喜多浩二郎 石原裕士 和田章夫 八代谷徹 岡田敏幸 高村浩二 由良哲朗 上間義宏
複合検索	米谷敬一 阿部浩二 知野見和之
溺者搬送	小間物谷敏雄 阿部浩二 有田達年 阿部豪
水中結索	米谷敬一 田村和照 高橋伸武 岩佐敏行 福井豊人 小間物谷敏雄
基本泳法	柏原隆志 阿部豪 原弘典
溺者救助	高橋伸武 水野厚 志水和尚 二見広一 木村一郎 志水和尚 有田達年 田中利治 阿部豪 二見広一 阿部浩二 岡孝夫 谷内康雄 早高伸二 西田隆行 田村和照 数内勇 知野見和之
人命救助	原弘典 田中利治 志水和尚 知野見和之 阿部豪 木村一郎 阿部浩二 西田隆行 柏原隆志 水野厚 志水和尚 岩佐敏行

## 全国大会出場

複合検索	阿部浩二
基本泳法	阿部豪 原弘典
溺者搬送	有田達年 知野見和之
人命救助	阿部豪 木村一郎 阿部浩二 知野見和之 原弘典 田中利治 志水和尚 西田隆行
溺者救助	高橋伸武 水野厚 志水和尚
救援物資搬送	谷内康雄 早高伸二 西田隆行

# 震災を乗り越える

この時期は神戸市消防局にとって、まさに逆境の期間です。

第24回大会は神戸市にとって大きな契機の大会です。阪神・淡路大震災の発生です。

この災害を契機に緊急消防援助隊が制度として成立しました。その際にしきりに言われたことが他消防本部との「顔の見える関係」です。元来、指導会及び救助大会は他本部と競う場ではありますが、競うからこそ本部を離れ、一消防職員としてその技術をリスペクトし合う関係が構築されていき、現場で活動を行う際でも救助関係者はスムーズな現場活動が容易になりました。

神戸市消防局は震災以降も例年と変わらない規模で隊員が参加し、結果を出し続けました。それは神戸市が全国に出て行くことで「神戸市は元気である」というメッセージを発信し、それが震災時に応援を受けたお礼になると考えたからです。



# 第24回

近畿地区指導会 平成7年7月25日 大阪市消防学校 陸41名、水21名参加  
 全国大会 平成7年8月25日 北九州市文化記念公園多目的グラウンド・プール 水9名参加

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 岡本晃始
- ほふく救出 坊古居良友・山本一利・中垣政彦  
角田浩二・村上正人・山本一利  
村上寛、中垣政彦、坊古居良友
- 斜めブリッジ救助 岡田幸宏・渡海正則・花谷好人・森田満・田淵信久
- 引揚救助 若井一尊・橋和臣・向井良・伊藤力・阿部吉師
- ロープブリッジ救出 森本崇・東泰宏・一宮和宏・関根英司
- 先開幸博・山端康人・恩澤康次・岡本晃始
- 障害突破 八代谷徹・岡田敏幸・高村浩二・由良哲朗・上間義宏  
中谷明美・喜多浩二郎・二見広一・和田章夫・柴原裕明
- 複合検査 米谷敬一 阿部浩二 知野見和之
- 溺者搬送 小間物谷敏雄・阿部浩二 有田達年・知野見和之
- 水中結索 米谷敬一・田村和照・高橋伸武  
小間物谷敏雄・福井豊人・笠松学
- 基本泳法 柏原隆志 岡部豪 原弘典
- 溺者救助 有田達年・田中利治・岡部豪  
高橋伸武・水野厚・志水和尚  
笠松学・木村一郎・志水和尚
- 救援物資搬送 谷内康雄・早高伸二・西田隆行  
田村和照・数内勇・知野見和之
- 人命救助 岡部豪・木村一郎・志水和尚・知野見和之  
柏原隆志・水野厚・阿部浩二・岡部豪  
原弘典・田中利治・志水和尚・知野見和之

## 全国大会出場

- 複合検査 阿部浩二
- 基本泳法 高橋伸武 岡部豪
- 溺者救助 有田達年・田中利治・岡部豪  
高橋伸武・水野厚・知野見和之

# 第25回

近畿地区指導会 平成8年7月25日 神戸市民防防災総合センター 陸59名 水49名参加  
 全国大会 平成8年8月23日 札幌市消防訓練場 陸5名 水23名参加  
 札幌平岸プール

- 種目 参加隊員
- ロープ登はん 若井一尊
- ロープブリッジ渡過 岡田幸宏
- ほふく救出 喜多浩二郎 橋和臣 南兵衛 赤藤繁
- ロープ応用登はん 中垣伸弥・芝田賢弘 岡田敏幸・中谷明美
- 斜めブリッジ救助 角田浩二・中垣政彦・山本一利  
村上正人・山本一利・中垣政彦
- 引揚救助 渡海正則・高橋信人・森田満・田淵信久・中垣伸弥  
木村敏博・山村雅彦・藤本浩司・古市泰士・赤藤繁  
若井一尊・高田尚義・伊藤力・南兵衛・片岡伸太郎  
八代谷徹・橋和臣・向井良・安部吉師・南兵衛
- ロープブリッジ救出 恩澤康次・山端康人・先開幸博・一宮和宏  
森本崇・東泰宏・一宮和宏・先開幸博
- 障害突破 岡田幸宏・関根英司・坊古居良友・菅原聖次・岡本晃始  
中谷明美・喜多浩二郎・高村浩二・由良哲朗・上間義宏  
岡田敏幸・和田章夫・二見広一・柴原裕明・村上圭
- 複合検査 米谷敬一 阿部浩二 福井豊人 西川建治
- 溺者搬送 小間物谷敏雄・知野見和之 有田達年・笠松学  
香西辰哉・岡部豪
- 水中結索 笠松学・阿部浩二・福井豊人
- 基本泳法 米谷敬一・田村和照・小間物谷敏雄  
柏原隆志 高橋伸武 原弘典
- 溺者救助 有田達年・田中利治・西川建治  
笠松学・木村一郎・知野見和之  
高橋伸武・水野厚・岡部豪
- 救援物資搬送 香西辰哉・岡部豪・西川建治  
谷内康男・小西芳史・西田隆行  
田村和照・数内勇・知野見和之
- 人命救助 柏原隆志・水野厚・小西芳史・知野見和之  
原弘典・田中利治・小西芳史・笠松学  
岡部豪・木村一郎・小西芳史・知野見和之

## 全国大会出場

- 引揚救助 八代谷徹・橋和臣・向井良・安部吉師・南兵衛
- 複合検査 阿部浩二
- 基本泳法 柏原隆志 高橋伸武
- 溺者搬送 香西辰哉・岡部豪 有田達年・西田隆行
- 水中結索 笠松学・阿部浩二・福井豊人
- 溺者救助 笠松学・木村一郎・知野見和之
- 人命救助 原弘典・田中利治・小西芳史・岡部豪
- 救援物資搬送 田村和照・数内勇・知野見和之  
谷内康男・小西芳史・西田隆行

# 第26回

近畿地区指導会 平成9年7月24日 大阪市消防学校 陸54名 水45名参加  
 全国大会 平成9年8月22日 千葉県消防学校 水13名参加

- 種目 参加隊員
- ロープ登はん 角田浩二 柴原裕明
- ロープブリッジ渡過 田淵信久 山下敬之
- ほふく救出 喜多浩二郎 徳力英治 南兵衛
- ロープ応用登はん 川井寛司・元田貴之 岡田敏幸・柴原裕明
- 斜めブリッジ救助 物袋和裕・香西隆隆・山本一利  
角田浩二・中垣政彦・川井寛司
- 引揚救助 村上正人・山本一利・川井寛司
- ロープブリッジ救出 森田満・松本貴士・山村雅彦・古市泰士・高橋信人  
八代谷徹・橋和臣・向井良・高田尚義・南兵衛  
木村一郎・中垣伸弥・片岡伸太郎・松本秀樹・南兵衛
- 障害突破 恩澤康次・森本崇・吉田一志・山下敬之  
先開幸博・山端康人・東泰宏・山下敬之
- 複合検査 岡本晃始・菅原聖次・坊古居良友・関根英司・岡田幸宏  
二見広一・村上圭・由良哲朗・喜多浩二郎・中谷明美
- 溺者搬送 廣町則行 阿部浩二
- 水中結索 香西辰哉・小西芳史 廣町則行・矢野孔明  
有田達年・田村和照・小間物谷敏雄  
笠松学・阿部浩二・西川建治
- 基本泳法 柏原隆志 高橋伸武 原弘典
- 溺者救助 高橋伸武・水野厚・岡部豪  
笠松学・山本大二郎・知野見和之  
有田達年・田中利治・西川建治  
香西辰哉・小西芳史・西川建治
- 救援物資搬送 小間物谷敏雄・岡部豪・矢野孔明  
田村和照・数内勇・知野見和之
- 人命救助 柏原隆志・水野厚・小西芳史・矢野孔明  
原弘典・田中利治・小西芳史・笠松学  
岡部豪・山本大二郎・小西芳史・矢野孔明

## 全国大会出場

- 基本泳法 岡部豪 高橋伸武
- 溺者搬送 香西辰哉・岡部豪
- 水中結索 有田達年・田村和照・小間物谷敏雄  
笠松学・阿部浩二・西川建治
- 溺者救助 高橋伸武・水野厚・知野見和之

# 第27回

近畿地区指導会 平成10年7月30日 大阪市消防学校 陸62名 水35名参加  
 全国大会 平成10年8月28日 大阪市消防学校 陸14名 水16名参加

- 種目 参加隊員
- ロープ登はん 小西芳史 柴原裕明 飯田隆彦 角田浩二
- ロープブリッジ渡過 安達孝 中西健次 山下敬之 前原昭彦
- ほふく救出 知野見明生 徳力英治 南兵衛 藤本浩司
- ロープ応用登はん 柏原剛・吉田一志 山田賢・平谷志志  
岡田敏幸・柴原裕明 石崎親一・宮村利幸
- 斜めブリッジ救助 物袋和裕・知野見和之・柏原剛  
角田浩二・中垣政彦・柏原剛  
村上正人・山本一利・中垣政彦
- 引揚救助 森田満・松本貴士・高橋信人・古市泰士・知野見明生  
高田尚義・木下功・片岡伸太郎・中垣伸弥・南兵衛  
八代谷徹・松本英樹・向井良・安部吉師・南兵衛
- ロープブリッジ救出 恩澤康次・山端康人・東泰宏・中西健次  
先開幸博・一宮和宏・数内勇・山下敬之
- 障害突破 二見広一・村上圭・坊古居良友・菅原聖次・中谷明美  
岡本晃始・上間義宏・由良哲朗・喜多浩二郎・高村浩二
- 複合検査 廣町則行 阿部浩二
- 水中結索 有田達年・小間物谷敏雄・田村和照  
笠松学・阿部浩二・西川建治
- 基本泳法 柏原隆志 高橋伸武 岡部豪 矢野孔明
- 溺者救助 鈴木三郎・桐野伸隆・前田征啓  
有田達年・宮村利幸・矢野孔明
- 水中検査救助 田村和照・高橋伸武・香西辰哉・鈴木三郎  
小間物谷敏雄・岡部豪・原弘典・廣町則行  
柏原隆志・水野厚・前田征啓
- 溺者搬送 笠松学・山本大二郎・小西芳史  
香西辰哉・矢野孔明 原弘典・前田征啓

## 全国大会出場

- ロープブリッジ救出 恩澤康次・山端康人・東泰宏・中西健次
- 斜めブリッジ救助 森田満・松本貴士・高橋信人・古市泰士・知野見明生
- 障害突破 岡本晃始・上間義宏・由良哲朗・喜多浩二郎・高村浩二
- 複合検査 廣町則行 阿部浩二
- 基本泳法 岡部豪 高橋伸武
- 溺者搬送 香西辰哉・岡部豪
- 水中結索 笠松学・阿部浩二・西川建治
- 溺者救助 有田達年・宮村利幸・矢野孔明
- 水中検査救助 田村和照・高橋伸武・香西辰哉・鈴木三郎



# 第28回

近畿地区指導会 平成11年7月29日 神戸市民防災総合センター 陸60名 水39名参加  
 全国大会 平成11年8月19日 横浜市消防訓練センター 陸17名 水14名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	小西芳史 柴原裕明
ロープブリッジ渡過	安達孝 中西健次 山下敬之
はしご登はん	知野見明生 徳力英治 寺神貞憲 栗林延功
ロープ応用登はん	山田賢・平谷篤志 岡田敏幸・宮村利幸
ほふく救出	益岡壽圭・秋原裕士・小西芳史 中垣政彦・角田浩二・小西芳史 村上正人・山本一利・知野見明生 物袋和裕・知野見和之・知野見明生
引揚救助	森田満・田口和史・高橋信人・古市泰士・宮中智弘 河本幸舟・村上圭・佐藤孝・中垣伸弥・南兵衛
ロープブリッジ救出	高田信人・松本英樹・向井良・安部吉郎・寺神貞憲 恩澤康次・山端康人・東泰宏・中西健次 先崎幸博・一宮和宏・藪内勇・山下敬之
障害突破	二見広一・和田章夫・坊古居良友・山中裕司・芝田賢弘 岡本晃始・石崎親一・由良哲朗・喜多浩二郎・高村浩二
複合検査	廣町則行 阿部浩二 鈴木三郎
水中結索	有田達洋・小間物谷敏雄・田村和照 笠松学・阿部浩二・小松康範
基本泳法	高橋伸武 岡部豪 矢野孔明
溺者搬送	三枝正平・山本大二郎・前田征啓 笠松学・桐野伸隆・矢野孔明
溺者救助	鈴木三郎・宮村利幸・前田征啓
水中検査救助	有田達洋・小間物谷敏雄・田村和照・廣町則行 高橋伸武・三枝正平・香西辰哉・原弘典
人命救助	岡部豪・山本大二郎・矢野孔明
溺者搬送	香西辰哉・岡部豪 原弘典・前田征啓

## 全国大会出場

ロープブリッジ渡過	山下敬之
斜めブリッジ救助	森田満・田口和史・高橋信人・古市泰士・宮中智弘
ロープ応用登はん	山田賢・平谷篤志
ロープブリッジ救出	恩澤康次・山端康人・東泰宏・中西健次
障害突破	岡本晃始・石崎親一・由良哲朗・喜多浩二郎・高村浩二
複合検査	阿部浩二
基本泳法	高橋伸武
溺者搬送	香西辰哉・岡部豪
水中結索	笠松学・阿部浩二・小松康範
溺者救助	三枝正平・山本大二郎・前田征啓
水中検査救助	高橋伸武・三枝正平・香西辰哉・原弘典

# 第29回

近畿地区指導会 平成12年7月13日 大阪市消防学校 陸57名 水36名参加  
 全国大会 平成12年8月18日 熊本市総合屋内プール (アクアドームくまもと) 陸6名 水13名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	小西芳史 柴原裕明 河合龍治
ロープブリッジ渡過	松村泰程 山下敬之
はしご登はん	知野見明生 徳力英治 寺神貞憲 森田拓志
ロープ応用登はん	笹倉隆史・豊福和孝 柏原剛・泉川浩
ほふく救出	中垣政彦・山本一利・小西芳史 角田浩司・知野見和之・知野見明生 宮慶真義・藤田聖治・宮中智弘・山本鉄也・高橋信人 森田満・田口和史・高橋信人・古市泰士・宮中智弘
引揚救助	高田尚義・佐藤孝・片岡伸太郎・中垣伸弥・南兵衛 結城康之・南兵衛・西川建治・青山浩二・寺神貞憲
ロープブリッジ救出	恩澤康次・中西健次・東泰宏・松村泰程 先崎幸博・一宮和宏・藪内勇・山下敬之 未澤泰裕・三浦直樹・足立学・和田章夫・二見広一 岡本晃始・石崎親一・由良哲朗・喜多浩二郎・高村浩二
複合検査	廣町則行 阿部浩二 鈴木三郎
水中結索	有田達洋・真柴由実・田村和照 香西辰哉・阿部浩二・小松康範
基本泳法	高橋伸武 岡部豪 矢野孔明 原弘典
溺者搬送	小松康範・真柴由実 原弘典・前田征啓
溺者救助	笠松学・桐野伸隆・矢野孔明 三枝正平・谷本成範・前田征啓 鈴木三郎・前田征治・真柴由実
人命救助	伊藤公一・宮村利幸・前田征啓 岡部豪・山本大二郎・矢野孔明
水中検査救助	高橋伸武・三枝正平・香西辰哉・有田達洋

## 全国大会出場

ロープブリッジ渡過	山下敬之
斜めブリッジ救助	森田満・田口和史・高橋信人・古市泰士・宮中智弘
基本泳法	高橋伸武
溺者搬送	小松康範・真柴由実
水中結索	香西辰哉・阿部浩二・小松康範
溺者救助	三枝正平・谷本成範・前田征啓
水中検査救助	高橋伸武・三枝正平・香西辰哉・有田達洋

# 第30回

近畿地区指導会 平成13年7月26日 神戸市民防災総合センター 陸59名 水21名参加  
 全国大会 平成13年8月8日 東京消防庁豊洲訓練場 陸6名 水14名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	森仁志 河合龍治 小西芳史 柴原裕明
ロープブリッジ渡過	広内実 松村泰程 山下敬之
はしご登はん	知野見明生 徳力英治 今中憲弘 森田拓志
ロープ応用登はん	菊間貴光・八澤直之 西田貴幸・平谷篤志
ほふく救出	笹倉隆史・豊福和孝 足立学・柏原剛・寺神貞憲 中垣政彦・山本一利・寺神貞憲 益岡壽圭・堀和也・寺神貞憲 益岡壽圭・堀和也・寺神貞憲 物袋和裕・知野見和之・柏原剛
引揚救助	高田尚義・西川建治・青山浩二・片岡伸太郎・南兵衛
斜めブリッジ救助	宮慶真義・宮中智弘・田口和史・古市泰士・高津充雄 森田満・松本貴士・松末人・山本鉄也・高津充雄
ロープブリッジ救出	後藤宣徳・中西健次・藪内勇・松村泰程 恩澤康次・一宮和弘・東泰宏・山下敬之 岩下勝・森本崇・安達孝・広内実 未澤泰裕・由良哲朗・三浦直樹・北川忠・上間義宏 岡本晃始・石崎親一・水門浩一・菅原聖次・二見広一
複合検査	廣町則行 伊藤公一 鈴木三郎
水中結索	有田達洋・廣町則行・田村和照 香西辰哉・阿部浩二・小松康範
基本泳法	高橋伸武 岡部豪 矢野孔明 笠松学
溺者搬送	小松康範・真柴由実 原弘典・前田征啓
溺者救助	笠松学・桐野伸隆・矢野孔明 岡部豪・谷本成範・前田征啓 鈴木三郎・前田征治・真柴由実
人命救助	伊藤公一・宮村利幸・前田征啓 三枝正平・山本大二郎・矢野孔明
水中検査救助	高橋伸武・阿部浩二・香西辰哉・有田達洋

## 全国大会出場

斜めブリッジ救助	森田満・松本貴士・松末人・山本鉄也・高津充雄
ロープブリッジ渡過	山下敬之
基本泳法	高橋伸武 笠松学
溺者搬送	小松康範・真柴由実
水中結索	香西辰哉・阿部浩二・小松康範
溺者救助	笠松学・桐野伸隆・矢野孔明
水中検査救助	高橋伸武・阿部浩二・香西辰哉・有田達洋

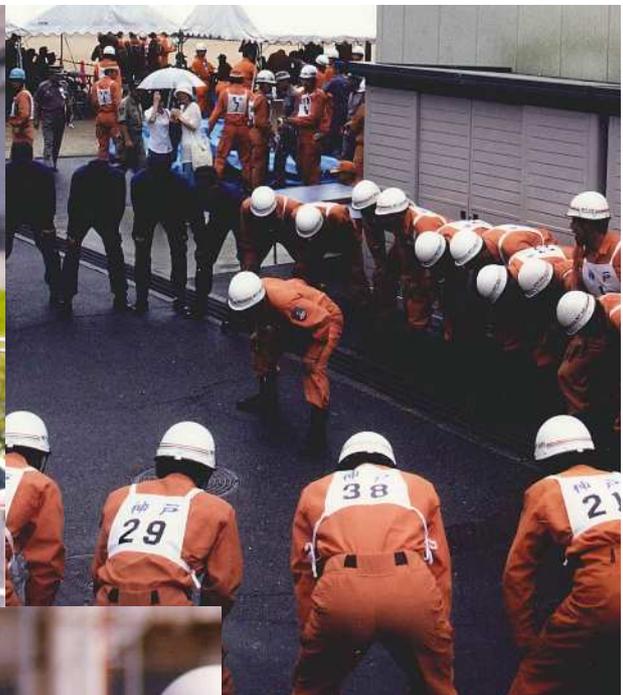
# 第31回

近畿地区指導会 平成14年7月18日 大阪市消防学校 陸56名 水31名参加  
 全国大会 平成14年8月23日 名古屋市消防学校 陸6名 水13名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	森仁志 田辺剛 柴原裕明
ロープブリッジ渡過	山口雅之 田中幹人 山下敬之
はしご登はん	知野見明生 今中憲弘
ロープ応用登はん	笹倉隆史・豊福和孝 山本千昭・長渡昭虎
ほふく救出	中垣政彦・知野見和之・寺神貞憲 柏原剛・足立学・寺神貞憲 古市泰士・松末人・高津充雄・三家啓啓・山本一利 田口和史・森田満・宮中智弘・山本鉄也・松本貴士 高田尚義・西川建治・青山浩二・片岡伸太郎・森田拓志 松本英樹・坊古居良友・結城康之・増田隆志・南兵衛 恩澤康次・藪内勇・一宮和弘・山下敬之 安部吉郎・中西健次・岩下勝・山口雅之
引揚救助	由良哲朗・岡本晃始・菅原聖次・三浦直樹・二見広一 上間義宏・水門浩一・岡村聡・河合龍治・村上圭
ロープブリッジ救出	廣町則行 高橋伸武 岡部豪 笠松学
障害突破	小松康範・前田征啓
複合検査	石丸祐介・廣町則行・田村和照
基本泳法	有田達洋・小松康範・阿部浩二
溺者搬送	笠松学・桐野伸隆・矢野孔明
溺者救助	香西辰哉・谷本成範・前田征啓 岡部豪・前田征治・矢野孔明 伊藤公一・宮村利幸・前田征啓 三枝正平・山本大二郎・矢野孔明
人命救助	高橋伸武・阿部浩二・香西辰哉・有田達洋
水中検査救助	

## 全国大会出場

ロープブリッジ渡過	山下敬之
障害突破	由良哲朗・岡本晃始・菅原聖次・三浦直樹・二見広一
基本泳法	笠松学 高橋伸武
溺者搬送	小松康範・前田征啓
水中結索	石丸祐介・廣町則行・田村和照 有田達洋・小松康範・阿部浩二
溺者救助	笠松学・桐野伸隆・矢野孔明



平成15年に伊川谷火災事故が発生し、神戸市消防局は大きな悲しみと衝撃を受けました。

指導会の参加隊員にも事故に遭遇した隊員が数多くおり、殉職された職員も全国大会に出場する優秀な隊員でした。神戸レスキューは震災に関しては困難に挑むことで乗り越えることを選択し、日々努力重ねましたが、伊川谷火災事故については乗り越えるのではなく、殉職者の想いを我々が背負い、伝えていくことでともに進んでいくことを選択しました。

## 「伝説の1番員」

「日が光り始める」と書いて「晃始（こうじ）」

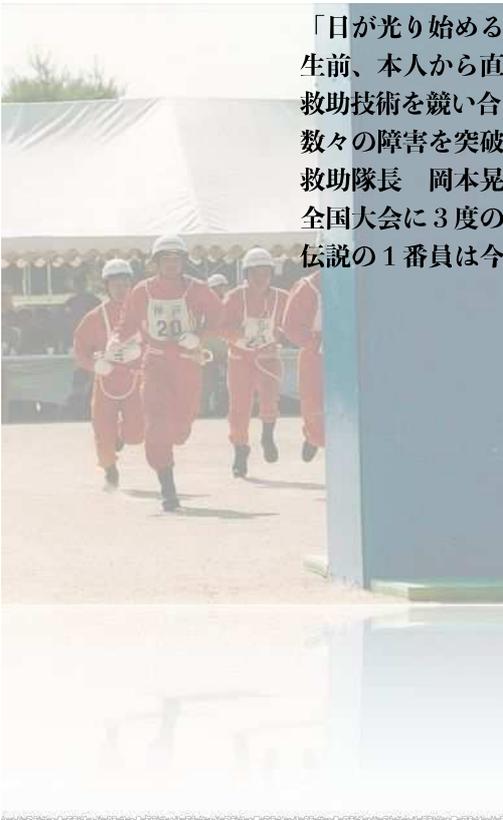
生前、本人から直接聞いた名前の由来は彼の活躍を象徴していた。

救助技術を競い合う大会「救助技術指導会」に出場し、一番先頭でロープを渡り、数々の障害を突破し、5人でゴールを目指す「障害突破」という種目の1番員。

救助隊長 岡本晃始（おかもと こうじ）

全国大会に3度の出場を果たす偉業を上回る1番員は彼以外に存在しない。

伝説の1番員は今も生きつづけている。



## 「0.1秒の戦い」

平成14年度近畿地区指導会に石丸祐介と水中結索に出場することが決まり、強化訓練前期から泳ぎ込める体力作りを行い、第31回全国消防救助技術指導会名古屋大会出場を目標にさらに泳ぎ込み、ロープワークを無我夢中で自らを追い込む祐介の姿を思い出します。近畿地区指導会で水中結索の全国切符を獲得した時は本当にうれしく、将来の活躍が楽しみだったことが蘇えます。寡黙で訓練に取り組む、どんな状況でも、シュッとした二枚目顔で何事にも動じない姿には貫禄を感じました。神戸消防水上の部を背負って立つ隊員に育てあげると！と心に誓ったことが今もなお心に残っています。祐介から教えられたことは今では強い教訓となり一緒に全国出場したことは大きな財産です。この財産は若手職員育成に欠かせないものになっています。一つの浮環にかける思いと小綱に力を託し0.1秒の戦いに挑んだことは忘れられない。

まさに大会の合言葉である「DRAMATIC RESCUE」！



## 「孔明に乾杯」

69期同期会の乾杯の発声です。

伊川谷火災事故から約1ヶ月後に行われた合同葬儀の場で、初任科時代そして救助技術指導会で矢野孔明と苦楽を共にした同期生の中から「お前のことで泣くのはこれではないにするわ」という声が漏れました。事故の日から悲しみの淵に沈んでいた我々が少しずつ前を向こうとした瞬間でした。

あれから15年。すっかりおっさんになった面々は、今年も参加者+1個のグラスを用意し、笑顔で「孔明に乾杯！」



# 2度目の全国大会開催

MEMORIAL RESUCUE

—感謝をこめて—

2004HYOGO・KOBE

この大会では地域住民に親しまれる消防救助隊として住民参加型とし、会場内に消防防災体験コーナーや資機材展示を設け、約10,000人が来場して行われました。

全国からの939名の救助隊員が参加し、アトラクションとして幼年消防クラブの合同演技の披露やプールにて神戸海上保安部と消防水難救助隊（神戸市・尼崎市・西宮市・明石市・加古川・姫路市）との合同訓練も披露されました。

震災から10年目を迎え、この大会を通じ、全国の消防本部や各機関及び国内外の方々からいただいた応援に対し「お礼」と「感謝」を示すとともに復興した兵庫県・神戸市をアピールしました。

この大会から後、近畿地区指導会は一般来場がしやすい土日開催が採用され、開催地事務局は各種工夫を凝らしたイベントを指導会と同時開催しています。

## 救助大会の見直し

第32回大会までこの大会は日本財団の助成を受けていましたが、この33回大会からこの助成がなくなり、新たに市町村振興協会からの後援を受けることとなりました。

これを機に救助大会について見直しが全国消防協会で行われ、大会自体をさらに広く市民にアピールすることや実施種目について見直しが検討され、33回大会から種目の一部見直しがされました。以降、救助大会は全国消防協会に設けられた救助大会研究会（専門部会）で毎年、見直しが検討されることとなりました。

## 第33回

近畿地区指導会  
全国大会

平成16年7月29日  
平成16年8月26日

兵庫県立広域防災センター  
兵庫県立広域防災センター

陸62名 水29名参加  
陸8名 水15名参加

種目	参加隊員
ロープ登はん	柴原裕明 竹田亮 知野見明生 濑谷佳彦
ロープブリッジ渡過	山本一利 田中幹人 山下敬之 山口雅之
はしご登はん	羽瀨隆則 森美幸 今中嘉弘 西川大輔
ロープ応用登はん	笹倉隆史・豊福和孝 山本千昭・長瀬昭虎
ほふく救出	佐藤孝・柴原裕明 知野見和之・物袋和裕・前田征啓 柏原剛・足立学・前田征啓
斜めブリッジ救助	古市泰士・田口和史・森田満・松本貴士・和田肇夫 山本鉄也・宮中智弘・高橋信人・松末人・國本哲
引揚救助	山本大二郎・西川建治・坊古居良友・恩澤康次・広内実 青山浩二・裕本英樹・片岡伸太郎・高田尚義・南兵衛
ロープブリッジ救出	岩下勝・後藤宣徳・安達孝・山本一利 一宮和宏・中西健次・森内勇・山口雅之
障害突破	三浦直樹・末澤泰裕・森田拓志・上原拓真・二見広一 石崎親一・水門浩一・立脇龍也・貝澤大介・北濱雄一
複合検索	廣町則行 阿部豪
基本泳法	高橋伸武 阿部豪
溺者搬送	有田達洋・野中伸一郎 香西辰哉・阿部豪
水中結索	伊藤公一・杉山裕一・江川正和 有田達洋・小松康範・阿部浩二 笠松学・三枝正平・高橋伸武
溺者救助	香西辰哉・谷本成範・吉田知展 小松康範・前田征治・伊藤公一 笠松学・桐野伸隆・野中伸一郎
人命救助	三枝正平・宮村利幸・吉田知展

## 全国大会出場

引揚救助	山本大二郎・西川建治・坊古居良友・恩澤康次・広内実
ロープブリッジ渡過	山下敬之
ロープ応用登はん	笹倉隆史・豊福和孝
複合検索	阿部浩二
基本泳法	高橋伸武
溺者搬送	有田達洋・野中伸一郎 香西辰哉・阿部豪
水中結索	有田達洋・小松康範・阿部浩二
溺者救助	小松康範・前田征治・伊藤公一
人命救助	三枝正平・宮村利幸・吉田知展

# 第32回

近畿地区指導会 平成15年 7月24日 神戸市民防災総合センター 陸48名 水28名参加  
全国大会 平成15年 8月28日 仙台市泉総合運動場 陸9名 水13名参加

- 種目 参加隊員
- ロープ登はん 柴原裕明
  - ロープブリッジ渡過 山口雅之 田中幹人 山下敬之
  - はしご登はん 羽瀧隆則 森美幸 今中憲弘
  - ロープ応用登はん 笹倉隆史・豊福和孝 山本千昭・長渡昭虎
  - ほふく救出 知野見和之・寺神貞恵・山本一利
  - 引揚救助 角田浩二・物袋和裕・前田征啓
  - 斜めブリッジ救助 柏原剛・足立学・山本一利
  - ロープブリッジ救出 高田尚義・西川建治・青山浩二・片岡伸太郎・森田拓志
  - 障害突破 古市泰士・田口和史・森田満・松本貴士・和田章夫
  - 複合検索 宮中智弘・松未人・山本鉄也・高津充雄・向井良一
  - 基本泳法 一宮和宏・森内勇・後藤宣徳・山下敬之
  - 溺者搬送 安達孝・岩下勝・中西健次・山口雅之
  - 水中結索 岡村聡・末澤泰裕・水門浩一・立脇龍也・村上圭
  - 溺者救助 廣町則行
  - 人命救助 杉山裕一 岡部豪 高橋伸武
  - 水中検索救助 小松康範・野中伸一郎

## 全国大会出場

- 斜めブリッジ救助 古市泰士・田口和史・森田満・松本貴士・和田章夫
- はしご登はん 今中憲弘
- ロープブリッジ渡過 山下敬之
- ロープ応用登はん 笹倉隆史・豊福和孝
- 複合検索 廣町則行
- 基本泳法 高橋伸武
- 溺者搬送 小松康範・野中伸一郎
- 人命救助 三枝正平・宮村利幸・吉田知展
- 水中結索 有田達洋・小松康範・阿部浩二
- 溺者救助 香西辰哉・谷本成範・吉田知展

# 第34回

近畿地区指導会 平成17年 7月28日 大阪府消防学校 陸37名 水29名参加  
全国大会 平成17年 8月25日 さいたま市岩槻文化公園 陸4名 水20名参加  
県営大宮公園水泳場

- 種目 参加隊員
- ロープ登はん 竹田充 知野見明生 澁谷佳彦
  - ロープブリッジ渡過 山口雅之 田中幹人 山下敬之 山本一利
  - はしご登はん 今中憲弘
  - ロープ応用登はん 笹倉隆史・豊福和孝 山本千昭・長渡昭虎
  - ほふく救出 足立学・森田満・宮中智弘
  - 引揚救助 物袋和裕・柏原剛・泉辰朗
  - 斜めブリッジ救助 結城康之・広内実・片岡伸太郎・青山浩二・南兵衛
  - ロープブリッジ救出 後藤宣徳・岩下勝・安達孝・山本一利
  - 障害突破 石崎親一・立脇龍也・上原拓真・三浦直樹・高村浩二
  - 複合検索 森田拓志・水門浩一・貝澤大介・村上圭・田口和史
  - 基本泳法 高橋伸武 阿部徹
  - 溺者搬送 石丸亮介・阿部徹 有田達洋・野中伸一郎
  - 水中結索 香西辰哉・岡部豪
  - 溺者救助 伊藤公一・杉山裕一・石丸亮介
  - 人命救助 有田達洋・小松康範・阿部浩二

## 全国大会出場

- ロープブリッジ渡過 山下敬之
- はしご登はん 今中憲弘
- ロープ応用登はん 笹倉隆史・豊福和孝
- 溺者搬送 有田達洋・野中伸一郎
- 水中結索 有田達洋・小松康範・阿部浩二
- 溺者救助 香西辰哉・谷本成範・吉田知展
- 人命救助 小松康範・前田征治・伊藤公一

# 第35回

近畿地区指導会 平成18年 7月29日 兵庫県立広域防災センター 陸29名 22名参加  
全国大会 平成18年 8月24日 札幌市消防学校・札幌市平岸プール 陸8名 水3名参加

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 赤松宏章 田中幹人 山下敬之
  - はしご登はん 今中憲弘 宮中智弘 神手大輔
  - ロープ応用登はん 笹倉隆史・豊福和孝 山本千昭・長渡昭虎
  - ほふく救出 高見洋輔・松本隆年
  - 引揚救助 物袋和裕・柏原剛・中田政彦
  - ロープブリッジ救出 結城康之・南兵衛・青山浩二・広内実・泉辰朗
  - 障害突破 岩下勝・前田征治・後藤宣徳・赤松宏章
  - 基本泳法 水門浩一・石崎親一・立脇龍也・貝澤大介・上原拓真
  - 溺者搬送 高橋伸武 岡部豪 伊東貴司
  - 水中結索 有田達洋・伊東貴司 香西辰哉・岡部徹
  - 溺者救助 伊藤公一・杉山裕一・阿部徹
  - 人命救助 有田達洋・小松康範・阿部徹

## 全国大会出場

- ロープブリッジ渡過 山下敬之
- ロープ応用登はん 笹倉隆史・豊福和孝
- 障害突破 水門浩一・石崎親一・立脇龍也・貝澤大介・上原拓真
- 溺者救助 香西辰哉・谷本成範・吉田知展

# 救助大会の見直しと変化

## 想定外を乗り越えて

日本財団の助成廃止や救助大会の開催原資のひとつである全国消防協会のグループ保険の加入者の減少により、主催団体の全国消防協会では消防長を構成員とする「全国消防救助技術大会に関する検討会」を設置し、大会の新たな枠組みを議論しています。そのなかで、一時は救助大会自体の発展的な廃止も検討されましたが、競技を主目的とした大会から、創意と工夫のもとで安全で的確・迅速な訓練を発表する「技術訓練」が第36回大会から創設され、競技形式の大会から発表形式へと実施目的を将来的にシフトしていくことを含めて、開催の継続が続いていきます。

この技術訓練は近畿地区指導会では毎年実施しており、全国での披露の場として第42回広島大会で発表されました。

### 第36回

近畿地区指導会	平成19年7月28日	大阪市消防学校	陸41名、水17名参加
全国大会	平成19年8月22日	東京消防庁夢の島消防訓練場 東京辰巳国際水泳場	陸1名 水3名参加



種目	参加隊員
ロープブリッジ渡過	赤松宏章 田中幹人
はしご登はん	今中憲弘 宮中智弘
ロープ応用登はん	山本千昭・木船優治 高見洋輔・松本隆年 知野見明生・竹田充
ほふく救出	松上倫也・鍋島浩紀・中垣政彦
引揚救助	広内実・野中伸一郎・高田尚義・南兵衛・結城康之 西川建治・伊関将司・濱野勝一・宮本佳一・三枝正平
ロープブリッジ救出	住吉樹・田中和宏・坊古居良友・山本鉄也 若下勝・前田征治・後藤宣徳・山下敬之
障害突破	貝澤大介・松本貴士・水門浩一・石崎親一・上原拓真 三浦直樹・末澤泰裕・永井康道・釜江和孝・北濱雄一
基本泳法	高橋伸武 阿部豪
水中結索	伊藤公一・杉山裕一・阿部徹 有田達洋・小松康範・阿部徹
溺者救助	香西辰哉・谷本成範・吉田知展 笠松学・桐野伸隆・伊藤公一
人命救助	宮村利幸・石丸亮介・吉田知展



### 全国大会出場

はしご登はん	今中憲弘
水中結索	有田達洋・小松康範・阿部徹





# 第37回

近畿地区指導会 平成20年7月26日 兵庫県立広域防災センター 陸47名 水33名参加  
 全国大会 平成8年8月23日 北九州市立勝山公園 陸11名 水8名参加

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 齊藤真也 澁谷佳彦 赤松宏章
  - はしご登はん 坂本遼 神手大輔 西川忠伸 宮中智弘
  - ロープ応用登はん 山本千昭、木船優治 高見洋輔・松本隆年 知野見明生・竹田亮
  - ほふく救出 松上倫也・鍋島浩紀・中垣政彦
  - 引揚救助 車力勇・敦見宗弘・柏原剛
  - 三枝正平・宮本佳一・濱野勝一・伊関将司・釜江和孝
  - 高田尚義・南兵衛・広内実・結城康之・野中伸一郎
  - ロープブリッジ救出 岩下勝・前田征治・後藤宣徳・山下敬之
  - 住吉樹・田中和宏・山本亮平・藤原圭一
  - 障害突破 上原拓真・石崎親一・三浦直樹・水門浩一・松本貴士
  - 永井康道・長澤大介・北濱雄一・鹿島周平・末澤泰裕
  - 複合検索 杉山裕一 阿部徹 伊東貴司
  - 基本泳法 高橋伸武 横山元樹 井上奈緒
  - 溺者搬送 有田達洋・長村令子 伊保恒毅・井上奈緒
  - 水中結索 横山元樹・阿部浩二・山本和輝
  - 伊藤公一・杉山裕一・小松康範
  - 溺者救助 木崎義弘・泉口将人・泉澤正和
  - 桐野伸隆・笠松学・吉田知展
  - 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・長村令子
  - 水中検索救助 高橋伸武・阿部浩二・有田達洋・香西辰哉
  - 笠松学・阿部徹・小松康範・山中亮人

## 全国大会出場

- ロープブリッジ渡過 赤松宏章
- はしご登はん 西川忠伸
- ロープブリッジ救出 岩下勝・前田征治・後藤宣徳・山下敬之
- 障害突破 上原拓真・石崎親一・三浦直樹・水門浩一・松本貴士
- 基本泳法 高橋伸武
- 溺者搬送 有田達洋・長村令子
- 水中結索 伊藤公一・杉山裕一・小松康範
- 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・長村令子

# 第38回

近畿地区指導会 平成21年7月26日 大阪市消防学校 陸60名 水30名参加  
 全国大会 平成21年8月20日 横浜市消防訓練センター 陸2名 水10名参加

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 梅崎直樹 西川忠伸 澁谷佳彦 濱田隆志 齊藤真也
  - 谷池史章 梅木裕史 上野耕輔 高松由 宮中智弘 神手大輔 坂本遼
  - はしご登はん 紀徳雄・木本貴彦 山本千昭・田中幹人
  - ロープ応用登はん 知野見明生・竹田亮 高見洋輔・松本隆年
  - ほふく救出 松上倫也・鍋島浩紀・中垣政彦
  - 柏原剛・泉辰朗・片山慶明
  - 敦見宗弘・三宅亘・坊真吾
  - 上辻和也・辻岳史・片山慶明
  - 引揚救助 三枝正平・宮本佳一・古川誠・伊関将司・坂本遼
  - 高田尚義・南兵衛・広内実・松原宏樹・濱野勝一
  - ロープブリッジ救出 岩下勝・前田征治・後藤宣徳・赤松宏章
  - 山本鉄也・田中和宏・藤原圭一・西川忠伸
  - 障害突破 上原拓真・永井康道・釜江和孝・北濱雄一・末澤泰裕
  - 三浦直樹・長澤大介・入田優・鹿島周平・酒井大輔
  - 複合検索 杉山裕一 阿部徹 山本和輝
  - 基本泳法 横山元樹 笠松学 井上奈緒
  - 溺者搬送 有田達洋・井上奈緒
  - 水中結索 伊藤公一・杉山裕一・小松康範
  - 横山元樹・伊東貴司・田村和照
  - 溺者救助 桐野伸隆・笠松学・吉田知展
  - 木崎義弘・香西辰哉・山本和輝
  - 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・長村令子
  - 谷本成範・伊保恒毅・吉田知展
  - 水中検索救助 高橋伸武・阿部徹・有田達洋・山中亮人

## 全国大会出場

- ロープ応用登はん 山本千昭・田中幹人
- 複合検索 阿部徹
- 基本泳法 笠松学
- 溺者搬送 有田達洋・井上奈緒
- 水中結索 伊藤公一・杉山裕一・小松康範
- 溺者救助 木崎義弘・香西辰哉・山本和輝

# 第39回

近畿地区指導会 平成22年7月24日 兵庫県立広域防災センター 陸50名 水33名参加  
 全国大会 平成22年8月27日 京都市消防活動総合センター 陸6名 水10名参加

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 西川忠伸 紀徳雄 梅崎直樹 澁谷佳彦
  - 坂本遼 柳木裕史 高松由 神手大輔 宮中智弘
  - はしご登はん 三宅亘・長村令子・多磨公哉
  - ほふく救出 松上倫也・鍋島浩紀・柏原剛
  - 車力勇・敦見宗弘・森田拓志
  - ロープ応用登はん 山本千昭・田中幹人 高見洋輔・松本隆年
  - ロープブリッジ救出 岩下勝・前田征治・田中和宏・赤松宏章
  - 引揚救助 住吉樹・柿木和哉・藤原圭一・西川忠伸
  - 高田尚義・三枝正平・南兵衛・広内実・上野耕輔
  - 片岡伸太郎・伊関将司・濱野勝一・松原宏樹・坂本遼
  - 障害突破 三浦直樹・上原拓真・北濱雄一・永井康道・酒井大輔
  - 水門浩一・長澤大介・釜江和孝・入田優・鹿島周平
  - 複合検索 山中亮人 阿部徹 山本和輝 村松匠
  - 基本泳法 横山元樹 伊保恒毅 井上奈緒
  - 溺者搬送 有田達洋・井上奈緒 石丸亮介・井上奈緒
  - 水中結索 伊藤公一・杉山裕一・小松康範
  - 横山元樹・伊東貴司・笠松学
  - 溺者救助 桐野・伊保恒毅・野中伸一郎
  - 谷本成範・香西辰哉・吉田知展
  - 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・吉田知展
  - 木崎義弘・小松康範・野中伸一郎
  - 水中検索救助 杉山裕一・山中亮人・有田達洋・香西辰哉

## 全国大会出場

- ロープブリッジ渡過 澁谷佳彦
- 障害突破 三浦直樹・上原拓真・北濱雄一・永井康道・酒井大輔
- 複合検索 山中亮人
- 基本泳法 横山元樹
- 溺者搬送 有田達洋・井上奈緒
- 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・吉田知展
- 水中結索 横山元樹・伊東貴司・笠松学

# 第40回

近畿地区指導会 東日本大震災により中止  
 全国大会



# 第41回

近畿地区指導会 平成24年7月14日 大阪市消防学校 陸45名 水33名参加  
 全国大会 平成24年8月7日 ゆりかもめ新洲駅前特設会場 陸5名 水5名参加  
 東京辰日国際水泳場

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 梅崎直樹 軋徳雄 濱田隆志 中林謙介
  - はしご登はん 上野耕輔 高松由 宮中智弘
  - ロープ応用登はん 高見洋輔・松本隆年 山本千昭・田中幹人
  - ほふく救出 松井謙佑・勝藤一・南兵衛
  - 辻岳史・松上倫也・柏原剛
  - 引揚救助 宮本佳一・中塚俊仁・古川哲也・岩本穂・山本亮平
  - 三枝正平・伊関将司・濱野勝一・古川誠・坂本遠
  - ロープブリッジ救出 柿本和哉・藤原圭一・岩倉徹・西川忠伸
  - 前田征治・田中和宏・杉本拓磨・榎手大輔
  - 障害突破 上原拓真・釜江和孝・入田優・政田達彦・鹿島周平
  - 北濱雄一・酒井大輔・乾翔太郎・櫻井辰悠・三木博文
  - 複合検査 山本和揮 横山貴幸
  - 基本泳法 伊東貴司 津田智哉
  - 溺者搬送 横山元樹・吉田知展 有田達洋・中田直樹
  - 水中結索 伊藤公一・山本和揮・小松康範
  - 伊保恒毅・伊東貴司・笠松学
  - 溺者救助 西別府稔・山中亮人・中田直樹
  - 花房聖史・木村賢太・津田智哉
  - 谷本成範・横山元樹・吉田知展
  - 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・吉田知展
  - 村松匠・道永直生・中田直樹
  - 水中検査救助 阿部徹・杉山裕一・山中亮人・横山貴幸

## 全国大会出場

- ほふく救出 辻岳史・松上倫也・柏原剛
- ロープ応用登はん 山本千昭・田中幹人
- 人命救助 宮村利幸・石丸亮介・吉田知展
- 溺者搬送 有田達洋・中田直樹

# 第42回

近畿地区指導会 平成25年7月26日 兵庫県立広域防災センター 陸42名 水30名参加  
 全国大会 平成25年8月22日 旧広島市民球場跡地 陸9名 水5名参加  
 広島市総合屋内プール

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 中林謙介 濱田隆志
  - 梅木裕史 高松由
  - ロープ応用登はん 山本千昭 田中幹人 前田隆太 松柴陽介
  - ほふく救出 庄司一貴 中田孝次 上野耕輔
  - 松井謙佑 松上倫也 辻岳史
  - 引揚救助 松本隆年 宮本佳一 瀧井智雄 古川哲也 寺神貞恵
  - 三枝正平 伊関将司 濱野勝一 古川誠 南兵衛
  - ロープブリッジ救出 田中和宏 杉本拓磨 前田征治 山本亮平
  - 柿本和哉 藤原圭一 岩倉徹 泉辰朗
  - 障害突破 上原拓真 北濱雄一 酒井大輔 入田優 鹿島周平
  - 釜江和孝 乾翔太郎 政田達彦 三木博文 南浦将樹
  - 複合検査 山本和揮 横山貴幸
  - 基本泳法 伊東貴司 津田智哉
  - 溺者搬送 有田達洋 道永直生 横山元樹 長村令子
  - 水中結索 伊藤公一 杉山裕一 小松康範
  - 伊藤公一 山本和揮 阿部徹
  - 溺者救助 石丸亮介 花房聖史 津田智哉
  - 伊保恒毅 谷本成範 山本和揮
  - 人命救助 中野祐介 木崎義雄 津田智哉
  - 道永直生 宮村利幸 長村令子
  - 水中検査救助 石丸亮介 横山貴幸 山中亮人 杉山裕一

## 全国大会出場

- ほふく救出 松井謙佑・松上倫也・辻岳史
- ロープブリッジ渡過 中林謙介
- 引揚救助 三枝正平・伊関将司・濱野勝一・古川誠・南兵衛
- 水中結索 伊藤公一・山本和揮・阿部徹
- 溺者搬送 横山元樹・長村令子
- 技術訓練 水門・高見・山本・広内・加賀山・村上拓

# 第43回

近畿地区指導会 平成26年7月26日 大阪市消防局高度専門教育訓練センター 陸42名 水30名参加  
 全国大会 平成26年8月27日 千葉県消防学校 陸10名 水4名参加  
 (平成26年広島市豪雨土砂災害により中止)

- 種目 参加隊員
- ロープブリッジ渡過 濱田隆志 軋徳雄
  - 清水翔太 高松由
  - ロープ応用登はん 吉田真悟・河内乾蒼 前田隆太・松柴陽介
  - ほふく救出 松井謙佑・勝藤一・多鹿公哉
  - 辻岳史・中田孝次・上野耕輔
  - 引揚救助 富田有晴・古川哲也・井上晶雄・瀧井智雄・南兵衛
  - 伊関将司・宮本佳一・古川誠・岩本穂・広内実
  - ロープブリッジ救出 杉本拓磨・柿本和哉・藤原圭一・岩倉徹
  - 田中和宏・西海文洋・山本亮平・泉辰朗
  - 障害突破 北濱雄一・酒井大輔・乾翔太郎・櫻井辰悠・鹿島周平
  - 釜江和孝・三木博文・政田達彦・南浦将樹・梅崎直樹
  - 複合検査 山本和揮 横山貴幸
  - 基本泳法 原田良平 中野祐介
  - 溺者搬送 有田達洋・津田智哉 原田良平・城内秀斗
  - 水中結索 横山元樹・山本和揮・小松康範
  - 阿部徹・伊東貴司・中野祐介
  - 溺者救助 伊保恒毅・花房聖史・加藤諒
  - 石丸亮介・西別府稔・津田智哉
  - 人命救助 木村賢太・木崎義雄・城内秀斗
  - 道永直生・宮村利幸・加藤諒
  - 水中検査救助 石丸亮介・横山貴幸・山中亮人・杉山裕一

## 全国大会出場

- はしご登はん 高松由
- ロープブリッジ救出 杉本拓磨・柿本和哉・藤原圭一・岩倉徹
- 障害突破 北濱雄一・酒井大輔・乾翔太郎・櫻井辰悠・鹿島周平
- 複合検査 山本和揮
- 水中結索 横山元樹・山本和揮・小松康範

# 3度目の全国大会開催

NEVER FORGET, GO

FORWARD -新たなステージへ-

阪神・淡路大震災から20年が経過した神戸市が震災のことを決して忘れず、様々な取り組みを行い「復興の歩み」を進めてきたこと、そして復興から「新たなステージ」へ進み出していることを発信するため、上記スローガンを掲げ、3度目の全国大会を神戸学院大学の協力のもと大会初の地域大学と連携して大学キャンパス内で開催しました。前年は東日本大震災が発生し、大会史上はじめて「中止」されたため2年振りの開催でした。

参加救助隊員数は948名、関係者・一般来場者は約18,000名を集め、サンパチームのアトラクションや防災体験イベント「イザ！カエルキャラバン！」等を実施し、成功裏のうちに終了しました。

## 第44回

近畿地区指導会 平成27年7月19日 神戸学院大学B-177号棟 陸42名 水34名参加  
 全国大会 平成27年8月29日 神戸市立B-177号棟 陸14名 水23名参加

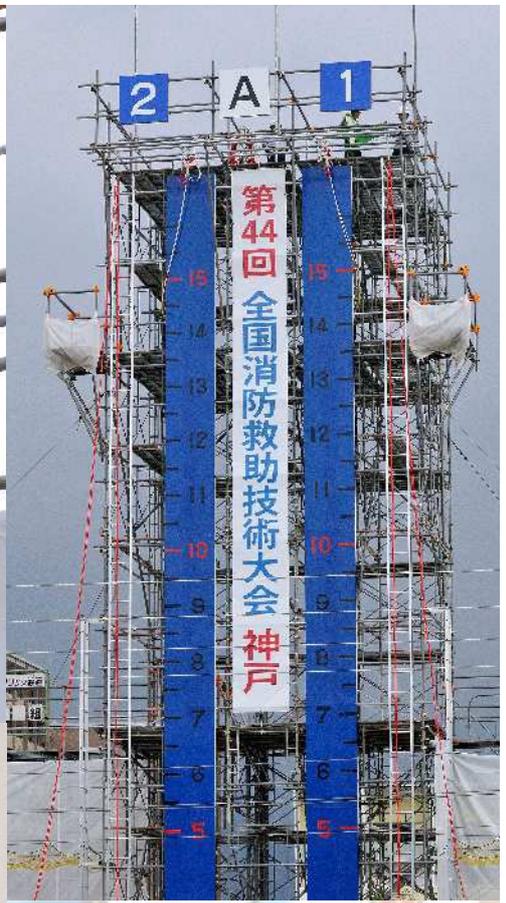
種目	参加隊員
ロープブリッジ渡過	中村隆紀 札藤雄
はしご登はん	清水翔太 山田俊介
ロープ応用登はん	前田隆太 松原隆介 中野広樹 中林健介
はふく救出	嶋崎淳之介・上野耕輔・草嶋伸也 中田考次・庄司一貴・辻浩史
引揚救助	鹿島周平・松井隆佑・井上星雄・瀬井智雄・吉田大輝 広内実・伊関将司・宮本佳一・古川誠・岩本徳
ロープブリッジ救出	加賀山達也・杉本拓磨・藤原圭一・柿木和哉 馬田健太郎・岩倉徹・山本亮平・森井郁也
障害突破	酒井大輔・永井康道・乾翔太郎・櫻井辰悠・政田達彦 河島弘和・梅崎直樹・谷本佑太・高松弘毅・南浦将樹
複合検索	山本和輝 横山貴幸
基本泳法	伊東貴司 中野祐介
溺者搬送	有田達洋・山田拓巳 原田良平・加藤諒
水中結索	横山元樹・伊東貴司・大西純平 百本佳祐・道永直生・中野祐介 石丸亮介・西別府稔・津田智哉
溺者救助	木村賢太・宗實優弥・山田拓巳 道永直生・宮村利幸・加藤諒
人命救助	原田良平・木崎義雄・津田智哉
水中検索救助	石丸亮介・横山貴幸・山中亮人・杉山裕一 大西純平・山本和輝・百本佳祐・木村賢太



## 全国大会出場

引揚救助	広内実・伊関将司・宮本佳一・古川誠・岩本徳
ロープブリッジ救出	加賀山達也・杉本拓磨・藤原圭一・柿木和哉
障害突破	酒井大輔・永井康道・乾翔太郎・櫻井辰悠・政田達彦
複合検索	横山貴幸 山本和輝
基本泳法	伊東貴司
溺者搬送	原田良平・加藤諒 有田達洋・山田拓巳
人命救助	道永直生・宮村利幸・加藤諒
溺者救助	石丸亮介・西別府稔・津田智哉
水中結索	百本佳祐・道永直生・中野祐介 横山元樹・伊東貴司・大西純平
水中検索救助	石丸亮介・横山貴幸・山中亮人・杉山裕一





## 第45回

近畿地区指導会 平成28年7月23日 大阪府消防局高度専門教育訓練センター 陸42名 水30名参加  
 全国大会 平成28年8月24日 松山中央公園・777ハレまつりやま 陸3名 水3名参加

種目 参加隊員  
 ロープブリッジ渡過 角野公彦 田中裕樹  
 ほしご登はん 芳賀佳祐 山田俊介  
 ロープ応用登はん 中筋広樹・中林謙介 上野耕輔・河内乾吾  
 ほふく救出 中田考次・庄司一貴・辻岳史  
 草嶋伸也・勝庸一・加賀山達也  
 引揚救助 松井謙佑・井上扁雄・宮本佳一・富田有晴・梅崎直樹  
 瀬井智雄・古川哲也・古川誠・岩本穂・吉田大輝  
 ロープブリッジ救出 山本亮平・橋知哉・西原隆史・多鹿公哉  
 岩倉徹・杉本拓磨・馬田健太郎・赤松宏章  
 障害突破 南浦将樹・谷本佑太・櫻井辰悠・政田達彦・酒井大輔  
 高松弘毅・三木博文・塩本智之・石井由真・平松昌基  
 複合検索 進永直生 百本佳祐  
 基本泳法 高瀬晋太郎 竹内悠太  
 溺者搬送 石丸亮介・津田智哉 原田良平・加藤諒  
 水中結索 進永直生・伊東真司・大西純平  
 百本佳祐・古澤健太郎・竹内悠太  
 溺者救助 木村賢太・柳瀬貴之・古澤健太郎  
 石丸亮介・宗賢優弥・津田智哉  
 人命救助 先瀬朗・西別府稜・加藤諒  
 大西純平・木崎義紘・古澤健太郎  
 水中検索救助 高瀬晋太郎・先瀬朗・山中亮人・横山貴幸

## 第46回

近畿地区指導会 平成29年7月22日 兵庫県立広域防災センター 陸44名 水32名参加  
 全国大会 平成29年8月23日 宮城県総合運動公園 グランディ・21 陸5名 水11名参加

種目 参加隊員  
 ロープブリッジ渡過 今津初夫 角野公彦 田中裕樹  
 ほしご登はん 芳賀佳祐 清水翔太 山田俊介  
 ロープ応用登はん 吉田真悟・高松由 上野耕輔・河内乾吾  
 ほふく救出 庄司一貴・勝庸一・濱田隆志  
 草嶋伸也・村上拓也・河島弘和  
 引揚救助 富田有晴・野田航一・宮本佳一・松井謙佑・三木博文  
 岩本穂・古川哲也・古川誠・瀬井智雄・濱野勝一  
 ロープブリッジ救出 岩倉徹・山本亮平・柿木和哉・藤原圭一  
 伊東真宏・橋知哉・馬田健太郎・多鹿公哉  
 障害突破 櫻井辰悠・南浦将樹・塩本智之・政田達彦・酒井大輔  
 高松弘毅・谷本佑太・平松昌基・石井由真・梅崎直樹  
 複合検索 進永直生 百本佳祐 福田力  
 基本泳法 古澤健太郎 木村賢太 高瀬晋太郎  
 溺者搬送 石丸亮介・古澤健太郎 原田良平・津田智哉  
 水中結索 進永直生・伊東真司・木村賢太  
 高瀬晋太郎・古澤健太郎・大西純平  
 溺者救助 竹内悠太・小西洋輔・伊東真司  
 石丸亮介・宗賢優弥・津田智哉  
 人命救助 先瀬朗・西別府稜・福田力  
 大西純平・柳瀬貴之・津田智哉  
 水中検索救助 竹内悠太・先瀬朗・山中亮人・百本佳祐

### 全国大会出場

ほふく救出 中田考次・庄司一貴・辻岳史  
 基本泳法 竹内悠太  
 溺者搬送 石丸亮介・津田智哉

### 全国大会出場

障害突破 櫻井辰悠・南浦将樹・塩本智之・政田達彦・酒井大輔  
 古澤健太郎  
 人命救助 大西純平・柳瀬貴之・津田智哉  
 水中結索 進永直生・伊東真司・木村賢太  
 溺者搬送 原田良平・津田智哉  
 石丸亮介・古澤健太郎

## 第47回

近畿地区指導会 平成30年7月21日 西日本豪雨災害のため中止（抽選）  
 全国大会 平成30年8月24日 京都市消防活動総合センター  
 （台風20号により中止）

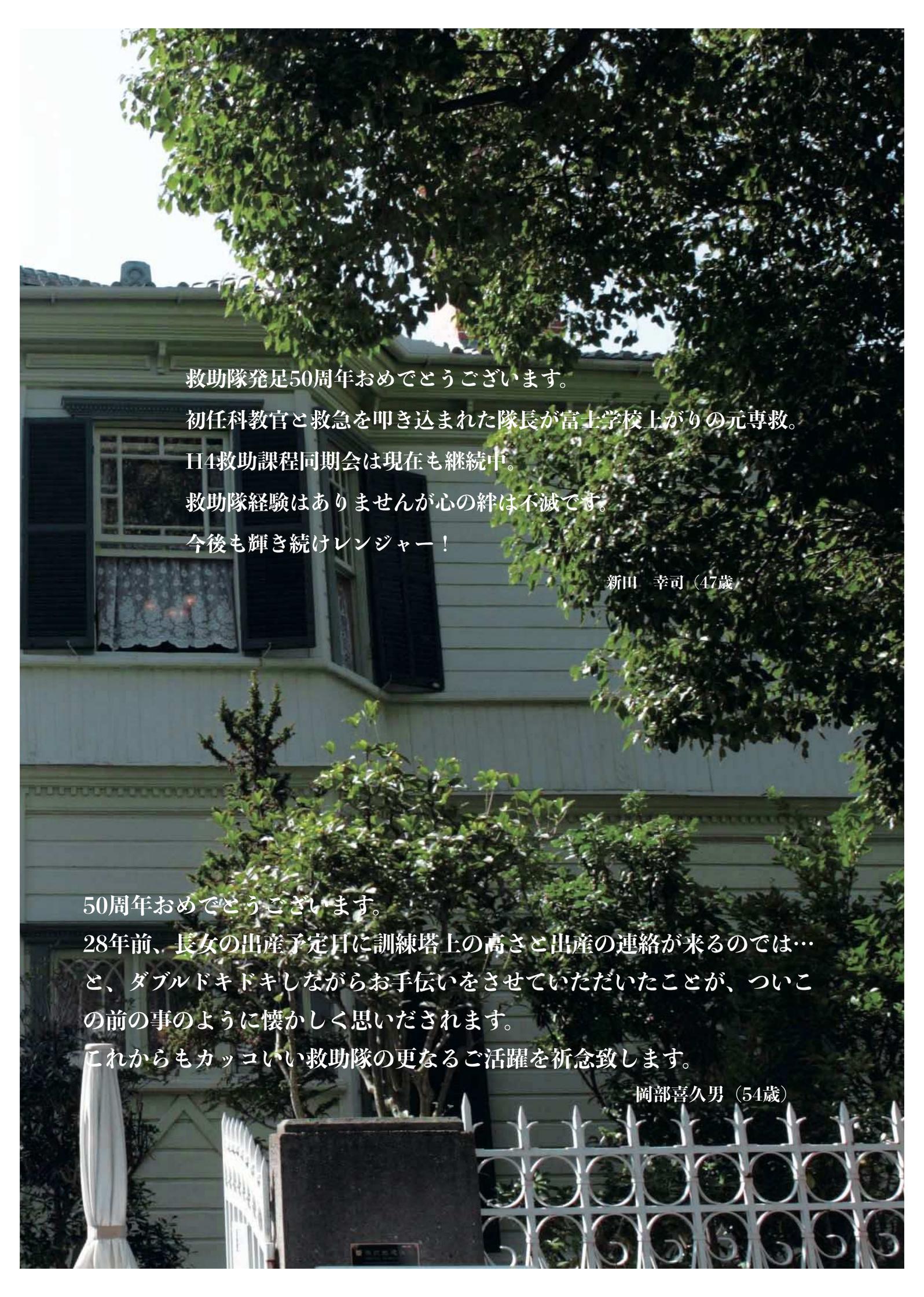




救助隊発足50年の歴史の中で、救助大会がその精神的・技術的な向上に果たした役割は非常に多くのものがありました。技術を習得し訓練をクリアする精神力とそれを実行するだけの体力を磨き、個人的なスキルを高め、連携訓練ではチームを組み、仲間との信頼関係を築きあげチームとして成熟し本番に挑み、他本部の救助隊員とも切磋琢磨することで救助隊員としてお互いをリスペクトしあう関係を作ってきました。先輩職員から心と技術の伝承を受けることで、救助隊員としてのプライドの醸成と技能の向上が果たされてきました。これから、何度か救助大会は見直しや存在意義が検討されることがありますが、これからも救助隊員の成長の場として続いていくことでしょう。







救助隊発足50周年おめでとうございます。

初任科教官と救急を叩き込まれた隊長が富士学校上がりの元専救。

H4救助課程同期会は現在も継続中。

救助隊経験はありませんが心の絆は不滅です。

今後も輝き続けレンジャー！

新田 幸司（47歳）

50周年おめでとうございます。

28年前、長女の出産予定日に訓練塔上の高さとお産の連絡が来るのでは…と、ダブルドキドキしながらお手伝いをさせていただいたことが、ついこの前の事のように懐かしく思い出されます。

これからもカッコいい救助隊の更なるご活躍を祈念致します。

岡部喜久男（54歳）

# 未来に向かって





# 最新救助技術訓練

兵庫県下消防長会救助技術研究会救助作業部会（以下「作業部会」という）

## 【目的】

救助作業部会は、兵庫県下消防長会救助技術研究会実施要綱第4条第2項に基づき設置し、救助活動等の研究を行い、県下救助隊の知識及び技術の向上並びに活動の統一を図ることを目的としています。

兵庫県では平成21年度から、各ブロックより選抜された数名の救助隊員が集結し1年間をかけて県下統一及び県下の隊員同士の顔が見える関係を築くため、テーマを決め研究を続けています。

Confined Space Rescue(CSR)  
狭隘空間における救助・救急活動

## CSR訓練（平成21年度）

狭隘空間における救助活動において必要となる基本的知識と技術を検証し、県下救助隊員の共通認識事項の統一化を図ることを目的としています。内容は保温保護、進入活動、狭隘活動、傷病者観察の4項目です。

当作業部会では、基礎的知識と技術を習得するとともに、県下救助隊員の救助技術の統一化を図るための資料を作成しました。

参加隊員

中垣伸弥・今中憲弘・南兵衛（平成21年度）



## ブリーチング（平成21・22年度）

USAR技術のうちのひとつである「ブリーチング」を研究・検証し、各消防本部が保有する資機材を使用した方法を確立して県下の統一手法とし、また訓練を通じて県下消防本部の連携力の向上を図ることを目的としています。

※Urban Search And Rescue (USAR)

都市型搜索救助

内容は下方向へのダーティーブリーチング、クリーンブリーチングと横方向へのダーティーブリーチングです。

すべての手法において、以前に比べて大幅な時間短縮が図られ、また県下消防本部としての統一した手法が確立され、訓練を通じて県下消防本部が顔の見える関係を構築することができました。

参加隊員

村上圭・寺神貞憲・後藤宜徳（平成21年度）

松本貴士・寺神貞憲・前田征治（平成22年度）



## パイプサポートショアリング（平成22年度・平成23年度）

建設資材を用いたショアリング技術の研究を継続して行い、建物の倒壊・崩落を未然に防ぐための効果的な設定方法について検証するとともに、各種資料を作成して建物火災で活動する隊員の安全を確保すること及び危険判断能力の向上を目的としています。

内容は、倒壊危険状況判断資料の作成とパイプサポートショアリング設定要領となっています。

当作業部会で考察した技術により100%の安全が確保されるわけではありません。

しかし、火災現場での倒壊・崩落事故を未然に防ぐための技術の一つがショアリングであり、それを施すことによって活動隊員の安全率が向上すると考えております。

今後、各消防本部においてパイプサポートショアリングの技術が導入され、積極的な現場使用が行われることで活動隊員の死傷事故を減らし、隊員の精神的負担が軽減されることでしょう。



参加隊員

片岡伸太郎・菅原聖治・山本一利（平成22年度）

片岡伸太郎・安部吉師・永井康道・伊関将司（平成23年度）



## 火災対応救助（平成24・25年度）

アメリカで行われている火災活動時における隊員の危機的状況に対応する技術を習得した専門の部隊「RIT/RIC」といった取り組みを参考に、火災活動時の「危機的状況」を目前にしたときに何ができるのか、仲間を救い出すためにはどうすればよいかを検証し、技術を紹介することで、火災現場での殉職者をなくすことを目的としています。

火災対応救助という技術は、活動する上で基本としている「安全を第一に」という考えは最低限とし、迅速性に特化して「危機的状況に陥った場合に活路を見出す手段」「危機的状況を回避するためのバックアップ」と位置づけるものです。今までどおり事故を起こさない現場活動を行うことは当然であるが、我々が活動する火災現場に「絶対の安全はない」ということを再認識し、『危機的状況を回避するためには安全と確実の重要度を低下させてでも迅速を優先するときがある』『フル装備の隊員を救出することは非常に困難であり、救助する側の隊員が更なる危険に陥る可能性もある』ということを確認する必要があります。

火災対応救助に取り組むことで、更なる安全に対する意識向上につながることで、火災による殉職者がなくなることを願います。

※Rapid Intervention Crew (RIC) /Rapid Intervention Team(RIT)

自身や仲間が災害現場等で脱出困難になった場合、緊急的に編成、救出活動する隊。

### 実施内容

- ・セルフサバイバル  
自分自身が不測の事態に陥った際に生き残るための対処方法
- ・チームサバイバル  
2名以上の隊員で屋内進入、そのうちの1名が受傷し、自力脱出不能となった場合に残った隊員で仲間を救出する方法
- ・パニックコントロール  
危機的状況に陥った際、パニックに陥らないための対処方法
- ・メーデーコール  
外部に緊急事態であることを伝え、救助を要請する方法

### 参加隊員

結城康之・松本隆年・柏原剛・広内実（平成24年度）

結城康之・松本隆年・高見洋輔・古川誠（平成25年度）



## 交通救助（平成26年度）

各消防本部で、交通救助に対するソフト・ハード両面で研究及び強化が図られているところですが、『大型バス・トラック等の交通救助』ならびに近年の社会情勢や普及率の変化から懸念される『ハイブリット自動車や電気自動車の事故対応』の2項目について、どのようなアプローチが安全・確実で、より迅速に救助活動を行えるかを研究・検証することを目的としています。

交通救助の事故形態は様々であり、一様にマニュアル化するのではなく検証訓練結果報告として、また、ハイブリット車交通事故対応研修においては、研修を踏まえて車両構造、電気・耐電保護具及び検電器についての報告書、現場活動モデルを作成することで、県下救助隊員の知識の引き出しが一つでも増えることを願います。

### 実施内容

- ・大型バス・小型トラックの牽引・持ち上げ・破壊訓練
- ・電気及び耐電衣の基礎知識
- ・ハイブリット車及び電気自動車の基本構造と操作要領
- ・ハイブリット車の交通事故対応訓練

### 参加隊員

田中幹人・宮中智弘・北濱雄一・赤松宏章（平成26年度）



## 搜索救助（平成27年度）

消防力が劣勢となる大災害で、一人でも多くの命を救うためには、効率的な搜索活動を実施し、要救助者を早期発見することが求められます。そこであらゆる災害に対して搜索活動を効率的に実施するため、搜索救助に関する概念や知識及び技術向上することが目的です。

当作業部会は、兵庫県内の災害事例等における教訓や課題抽出し、さらにアドバイザーを招き先進的な知識・技術に関して研究、搜索救助の活動要領に関する検討を実施して作成しました。

兵庫県下の搜索救助に関する共通認識を統一するため、搜索救助活動『共通』ではあらゆる災害に共通した搜索救助の基本を記載し、『災害別』では『火災』『山岳』『水難』『大規模災害』の発生を踏まえた、具体的な初期対応の安全管理や搜索方法等に関する知識・技術を記載したものを作成しました。

この搜索救助活動要領を使用することで、兵庫県下緊急消防援助隊等の活動統一を図ります。



参加隊員

香西辰哉・田中和宏・濱野勝一・勝庸一（平成27年度）

Confined Space Rescue/Medicine(CSR/M)

狭隘空間における救助・救急活動

## CSR/M（平成28年度）

今一度CSRについて振り返りを行い、県下救助隊員のスキル向上を目指すとともに、今後救助隊とともに救急や医療が狭隘空間内において、連携した活動が行えるようになることを目的としました。

訓練内容は作業部会員のCSR/M活動のスキルアップ、CSR/M活動手順書の作成、CSR/M活動に役に立つ資料の作成です。

「TIMELINE」を作成するにあたりDMAT隊員養成研修への参加や医療関係者の講義を得て、医療の知識の向上を図ることができました。現役の救助隊が現在考えられるCSR/M活動を現場到着から要救助者を医療機関へ引き継ぐまでの時系列で表した活動手順書となる「TIMELINE」及び「TIMELINE行動要領」を作成しました。



参加隊員

立脇龍也・鹿島周平・入田優・高松由（平成28年度）



## 建物構造と崩壊メカニズム（平成29年度）

大規模な地震災害時に我々救助隊が活動するであろう倒壊建物には、多数の危険要因が存在し、常に二次災害発生の危険と隣り合せにあると言っても過言ではありません。このような現場で活動するための技術（CSR/Mやショアリング等）は研究され確立されてきましたが、その前段階にある進入可否の判断材料が肝要となります。そこで、倒壊建物の構造や状態を的確に把握、弱体箇所を認識し、二次災害に起因する自重や余震による再倒壊の危険性を評価したうえで、リスクの少ない救助活動の推進につなげることを目的とします。

研究及び専門家等の講義や助言を得ることで、災害現場で直感や感覚だけに頼ることなく、客観的かつ具体的根拠を基に決定するための判断材料として「倒壊木造建物の状況把握シート」を作成することが出来ました。本シートは進入に関する唯一の判断材料ではなく、一つの判断材料として活用することで、的確な進入判断の決定と隊員の二次災害防止につながり、安全・確実・迅速な人命救助が実現できることを願います。

### 実施内容

- ・木造建物の構造と崩壊メカニズムについて
- ・倒壊パターンからの危険予測する方法
- ・進入アプローチ方法
- ・現場活動における進入可否の判断材料となる資料作成
- ・倒壊木造建物の状況把握
- ・活用手順及び状況把握におけるポイント

### 参加隊員

松上倫也・辻岳史・南兵衛・河島弘和（平成29年度）

	リスク	着眼点
① 土台から傾くパターン	土台から柱が抜けている。 土台と柱を固定する金物が効いていない。 基礎と土台を固定するアンカーボルトが抜けている。 土台そのものが割れている。	外壁の被覆部分、内壁側に柱の柱脚部のでっぱりがないか。 外壁めくりによる確認（柱の部分をはがす。） 基礎と土台に隙間があるか。 基礎の立ち上がりにはび割れがあるか。
② 1階、2階で九の字型（1階崩壊型）	1階柱の柱頭部が被害を受けている。 基礎の浮き上がり	天井めくりによる確認（梁と柱頭部に隙間がないか。） 接地面にひび割れ、基礎底面の浮き上がりがいないか。
③ 1階、2階で九の字型（2階崩壊型）	通し柱が折れている。 行、梁から2階柱が抜けている。 2階耐力壁の損傷 2階庇の破断、抜け 2階柱頭部が被害を受けている。	高角部の1階柱頭部のささくれがないか。 1階上部の外壁の剥がれがないか。 2階外壁の損傷具合、妻側壁面に注意（壁が、崩らんでいないか。） 2階外壁の損傷具合、妻側壁面に注意（壁が崩らんでいないか。） 軒下の部分に目が出していないか。



## 実践的ロープレスキュー（平成30年度）

高所救助活動及び低所救助活動における救出困難な場面及び状況を抽出し、それらをクリアする手法及び方策を検証するとともに、高所及び低所以外のロープレスキューに付随する技術及び手法を研究することで、県下救助隊員の救助技術の向上を図ることを目的としています。

研究内容は、高所救助・低所救助・その他の救助事案の救助活動事案を3つのグループに分かれ現在実施研究中事案です。

### 参加隊員

梅崎直樹・乾翔太郎・櫻井辰悠・清水翔太（平成30年度）



Progress toward the Future

# 最新救助資機材

救助隊では法令に伴い保有しなければならない資機材があります。（約300種類）その中でも、現在特別高度救助隊（スーパーイーグルこうべ）が保有している高度資機材と今後活動が期待される資機材の紹介をさせていただきます。

## 特別高度救助隊（SEK）保有の高度資機材

### 二酸化炭素探査装置

二酸化炭素探査装置は、生体の呼吸により排出される二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）および排泄物や腐敗臭からのアンモニア（NH<sub>3</sub>）の検出及び小型カメラの映像確認により、密室や瓦礫等に閉じ込められている生存者を探索をする資機材です。



### 画像探索機

画像探索機は、工業用ビデオスコープとガス検知収納ケース、チューブユニットを組み合わせて使用することにより、倒壊建物の内部環境を測定することや、生存者を探索することが出来ます。また、空気ボンベからの送気や内部の温度測定が可能です。



### 電磁波探査装置

電磁波探査装置は、倒壊した住宅、瓦礫等の中に微弱な電波を放射し、その反射波を解析することによって埋没した生存者の呼吸や体の動きを波形画像として表示、検出することにより、生存者を探索します。



### 地中音響探知機

崩壊した建物の下や身動きの取れない状況下にある生存者を探索してその居場所を検知するための探知機です。振動センサーと音響センサーの2つのセンサーを備えており、振動センサーは、建物の構造部材を通して伝わる生存者の動き、または救助を求める行動により生じる振動を検出します。音響センサーは、周辺の音を検出します。



### 熱画像直視装置

熱画像直視装置は、周囲の対象物から放射・発生した熱エネルギーを見える画像に変換し、火災現場や夜間等の災害現場において、要救助者の探索や、火源の発見等を行うことができます。



### 夜間用暗視装置

夜間用暗視装置は、漆黒の暗闇においても光源を必要とせず、赤外線を照射し目標物の視認を行うことができます。

### 地震警報器

地震警報器は、地震災害時における二次災害を防ぐため、人間が地震を感じる前に地震情報を伝達するP波を検知する事により警報を事前に知らせる機能を持っています。



## 今後活躍が期待される資機材

現在、神戸市消防局では保有していませんが、今後現場活動において有効な資機材です。

なお、重機やドローンは、民間との協定により協力を得ておりますが、迅速活動を踏まえ、今後導入が望まれます。

### 重機

自然災害現場や重量物排除が必要な現場において重機の必要性が非常に重視されるようになってきています。人の数倍の能力で活動できるため、要救助者の発見や救出活動の効率が上がるのが一番のメリットです。重機が必要な現場は、状況が厳しく、非常に緊急度の高いことが予想されます。また、要救助者のすぐそばで重機を扱う必要があるため、救助に関する知識に合わせ、要救助者へ危害を及ぼさないように、正確な操作が求められます。



双腕重機



トラクターショベル

### ドローン

ドローンは、空の産業革命とよばれ、様々な分野において活躍が期待されており、現在では、画像通信から荷物の搬送、建設分野の測量などに活用されています。

災害対応での活用は、ドローンでの俯瞰的な写真が、広範囲で発生する土砂災害や地震災害発生時に、被害状況が一目で分かり活動方針を決定するのに非常に有効です。

また、NBC災害など危険な物質が存在する場所の情報収集には、ドローンによりガス検知や情報収集ができれば、隊員が進入する前にお状況が把握でき、活動の効率化が図れます。

さらに、ドローンに赤外線センサーなどの高性能なセンサーを取り付けることで、活用の幅は広がると思われ、水難救助現場をはじめ、様々な災害現場での活用が期待されます。



ドローン



水中ドローン



検知型遠隔探査装置



救助ロボット

## 災害救助用ロボット

地震や水害などの災害で現場で救助隊員が立ち入りできない場所において、救助隊員に代わり投入し捜索救助することを目的としたロボットです。現在、開発が進められており要救助者の探索を目的としているものが主流です。歴史的には1995年の阪神・淡路大震災後に研究が始まり、倒壊家屋や瓦礫内の救助をメインに開発が進んでいましたが、2011年の東日本大震災の津波災害をきっかけに水中探索ロボットの開発も始まっています。その他には、原子力災害ロボット等あらゆる災害を対象に開発が進んでいます。現在、文部科学省は「使える災害ロボット」を目指して支援しており、「がれきに埋もれた要救助者を助けるロボット」、「素早く人命救助するパワードスーツ」、「水中での行方不明者を捜索するロボット」の3種の開発を目指しています。

## 土砂災害監視装置

土砂災害現場で活動を行う救助隊員の安全を確保するため、安全監視員以外に、機器等による監視システムが必要となります。

この装置は、再崩落の前兆現象の一つである地面などの動きを監視し、捜索救助活動等における2次災害防止を目的とした監視システムです。

土砂災害対応での捜索救助活動にあたり、上流から再度土砂が流れ出てこないかの監視は、救助隊員の安全確保のために非常に重要です。しかし、現在、消防隊が簡易に扱える監視装置がありません。

私たちも土砂災害の知識を持ち現場対応することは必須ですが、様々な現象を感知し、人間の能力の限界を補ってくれる資機材の登場を期待します。



# 謝

## 特別高度救助・特殊災害第3担当 古市 泰士

私は阪神・淡路大震災を契機に専任救助隊員として災害現場の最前線で活動することを希望しました。消防士になったときからオレンジ服への憧れはありましたが、自分がやりたい、やれると思ったことはありませんでした。

しかし甚大な災害が起こり、何もできなかつた悔しさと自分の無力さを痛感し、やるなら今しかないと自身の環境を変えることを決意しました。

信頼できる仲間と災害に立ち向かい、人命救助というひとつの目的のために妥協を許さない部隊、それが当時の専任救助隊でした。

希望が叶い、平成7年10月に専任救助隊員に任命されました。ただし当初はオレンジ服を着させてもらえませんでした。今思えば、私の仕事に対する姿勢や取り組みを見極められていたのかもしれない。

ひと月ほど経ったある日、隊長に呼ばれ「救助隊員として仕事をするのに服の色は関係あるか？」と問われたので、私は迷わず「服は関係ありません。」と答えました。すると目の前に真新しい救助服が差し出されました。

隊長からは「これからオレンジの服を着て、心地が良いと感じたときは、これまで培ってこられた先輩方に感謝しなさい。逆に悪く言われることがあれば改善して、まわりのみんなが救助隊になりたいと思えるように仕事をしなさい。」と教わりました。オレンジ服を着られることの喜びと、これから着続けることへの重責を感じ、身が引き締まる思いであったことは今も心に残っています。

救助隊員になってからは、厳しい訓練や過酷な環境下での現場活動、また相次ぐ仲間の殉職事故や全国各地で発生する大規模かつ特殊な災害への対応など、すべてが想像を超えることばかりでした。

その都度、救助隊の仕事とは何か、安全とは何か、どう対策するのかなど多くのことを考えさせられました。そのような経験や苦悩して学んだことが自分自身の糧となり、救助隊員としても人間としても成長することができたと思います。

現在も特別高度救助・特殊災害隊で救助業務に携わることができ、多くの仲間と多岐にわたる仕事とあらゆる災害への対応にやりがいを感じています。

神戸市消防救助隊は時代の歩みとともに今日に至るまで50年の歴史を積み重ねてきました。その中で私自身も20年あまり救助隊員であったことを誇りに思い、この節目にあらためて初心にかえり、「心・技・体・知」の研鑽に努めることを決意します。

Kobe

# 辞

救助・特災担当課長  
中谷 明美

消防救助隊発足50周年を迎えて、現救助隊員182名を代表して衷心よりお祝い申し上げます。これもひとえに歴代救助隊員の皆様の救助に対する熱い思いと並々ならぬ努力の賜物であると深く敬意を表します。

この50年を迎えるにあたり、過去の災害歴史や活動事例など消防救助隊の50年の歩みを振り返るとともに、職員一同が未来に向けて決意を新たに、さらなる発展を目指してこの記念誌を編集することとしました。

さて、当市の救助隊は、昭和43年に発隊した消防専任救助隊1隊に始まり、その後発展を続け、現在では特別高度救助隊（愛称：スーパーイーグルこうべ）1隊、航空救助隊1隊、専任救助隊4隊、署救助隊6隊、の合計12隊の消防救助隊に発展しました。

発隊当初は、現在のように災害実態に対応した救助資機材が無く、四輪駆動車に必要な最低限の救助資機材を車載し、その救助資機材を応用して救助活動を行いましたが、現在ではクレーン付救助工作車と約100種類の救助用資機材を活用して市内のあらゆる災害に対応しています。

また、国内で発生した大規模な災害に対しては、緊急消防援助隊の救助部隊として応援出動するとともに、海外で発生した大規模災害にも国際消防救助隊として出動しています。過去にバングラディッシュサイクロン災害、トルコ共和国地震災害へと2回出動し、国際協力を行っています。過酷な災害現場で活動する救助隊員の養成は、昭和41年の陸上自衛隊富士学校での第1期レンジャー訓練に始まり、現在は神戸市消防学校において3週間におよぶ救助課程を実施し、研修修了者も1,081名におよび、本年度は第43期救助課程を実施します。

救助課程は、近年発生する災害形態等に合わせて内容を見直しながら行っていますが、選抜された救助隊員が指導員となりピリピリとした緊張感の中で研修を行うことや、研修の仕上げに深夜の六甲山を出発し、消防学校を目指す「テンマイル走」は先人から受け継ぐ「不撓不屈の精神力」「救助の絆」を養うものとして、現在も受け継いで実施しています。

近年は、社会情勢の変化により都市構造が複雑・多様化、深層化するとともに異常気象により発生する災害も大規模化するとともに過去の経験を超える複雑な災害も発生しています。

それらに対応するため、今後も必要な救助資機材を整備するとともに先端技術の導入に向けて情報収集を行い、知見を深め、救助体制の強化を図るとともに「安全な現場活動」を後世に受け継いでいきます。

歴史ある神戸市消防局消防救助隊が今後益々隆盛なる前途を開拓し、安全の中に勇猛果敢に災害に立ち向かう救助隊員が育ちゆく場であり続けることを心から祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

最後になりましたが、救助隊発足50周年記念事業に携わっていただいた職員の皆様に深く感謝するとともにお礼申し上げます。

Rescue

かぞく  
これからも市民を守る  
*HERO*でありたい



## 未来へつなぐ救助スピリット

神戸市消防局救助隊発足50周年記念誌

発行、編集：神戸市消防局救助隊発足50周年記念事業実行委員会

〒650-0001 神戸市中央区加納町6丁目5-1

TEL 078-325-8522 (消防局警防部警防課)

<http://www.city.kobe.lg.jp>

